

創立八十五年記念
強行遠足沿革誌



1966

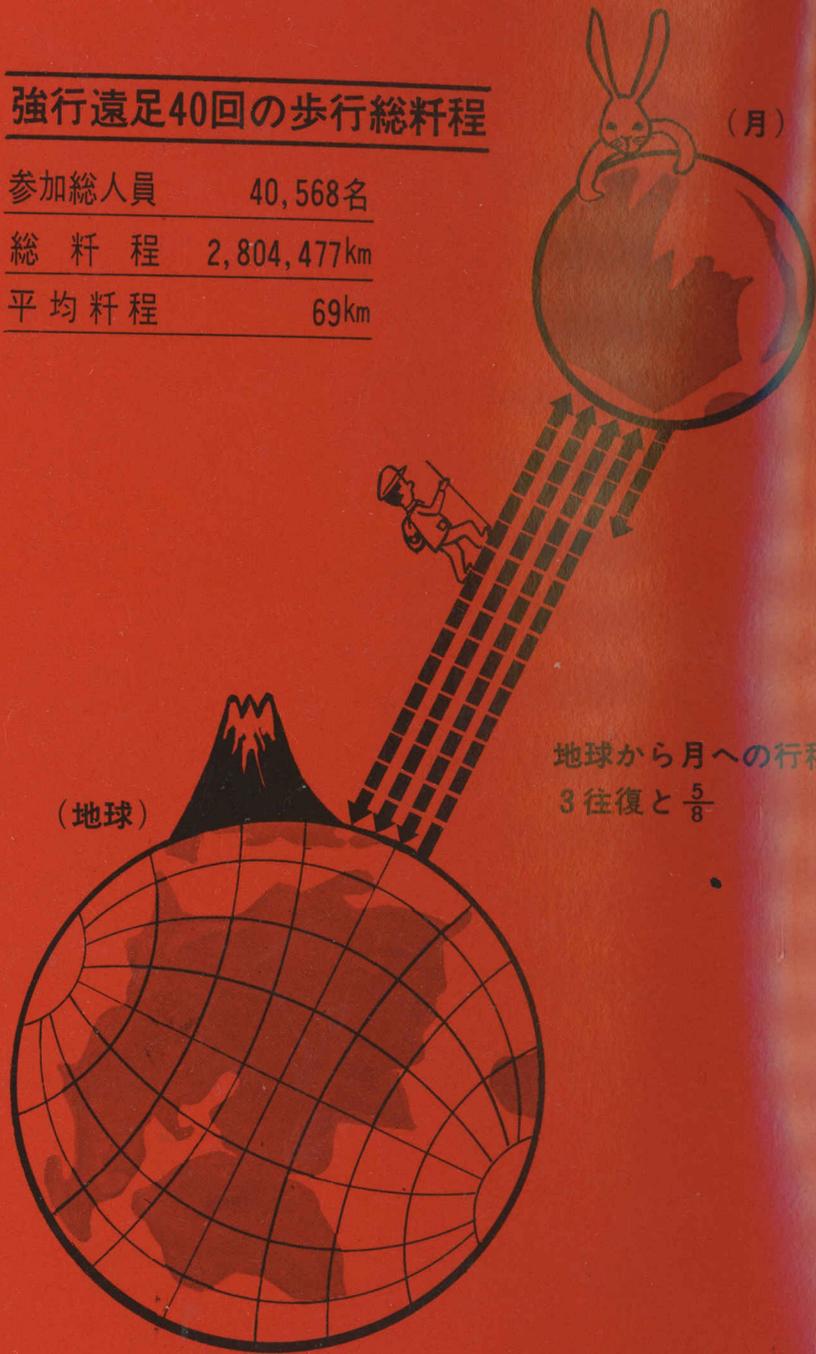
山梨県立甲府第一高等学校

強行遠足40回の歩行総行程

参加総人員 40,568名

総行程 2,804,477km

平均行程 69km



創立八十五周年記念

創立八十五周年記念
強行遠足沿革誌

強行遠足沿革誌

一九六六

山梨県立甲府第一高等学校



1966

山梨県立甲府第一高等学校

強行遠足40回の歩行総行程

参加総人員 40,568名

総行程 2,804,477km

平均行程 69km

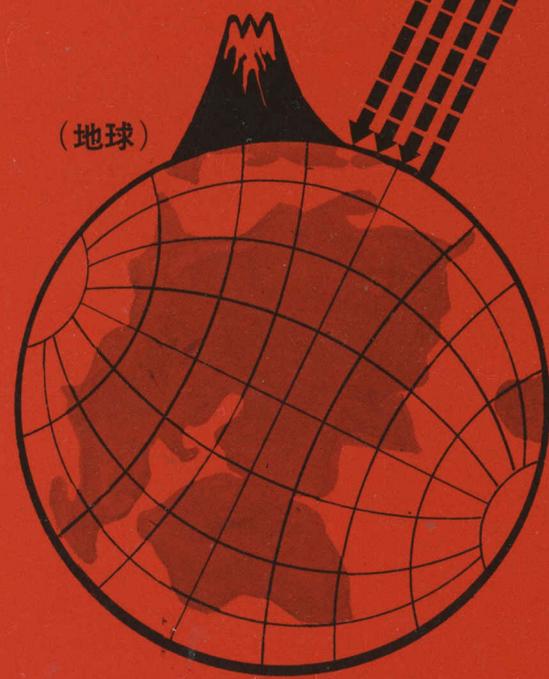


(月)



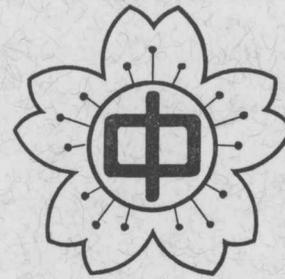
地球から月への行程
3往復と $\frac{5}{8}$

(地球)



創立85周年記念

強行遠足沿革誌



1966

山梨県立甲府第一高等学校

目 次

強行遠足の歌	1
口 絵	4
は し が き	広 瀬 勝 雄 1
強行遠足沿革誌編集に寄せる	飯 島 哲 3
強行遠足に想う	矢 崎 茂 三 郎 4
沿革誌編集にあたりて思う	山 田 茂 8
強行遠足の起源とその趣意	13
沿 革 の 概 要	15
年 表	17
コース変遷略図	19
予行練習会コースの変遷略図	21
小諸方面コース変遷記録	23
各回の歩行距離グラフ表	27
各回最高記録者表	29
強行遠足実施の実態	31
強行遠足に関する「アンケート」	39
各 回 の 記 録 集	43
「強行遠足の意義とその実際」の記録より	83
寄 稿 集	93
強行遠足こぼれ話しのあれこれ	111
編 集 後 記	144

強行遠足の歌 (昭和37年作歌)

◎信濃路はるかに 八田 政 季作

1、空の青さが若人の

汗の雫に映った日

秋の原暮れなずみ

友情を護える諏訪の湖

腕組み合ったそのぬくもりが

過ぎし日の夢と過ぎし日の想いなのだ

歩こう、行こう信濃路を

2、雲の流れが青春の

胸のうれいを消した朝

秋の野辺霜しいて

厳しくもそそり立つ八つの峰

声かけあったあの歌声が

若い日の夢と若い日の想いなのだ

歩こう行こう信濃路を

3、月のかげりが若者の

瞳に希望ともす夜

秋の丘灯のみえて

栄光を目指す一筋の道

脚揃え合ったこのかたまりが

目指す日の夢と目指す日の想いなのだ

歩こう行こう信濃路を

◎歩みをいざ 渡辺 弘作

1、八ヶ嶺の山ふところに

美しく いろどる もみじ

雲白く山川清き信濃路の秋をたずねて

たくましく歩みをいざ

われ等甲府一高生

2、同窓の心に深く

刻まれし想いも新た

日新の歴史とともに心身のかぎり尽して

はるかなる歩みを いざ

われら甲府一高生

3、山鳥の鳴く夜更けて

結ばれし心と心

輝ける明日に向いて朝晩は雲の彼方へ

たしかなる歩みをいざ

われら甲府一高生

(作曲は両方共芦沢正己氏)



信濃方面コース点描(松本城)

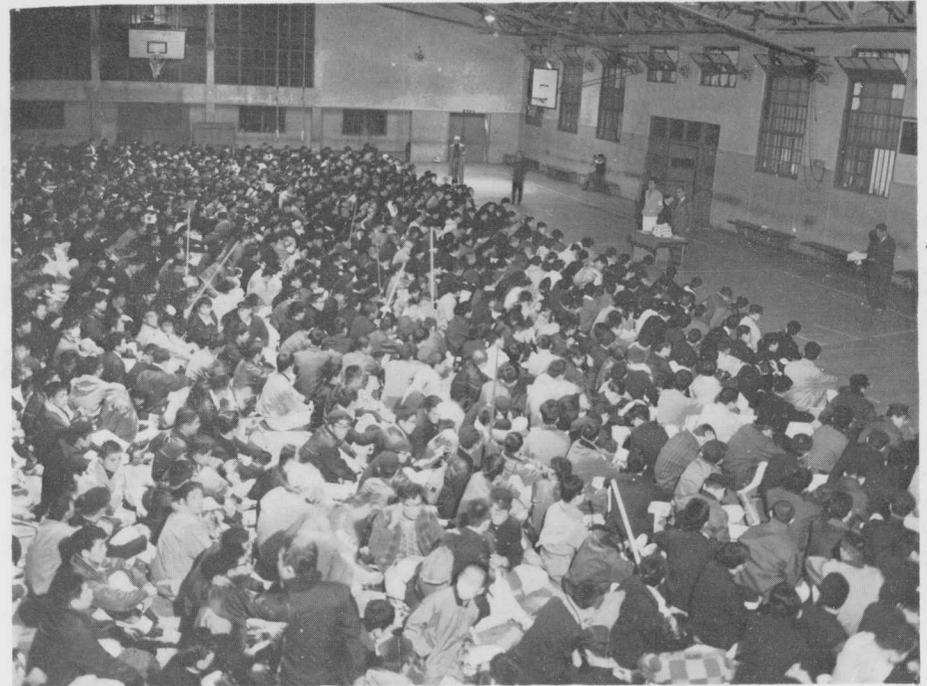


小諸方面コース点描(小諸懐古園)

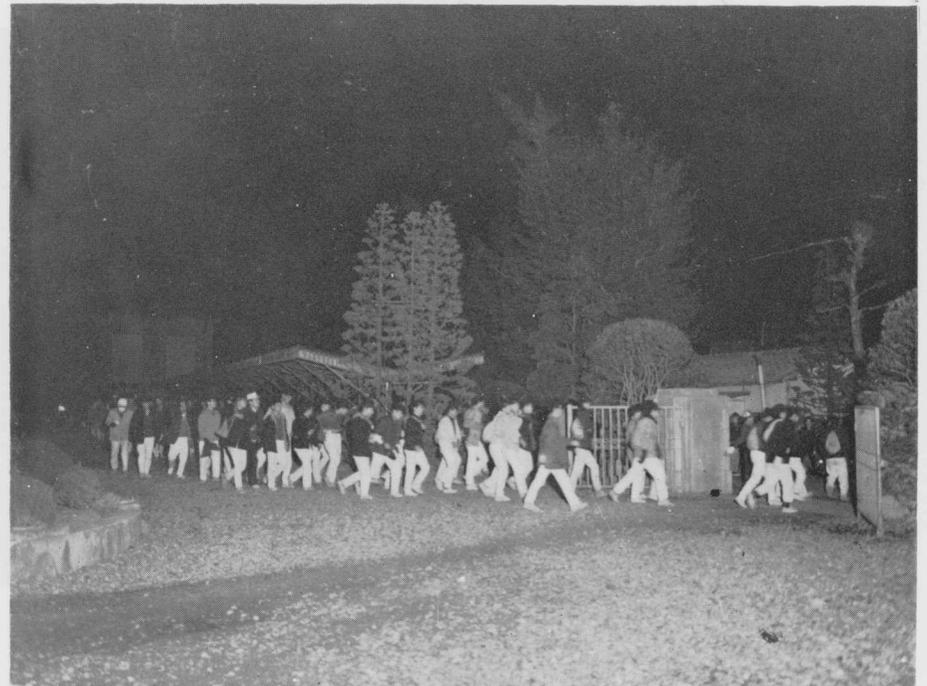
千曲川旅情いづた
 小諸古古城しんと王を白く遊子
 かなしむみこす奈すてこももす
 こらくもとくすよしせしむるふし
 ならずし。不ラへ口とゆもあはを流る
 あたしの手先もあれ。乃みげも香る
 来らずあさこのみ来すこすみてむもいも
 漢うまをし旅人のむれもへいげう高すし
 道はひるそめさのゆけもあさも見ふす
 う古すあし伝久し草苗千曲川のやうす
 漢い草をかきやまを乃れまはすこす
 さいわい飲みもまらさしをさしなくやむし
 島崎雪村

任漢終しむちして三詩一
 一つ改まるす

小諸方面コース点描(千曲川旅情の歌—藤村詩)



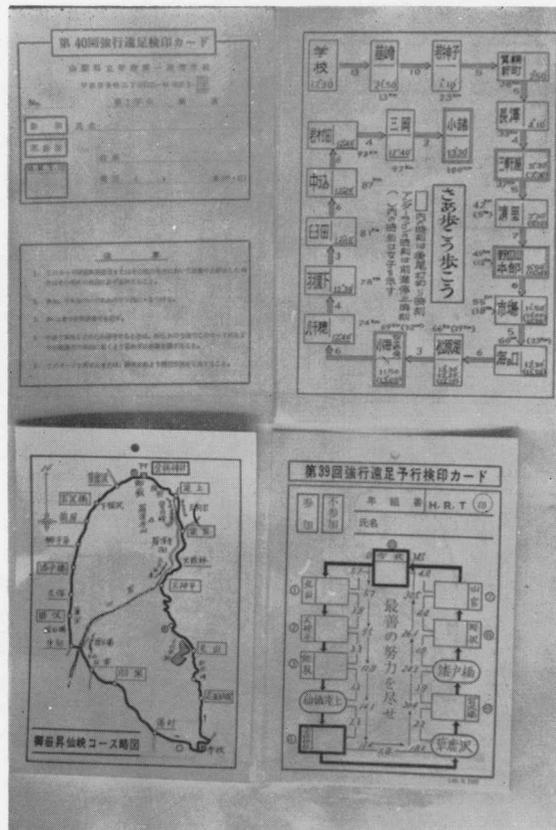
体育館集合風景



出発風景

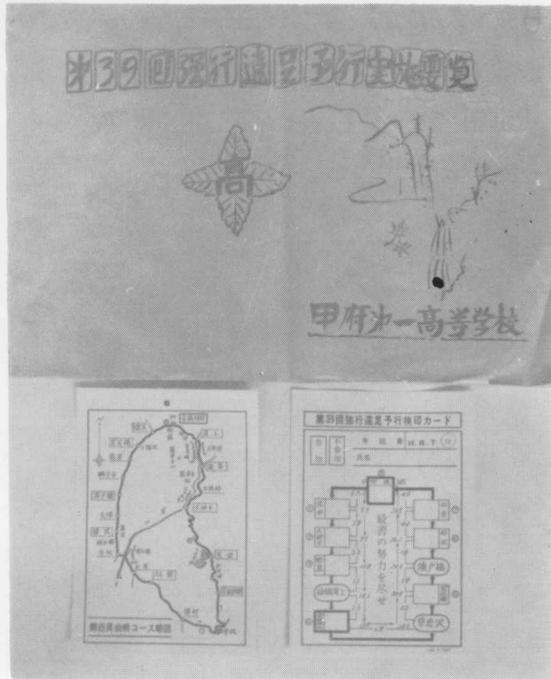


検印所風景



1. 毎回カードは学年別に色別とした。
2. 従来の到着地の証明は駅名であつたが現在では到着地とした。
3. 上段は本番のもので下段は予行のものである。

実 施 要 覧



- 1、上段は本番のもので左下は職員用、上は生徒用である。
- 2、下段は平行のもので職員と生徒用のものである。

各 回 記 録 綴



第1回、2回の記録綴は不明です

第3回から現在第40回までの記録綴の写真ですが、回を追うに従って内容が複雑になったせいか、その綴も厚くなつて居ります

甲府中学校時代は第24回（昭和23年）まで、以後は甲府第一高等学校時代のものです。

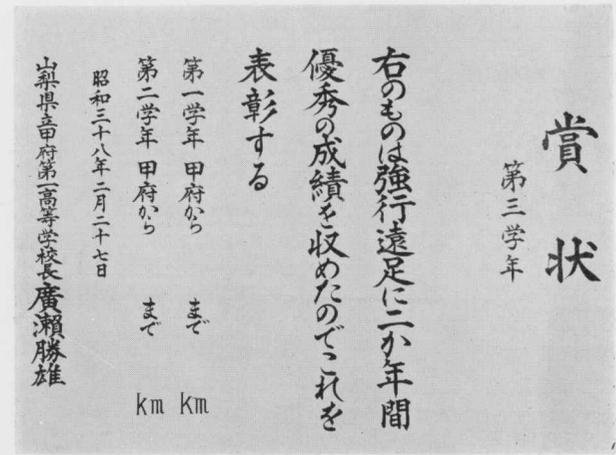
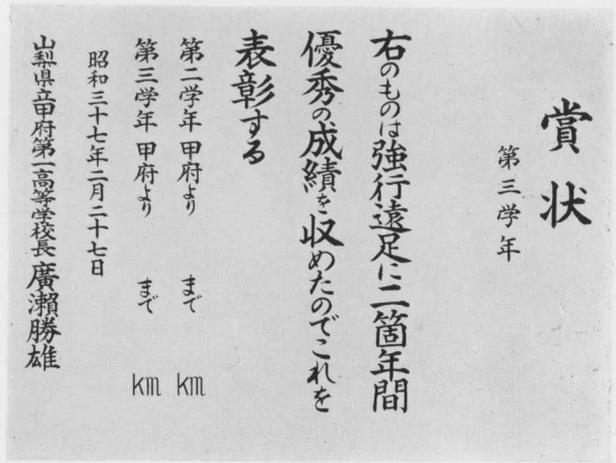
メダ ル



この写真の外にも多数製作されたわけだが現在手許にあつたものをその一例として掲載しました。

- (1)は 創立70周年記念参加章
- (2)は 昭和16年頃の優秀賞
- (3)は 歴代の優秀賞
- (4)は 創立80周年記念参加章
- (5)は 創立80周年記念優秀賞(楯)
- (6)は 創立85周年記念参加章(キーホルダー付)

賞 状



表彰制度のあつた時代には、いろいろの形式の賞状があつたようだが、近年までは松本以遠三ヶ年連続到着者に対しては卒業時に賞状を授与した
昭和37年(小諸コース)より表彰制度を廃したが、旧コース2ヶ年の者に対しては切替処理として上掲のような賞状を授与した
写真はその一例として掲載したものである。



強行遠足創始者、江口俊博先生

本校の強行遠足は、もはや全国的に有名になっているが、しかしその創始者が誰であるかは、最近の諸君には余り知られていないことをまことに遺憾に思うのである。今こゝに、ご紹介する次第であるが、本校強行遠足の創始者は、実に江口俊博先生その人であったのである。

先生の生国は熊本県である。東京帝国大学をご卒業後、新潟県立の新設の小千谷中学校長を振り出しに、広島中学、長野中学の各校長を歴任し、大正12年に本校の校長として赴任されてきたのである。その教育方針とされた「質実剛建」を校訓として掲げ、自からは実践窮行の範を示されたのである。特に「歩く」ことについては人一倍ご造詣が深かった由である。

大正13年のことである。時の文部省から、全国中学校に対して「明治節（11月3日）を祝うことから、この日を中心として各学校では、何か有意義な体育行事を実施せよ」との通達があったのである。そこで江口先生は即座に「歩く」ことを提唱され、11月4日を本校の体育日と定め、この日には全校こぞって「歩く」ことを実施したのであった。

この行事こそ、実に今日行われている強行遠足の、そもそもの始まりであったのである。

先生は昭和8年には全校職員、生徒及び同窓生に惜しまれつつ本校を去られ、既に故人となられているが、その名はこの強行遠足の続く限り、永遠に生きていることであろう。現在40回を数えるに至ったこの強行遠足を、地下に眠る先生の霊は如何にご覧になられているであろうか……。定めし満足され、又感無量のことであろうかと思われるのである。私共は心から、こう念ずるのである。

「地下に眠る先生の霊よ。先生のご意志を継いで今日まで伝承されてきたこの強行遠足を、そして大地を踏みしめて、力いっぱい歩く若人の足音を、とくとご照覧あれ」と。

賞状

賞状

第 回強行遠足

甲府より

まで

第 学年

料

右の者は頭書の行事において
優秀の成績を収めたので
これを賞する

昭和三十年 月 日

山梨県甲府第一高等学校長

賞状

第三学年

右は女子強行遠足に
二か年連続して参加しよく
その目的を遠成したので
これを表彰する

昭和三十八年二月二十七日

山梨県甲府第一高等学校長 廣瀬勝雄

は し が き…………… 広 瀬 勝 雄
強行遠足沿革誌の編集に寄せる…………… 飯 島 哲
強行遠足に思う…………… 矢 崎 茂 三 郎
沿革誌編集にあたりて思う…………… 山 田 茂





はしがき

学 校 長

広瀬勝雄

創立八十五周年の記念事業の一つとして、ここに強行遠足の沿革誌がまとまった、まことに意義深く、よろこばしい快挙である。

この書は、四十回にわたる甲中、甲一の健児が、その精根をかたむけて行なった強行遠足の資料の中から、生きたこの歴史を物語る若きいのちのあしおとを長く世に伝えるための記録である。

おそらく、本校が存在するかぎり、つづけられるであろう強行遠足であり、その将来の発展のためによき指針となり、また世のために広く活用される貴重な資料となるであろう。思うに、

強行遠足のもつ教育的意義は深遠かつ雄大である。大正十三年、江口校長によって創始されてから今日にいたるまで実に四十有余年、その間歴代の校長、職員、生徒によって、一筋にかたりつぎ、行ないつがれて継承されたのである。しかも、年とともにさかんになり、本校における伝統的行事として欠くことのできないものとなったのである。

強行遠足に注ぐ生徒の情熱と、またこれにとりくむ真摯な姿を思うとき、この行事のもつ教育的意義をいよいよ深く思うのである。

強行遠足のころともなれば、夜空に輝く小さな星をみても生徒はこころがいさみ、身うちにあついものを感じずという。先輩は、高校生活の思い出の最たるものは強行遠足であると端的にいう。まことに、強行遠足は本校生徒の心の奥深くに、洗礼にも似たつよく、たくましいしるしを刻みつける行事である。

月の光が冴え、晩秋の夜ふけの風はつめたい。八ツ高原の白い道を、北極星にまむかい小諸めざして黙々と歩む一高生の群、痛む足をひきずり、友をいたわり、みずからをはげまして進む。野辺山本部では、熱いしじみ汁で激励され、また歩みつづける。

千曲川のあたり、もみじ色深かみ、白々と明けゆく空にたちのぼる浅間の噴

煙もみえる。信濃路の人のこころのあたたかさが、ひとしおつよく身にしむころである。

こうして、徹夜の修行をともにして、心身の力のかぎりをつくしてみずからをきたえる行事が強行遠足である。まさに人生航路の縮図ともいえるであろう。しかも、この大行事が大きな事故もなく、四十回もつづいたということはまことに奇跡ともいふべく、不思議ともいわざるをえない。貴い本校の伝統精神である。いよいよ深遠、雄大となることをいのる。

さいごに、この沿革誌に貴重な資料をおよせくださった方々に厚くお礼を申しあげる次第である。



強行遠足沿革誌に寄せる

PTA会長 飯島 哲

私は昭和8年度の卒業である。在学中私は剣道部の選手として専ら剣の道に励んでいたが、この強行遠足にも毎回張り切って参加したものである。

今回母校創立85周年記念行事の一つとして「強行遠足沿革誌」の編集を聞きまことに時誼を得た企画であると、心からその成功を祈るものである。聞くところによれば、今までに当回の記録を小冊子として発行した年もあったそうであるが、今回のこのような第1回から第40回までの長い歴史を編集するのは強行遠足創始以来の壮挙である。私共卒業生としても又PTAの立場からしてもこの沿革誌の発行により本校の伝統ある強行遠足の真の全貌をうかがい知ることが出来るものと期待するものである。

そもそもこの強行遠足は遠く大正13年の昔、明治節を祝して開始されたものと聞いていたが、これが昭和40年の今日まで連綿として伝承されてきたのだが日本広しと雖も他には類を見ない稀有な事実である。

このように長く継続された一つの理由は、その真意とするものが、単に記録や、脚力の強さを争うばかりでなく、精神陶冶を目標として行われてきたことに起因するものであると思うのである。

たとえ実施方法は時流とともにその内容を変えたとしても、歩くこと自体は昔も今も何等変るところは無いのである。20有餘時間の間、夜を徹しての難業苦業は今日でも尚続いているのである。

「可愛い子には旅をさせよ」の諺の通り、又「百錬の鉄」は名刀を生む如く、すべからく人間は肉体的に精神的に鍛へなければ、所謂筋金入りの人間には成長し得ないであろう。

強行遠足に際し、子供達がいつ果てるともない長い遠い路を、困難に耐え、困苦を忍び、黙々として歩き続けるあの真実な姿の中に、限りなく強い精神力を発見する時「正に人生の試錬に耐え人間形成の第一歩を歩き続ける姿」を思い浮かべ、私はまことに頭の下がる思いに打たれるのである。

このような「強歩の精神」は子供達への感化に陰に陽に素晴らしい効果をもたらしているのではないかと思うのである。

最近「根性」と言う言葉が盛んに使用されるようになったが、実は本校では既にこの強行遠足に於いて使い古された言葉に過ぎない。又根性の真意は単にスポーツばかりではなく、学問の面やその他日常生活の面に於ても生かされなければならないが、この「根性」の一つの修業道場とも言へるものがこの強行遠足ではなかろうか。

この沿革誌の中に流れる歴史の一駒一駒の無言の教えが、今後の子供達の学校生活は勿論、家庭生活、或は社会生活に於ける精神活動の根元を示し又人間生活のあり方の一端を示す教書と成り得れば、その意義はまことに大と言わねばならない。

私共PTAに於いてはこのような意味からも、出来る限り立派な内容を盛った沿革誌を編集して戴けるよう予算措置をも講じ、その完成には心から協力を惜しまないのである。

今こゝにこの沿革誌の発行を見ることはまことに喜びに堪えぬのであるとともに、この編集に終始精魂込めてあたられた関係者各位に対しては心からなる感謝の意を表すものである。

追記

畏友佐野弘吉氏（NHK理事、昭和8年甲中卒）の尽力により、今回の強行遠足がスタジオ102にとりあげられ全国放送されました。ここに心から同氏に感謝の意を表します。



強行遠足に想う

同窓会長 矢崎茂三郎

母校の強行遠足が本年で40回にわたり継続して実施されていることについて先ず驚ろかされるのである。

私が卒業して何年か経てから、甲中では強行遠足と言うものをはじめたそうだが、誰れそれはどこまで歩いたとか、いろいろの噂を聞くようになってきたがまさかこのように長く続くとは考へても見なかったのである。このように長く続いたと言うことは、そこに何等か生徒の気持にマッチするものがあつたに違いない。

理屈は何んともつけられる、やれ教育的効果はどうか、やれ人間形成に役立つとか、或は質実剛建の気風を培うのだとか、その他いろいろな言い分はあるだろう、然し彼等が求めるものは、そのような固苦しいものでは無く、もっと別なものではなかっただろうか。例えば学問からの解放感、生きていると言う生命感、また何処まで歩けるか、それによって自分の体力の限界を知り、何処まで頑張れるかその根性を知り度いと言つた至って単純な、しかも若人らしい生命力に溢れた気持からではなかろうか。勿論それを効果的に教育面にとり入れることは教師側の腕次第と言ふことであろうが。

私は大正5年の卒業だから今名物の強行遠足の経験はない、従つて何んの思い出も持たないわけであるが、然し私の弟、息子、甥、姪はては孫共を通じてその様子を仄聞するのである。

確か大正13年頃かと記憶するが、私の弟が甲府中学4年生の時初めてこの強行遠足が行われたものだが、弟のその時のいでたちはと見れば制服制帽、ゲートル巻、握り飯を首に巻きつけ、草鞋履きで腰には予備草鞋2足をぶら下げると言つたまことに勇ましい姿で出発し、その結果、松本だか、村井だかまで歩いて家中の評判となり驚ろかしたのは勿論だが、彼はその時から来年は必ず大町まで歩いて見せると張り切って豪語していた。果たしてその年は大町まで歩いたのであるが、その1年間と言うものは随分強歩に心掛けていたらしい。翌年末っ子の弟がまた甲府中学に入学した。彼は体も余り健康では無いし、それ

に末っ子の甘えっ子で兄貴の比ではないが、それでもこの強行遠足となると異常のハッスルを見せて、驚ろくべき遠距離を記録して家中の者を感心させたものであった。その後私の甥、姪や孫共が全部母校に入学したが、皆この強行遠足には非常な関心を持ち、また楽しみにしていることをいつも感じていた。確かに一昼夜を通して歩くと言うことは並大低のことではない。こうなれば体力よりは寧ろ精神力の問題であろう。

確かに子供達はすっかり疲れ切って帰ってくる。出発の時の元気がどこえやら「あゝ疲れた、こんな苦しいことならもう来年はやめた」と意気地の無いことを言う。ところが翌年になるとまた張り切って出発するのである。

強行遠足と言うものはこんなものである。又理屈抜きにしてこれでいいのではないか。

このように強行遠足は子供達にとって何にかは知らぬが、いとも不思議な力を持っているらしいのである。

最近東京あたりでは「〇〇大臣」と言うお偉ら方が先頭に立って歩く運動に参加しているテレビを見た。最近の都会では文化文明が進み過ぎて、何事も機械力に委せているのでやゝもすると生きた体を忘れかけている。矢張り人間の体は時々自然に返すことが必要ではないか。思うに生物の発生こそこの天地自然の環境のもとに精を受け、これに適したそれぞれの生物が誕生したのではないか。これを思へば老いも若きも、大いに天地の精霊を吸収し、大地を踏みしめて歩くことこそ健康の根元となり、又私共に与えられた生命力を長く維持して行ける所似のものではなからうか。この観点から言っても、その他の教育的面から見ても母校のこの強行遠足はまこと有意義なものと言うべきである。私は学校側に対しても今後共長く継続して実施してもらいたいものと祈念するのである。

私は一昨年から計らずも同窓会長に選ばれたので、直々に参加する機会を得て、出発直前の生徒諸君を見て、その気魄、その態度、そのすさまじい熱情に接し、今までこの行事に参加した私の弟や息子、甥、姪、孫共の真剣な行動を考え合わせ、むべなる哉とつくづく考えさせられたのである。この行事ほど甲府中学以来40年を貫き伝承されている体力と気魄を表示表現しているものは他には無いのであるから大切に継続して欲しいものである。

終りに生徒諸君にお希いしたいのである。この強行遠足はただの遠足ではない、所謂強行遠足である。学業を卒え社会の曠野に踊り出たら自己の学力体力気力を総合してその職をその責を強行することである。そのためには学業に専

念する時から自己の総合力を強力に試して、その不足を強力に補う根性が最も必要な事と思うのである。従ってこの強行遠足によって自己の不足力を発見し或は補い又は増強の資にせられんことを祈るものである。



沿革誌編集に想う

編集委員長 山田 茂

私は昭和5年の卒業である。在学中は陸上競技部と水泳部に所属して、選手として大いに活躍し母校の名を高からしめた(?)のである。

私が在学中唯一つだけ誇り得ることがある。それは水泳部を創設して後輩の為に残してきたことである。私のような何んの取り柄もないごく平凡な人間であってもこの点母校に貢献してきたと自負しているのである。

この水泳部創設のいきさつについては本文と関係がないので省略いたします。

私達の時代の強行遠足は11月3日の夜12時(4日の零時)に出発したものであった。私も毎回参加致しましたが、陸上競技で鍛えた割にはどうも歩くことは不得手であって、大声で言うには憚かる程度の地点でいつもエンコしたのである。然し、私は私なりに最善を尽して歩いたわけで、この強行遠足の精神は嫌と言う程体験した積りである。

さて今度は教師としての立場から母校のために何にかお役に立ちたいと念願していたのである。昭和27年就任以来、この強行遠足の企画、運営の面に参画させて戴いて14ケ年を経たのである。この間、この強歩はあらゆる面から改良が加えられてその運営上からも非常に組織的となり、一段と進歩の跡を示している。こうした中で私は内心記録誌を編集したらどうかと考えておりましたが遂々その機を得ずに無意味徒食の何ケ年かを過してつたのである。ところが本年たまたま創立85周年を迎え、学校として記念行事がいろいろと検討されたのである。これには記念行事運営委員会なるものがあり、この会議によって一応の企画が為されるわけであるが、幸い私も委員の一人としてこの会議に出席することが出来た。その席上私は記念記録映画の撮影、スタジオ102、沿革誌発行の提案をしたのであるが、学校長始め、各委員の賛成によりこゝに原案として承認されたのであった。

初め私は当回の記録誌を考えたのであったが、強行遠足も本年度40回の長き

を数えている。一層のこと第1回より40回までの沿革を編集した方が記念事業としては尚一段と意義があるではないかと考え直してこのように提案したのであった。

数日を経ずして編集委員も決めて戴き一応の顔ぶれも揃ったので、或る日委員会を開催し諸般の打合せを為してからいよいよ編集の準備に取り掛ったのである。

さてその準備であるが、何んと言っても大正13年(第1回)より昭和40年(40回)の歴史はまことに膨大なものである。先ず記録の資料の収集から始めたわけであるが、各委員の努力により何んとか収集することに成功はしたものである。中には不備な年次もありそれを補い、これを整理したり、或いは原稿を書いたりして、どうにか作業も軌道に乗って進むようになったのである。

この沿革誌については頭初私の頭にあった構想は予算の関係もあり、職員の多忙も考え合わせ、概ね30枚内外の小冊子でまとめて見ようと考えたのである。

某月某日、日新ホールに於いて、記念行事に関するPTAの委員会が開催された際、この沿革誌編集の予算措置が講ぜられたので、この予算の線に沿って準備を進めて参ったのであるが、その後学校長の要請もあって、某月某日非公式にPTA、同窓会の一部の有志に会合を持って戴き、お智恵拝借となったのである。

この席上「沿革誌と言うものはその性質上、そう度々には発行するものではないので、甲府一高の名に於いても、もう少し内容を豊富にした立派なものを編集して欲しい」と言う激励の言葉を受け、まことに意を強うして又々材料を増した編集に取り掛ったのであった。

某月某日、図書館に於いて、PTAの委員会が開催された際、改めて沿革誌の編集内容と予算が検討され、こゝで最終的な決定が為されたのであった。

私はかくして関係者一同の協力被護のもとに、その資料を整理し、原稿を書きつつ編集の仕事に精根を傾けて参りましたが、この編集をしつつこの長い歴史を通して強歩遠足の中を流れる偉大なあるものを感得したのである。

その一つには今昔を通じての時代の流れを感じさせるものがあつた。この強行遠足は、満州、支那の各事変に次いで大東亜戦争の真ただ中であつて、たくましくも学徒の心身の鍛錬に生き抜き、その後終戦となり、世相も一変し、今までの封建国家は忽ちにして民主国家に変貌した。その時代の波にもまれつつも矢張り雄々しくも生き続けて来た強行遠足である。

よし時の流れは世相を変えようとも、或はその方法が異なるうとも、この強行遠足の根本精神は磐石であって、今も尚私共の体の中へ、心の中へ脈々として伝えられているこの事実を、何んと解釈したらよいのであろうかと。

私は思うのである。

心も身もあらゆる艱難辛苦を耐え忍び、遠い長い悪路をただひたすらに歩き続けて行く姿こそ、人生行路の縮図であり又人生の試練とも見えるであろう。彼等がこのように身を以って体験し得る時は、この強行遠足を置いては他に無いのである。そもそも教育は教場内に於ける勉強ばかりでなく、時には大地を踏みしめ山野を活歩し、自然の風物に接し、天地の気宇を吸い、心身共に健康で生きていると言う生命感を味わうことは必要なことであろう。

生けとし生ける者には皆生命がある、その生命力こそ無限であり、且つ永遠である。よし人が変ろうとも、その生命の絆は決して断たれることなく次代へ又次代へと、とこしへに引継がれて行くのである。この強行遠足には靈妙不可思議な力があって、叩いても倒しても決して死なない強い生命力を持っている。彼等はこの靈験あらたかな強行遠足をすることによって、彼等自体がこの精気を吸収し生きる強さを与えられるのである。彼等は学校から家庭から、そして社会から解放されたよろこびに、自由の天地を飛翔したいのだ。所謂命の洗濯をしたいのだ。

私達大人は、やゝもすると総てを教育に結びつけようと考えたがるものだ。然し彼等はそんなことはどうでもよいことである。唯ひたすら自己の体力と根性をためし、又どれだけ歩けるかに挑んでいるのだ。そしてその中から生まれ出るたくましい生命力を発見せんとしているのだ、と私は解釈したい。

従来この強行遠足の精神は「心身の鍛錬」「行の精神」「質実剛健」「不撓不屈の精神」その他いろいろの面から言われてきた。勿論このような効果をねらっていたことは間違いない事実なのであるが、私はこゝで別の面からこの強行遠足の別の姿を発見しようと努めたのである。

凡そ文字は体であり文章は衣である。体は唯一のものであるが、衣は自由に着換えることが出来る。この意味から言っても文章は考え方如何によって、何んとも表現出来るものである。

そこで私はこの強行遠足の歴史を通して感じ得たことは、実にこの「たくましい生命力」であると言うことであつたのである。

さてこの行事は、職員生徒をはじめとして、PTA、同窓会の一致協力のもとに今日まで伝えられ、全国にも比類ない40回を数える長い伝統を維持してき

たのである。思えばまことに驚威的な存在であり、又先輩の残した遺産の一つでもあると考えるのである。従つてこの貴重な遺産を長く後代に伝えることが現在の私共に与えられた務であるとさえ思うのである。

この意味で創立85周年記念行事の一環としてこの貴重な先輩の残した足跡を辿り、その沿革誌を編集することになった所以もまたここにあるのだが、何分にも古く長い伝統を有するこの歴史の壁はあまりに大きく厚く私達の前に立ちはだかっている。毎回を詳述することは到底不可能事である。従つてこれを要約したところの沿革誌をこゝにおこがましくも編集することになったわけである。編集にあたって一言その経過と感想を述べた次第である。

強行遠足の起源とその趣意



昭和17年発行の「本校に於ける強行遠足の意義と
その実際」と題する冊子より抜粋した。

強行遠足の起源とその趣意

大正13年、時の文部省より「明治大帝の御徳を追慕し奉り、明治節（現在の文化の日）を中心として全国体育週間を設置せよ」との通達があったので本校としては、11月4日を以って体育日と定め、全校職員生徒一同、一斉に強行遠足を実施することになった。そもそもこの運動を創始したのは当時の学校長江口俊博先生であった、先生は50何才かの老軀をもって白根三山を縦走される程の健脚家であって「歩く」と言う事に就いては特別の興味と研究とを持たれておった。従ってこの全国的な体育運動の展開を見ようとする時、先ず先生の脳裏に浮びあがったのが、この強行遠足案であったのは当然であったのである、先生からこの提案がなされた時、全職員はその素晴らしい計画に雙手をあげて賛成し且つ共鳴し、直ちに実行に移されたのであった。こゝに特に遠足を選んだのは次の諸点から考察して、この記念すべき体育日の運動として最も適切であると考へられたからである。

- 1、歩くと言うことは最も原始的、普遍的、個性的の運動である。
- 2、歩くと言うことは最も自然的な健康法である。
- 3、歩くことによって自己の体力、脚力、精神力（根性）の認識を深める。
- 4、歩くことは武田流軍学に於ける「健脚強兵」の伝統を継ぐことになる。
- 5、歩くことによって天地自然の気宇に接して生命力の尊さを知る。

以上の5点であった。そして敢えて強行遠足と名づけられたのは自己の体力に応じて歩けるところまで歩くと言うことを強調せんがためであった。由来人情の弱点は安易なものとの妥協である。歩く場合に於いては少しく疲労すると直ちに乗物を考へるか或はさして苦痛を感じないのに中途に於いて中止して了うことになり勝ちである、これらの一切の妥協と怠慢を排して精根限り歩くと言うことを重視したのであった、以来歴代の学校長は皆江口先生の御意志を嗣いで、益々この運動の強化充実に努められて今日に至ったのである。

- ◎ 次に掲げる文章は最近の「強行遠足の目的」とする一例である。

「強行遠足のはじめの精神にもとづき、自然の中に自己を解放して活力の源泉を自覚することをもって目的とする、このため綿密周到な歩行計画のもと

づき各人の体力に応じて自己のペースを保ちつつ歩行するものである。」
「近代社会の進展に伴ういわゆる文化生活の弊である自然からの疎隔を矯め、高原の自然の中に、自己を解放して活力の源泉を自覚することを目標に綿密周到な歩行計画にもとづいて歩行するものとする」

沿革の概要



沿革の概要

- 第1回（大正13年） 11月4日（旧明治節）を祝して御嶽金桜神社・新府城跡・東京方面の三コースを選び初の強行遠足を実施す。
- 第2回（大正14年） コースを松本方面へ変更、24時間制で実施す
- 第4回（昭和2年） コースを木曾福島方面へ変更、同じく24時間制で実施す
- 第6回（昭和4年） コースを信濃大町方面へ変更、24時間制で実施す。
- 第7回（昭和5年） 実施要項が始めて作成さる、優秀者には金メダルを授与す。
- 第9回（昭和7年） 降雨のため先頭上諏訪にて中止。
- 第13回（昭和11年） 記録映画を撮影す。
- 第14回（昭和12年） 降雨のため先頭辰野にて中止。
- 第17回（昭和15年） 降雨のため先頭松本にて中止。
- 第18回（昭和16年） 50米網尺により全コースを実測した。第1回練習会を実施す。
- 第20回（昭和18年） 強行遠足20周年記念として実施、記録映画の撮影。
厚生省、日本体育学会の関係者来校し、医学的調査を為す。
- 第21回（昭和19年） 戦時中につき3年以上は勤労働員にて留守のため、1、2年生のみ小野を終点として実施す。
- 第22回（昭和20年） 終戦につき中止。翌年を第22回として実施す。
- 第24回（昭和23年） 新制高校となる、併設中学と合同で実施す。
- 第25回（昭和24年） 今回より定時制希望者の参加を認めた。
- 第26回（昭和25年） 今回より女子が初参加す、穴山終点とした。創立70周年記念行事の一環として実施す、記念記録映画を撮影す。
- 第27回（昭和26年） 女子コースを台ヶ原終点に変更す。
- 第28回（昭和27年） 女子コースを日野春終点に延長す。
- 第30回（昭和29年） 降雨のため先頭川岸にて中止
- 第31回（昭和30年） 降雨のため先頭岡谷にて中止、女子コースは富士見に延長す。
- 第33回（昭和32年） 本コース最高記録を樹立す、岩間孝吉君（築場167.1キロ）
- 第34回（昭和33年） 記録映画「若き脚の記録」を撮影す。
- 第35回（昭和34年） 伊勢湾台風による道路欠損により中止、翌年を第35回として実施す。
- 第35回（昭和35年） 創立80周年記念行事の一環として実施、優秀者には楯を、参加者全員には参加章メダルを授与す。
- 第37回（昭和37年） コースを小諸方面に変更す、男子松原湖終点、女子は箕輪新町より松原湖終点として実施す。

- 第38回（昭和38年） 男子コースを中込終点に延長す、女子は箕輪新町より海のリ終点に変更す。
- 第39回（昭和39年） 女子コースを若神子より野辺山終点に変更す。
- 第40回（昭和40年） 男子コースを終点小諸に延長し、女子コースは三軒家より小海終点に変更す。
- 創立85周年記念行事の一環として実施、記念記録映画撮影、スタジオ 102 出演、沿革誌編集。参加者全員に記念メダル授与す。

年 表



1. 第1回、2回は記録不明
2. 備考欄中同地名の料数の相違は、当回コースの部分点変更によるものである。
3. 最高到着者氏名は別に到着者氏名一覧表にあり。

コース変遷略図



1. 木曾福島方面コースにありては辰野迂回松本行も認められた。
2. 信濃大町方面コースにありて女子のコースは次の通りである。
 - (1) 第26回 (昭和25年) 学校より穴山駅終点
 - (2) 第27回 (昭和26年) 学校より台ヶ原終点
 - (3) 第28回 (昭和27年) 学校より日野春駅終点
 - (4) 第29回 (昭和28年) "
 - (5) 第31回~第36回 (昭和30年~36年) 学校より富士見駅終点
3. 小諸方面コースにありて女子のコースは次の通りである。
 - (1) 第37回 (昭和37年) 箕輪新町より松原湖終点
 - (2) 第38回 (昭和38年) " 海の口終点
 - (3) 第39回 (昭和39年) 若神子より野辺山終点
 - (4) 第40回 (昭和40年) 三軒家より小海終点

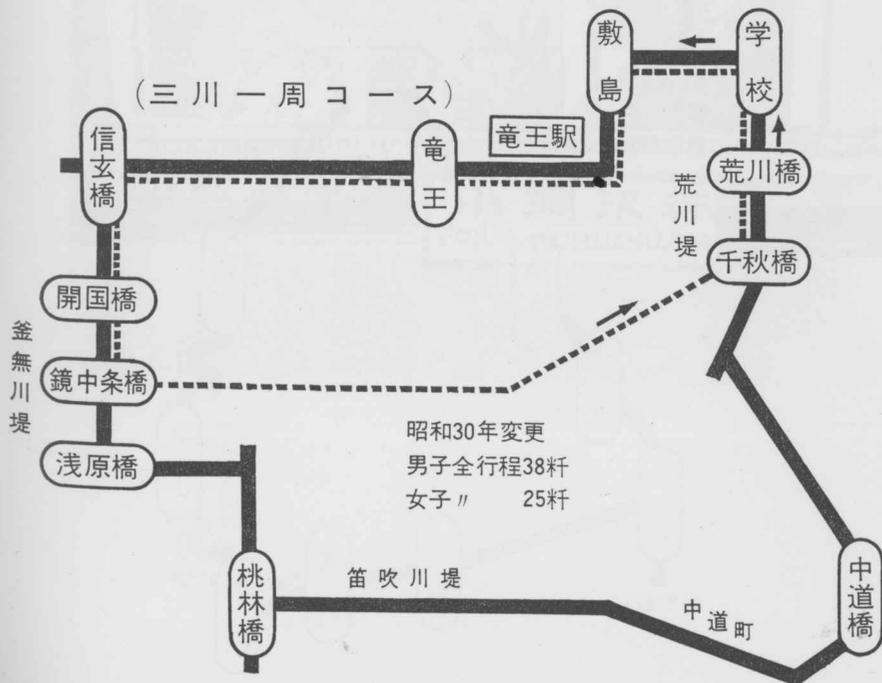
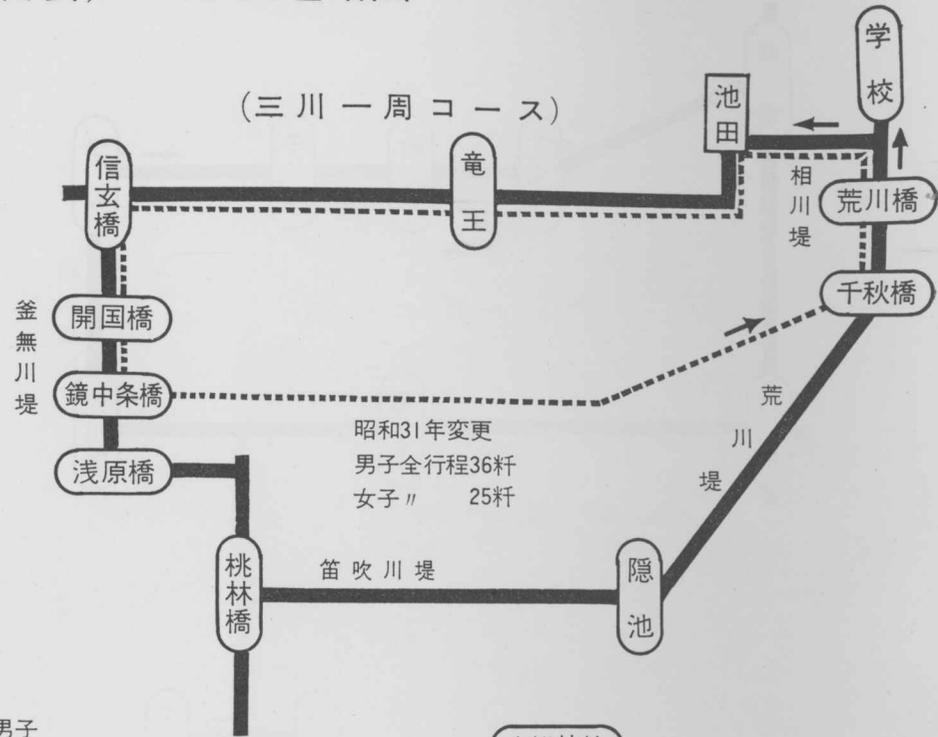
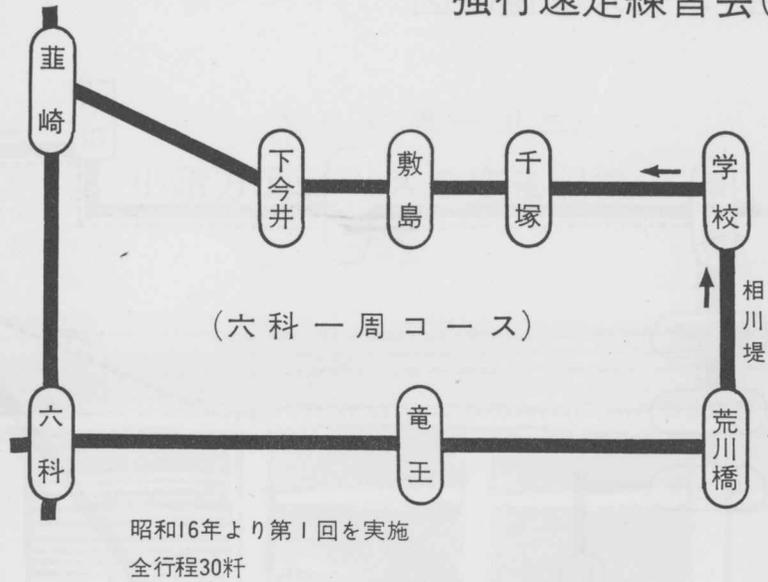
回	年度	コース	変更の概要
第一回	(昭和二十三年)	東京方面コース	由野の変更 由野(福生伊田)日と(日)より等速走 コース(福生伊田)日と(日)より等速走 コース(福生伊田)日と(日)より等速走
第二回・第三回	(昭和二十四・二十五年)	谷本内閣コース	由野の変更 谷本内閣コース(谷本内閣)より等速走 コース(谷本内閣)より等速走
第四回・五回	(昭和二十六年・二十七年)	谷本内閣コース	由野の変更 谷本内閣コース(谷本内閣)より等速走 コース(谷本内閣)より等速走
第六回・七回	(昭和二十八年・二十九年)	計量大会方面コース	由野の変更 計量大会方面コース(計量大会)より等速走 コース(計量大会)より等速走
第八回・九回	(昭和三十年・三十一年)	小瀬方面コース	由野の変更 小瀬方面コース(小瀬)より等速走 コース(小瀬)より等速走

練習会(予行練習会)コース変遷略図



1. 昭和28年までは3年生を対象として実施、1、2年生は一万里競走を実施した。
2. 昭和29年以降は全校生徒を対象として実施した。

強行遠足練習会(予行練習会)コース変遷略図



— 男子
 - - - 女子



小諸方面コースの変遷記録

(1) 変更の理由

信濃大町方面コースは先輩諸氏のなじみ深い思い出のコースであったが、近年道路舗装に伴って、とみに車輛の通行が頻繁となり、加えて相当のスピードで走る車も少なくない、従ってこの道路で集団歩行することは非常に危険性を伴なうものであると判断し、他の安全な条件のこなった道路を選ぶ必要にせまられてきた。学校としては強行遠足実行委員会を開きあらゆる角度から検討審議された。

即ち1、車輛の通行もあまり頻繁でなく、歩行するには比較的安全な道路であること。

2、帰りの列車輸送の関係から鉄道沿線の道路であること。

3、救護車が通行し得る幅員をもった道路であること。

4、人家等もあり救護所等を依頼することの出来る道路であること。

以上の各条件を検討した結果、この条件にこなった現コースが職員会議の審議により承認された。

(2) 実施の基本方針

1、最近の生徒は歩くことが弱くなってきている。従ってあまり無理な競争心を避けるため表彰制を廃し、歩行することを原則として、自己の体力に応じたペースで歩行させることにした。

2、制限時間制と終点制限を設けた。これは帰りの最終列車の関係から歩行速度を勘案して出発時刻と終点地を指定、又これに相当する時間制限を規定した。

3、安全と救護を基本施策として諸企画がなされ、実施方法とそれに伴う各所の諸係勤務については綿密周到な方途が講ぜられた。

(3) 変更の経過

1 第37回（昭和37年）

(1) 男子は松原湖（66km）を終点地とし制限時間15時間、女子は箕輪新町を出発点松原湖（38km）を終点地とし制限時間7時間とした。

(2) 男女共全日制は全員参加、定時制、通信制生徒は希望者参加

(3) 新コースの初の試みとして次のように実施された。

(イ) 清里清泉寮を本部とし、ここを概ねの目標地とし、当所には模擬店を設け、プラスバンド等の準備もなし、フォークダンスその他のレクリエーションをなして楽しい1日を過すべく計画された。尚、歩行したい者はここより前進してもよいことにした。しかし実際にはここに残留した生徒は案外に少なく、大部分の生徒は歩くことに意義を感じてか最終地点松原湖へ向って出発した。

(この試みは不評に終り、次回からはこれを廃し、本部も野辺山に移し専ら歩くことを本旨とした)

(ロ) 上記の試みの趣旨として、かた苦しい規定を設けずに自由に歩かせたらどうかとの意見もあったが、しかし大集団歩行をなすについては野放しにすることは非常に危険であり、矢張りルールを設けて安全に歩行させるべきであるとの見解をとった。

(ハ) 走ることを禁じ絶対に歩行すべきことが規定された。従ってこれを守らせるため特に先頭停止時刻を各地点に設けた。

この理由は走って早く到着しても、この時刻のくるまでは前進させない、従って走ってきても無駄であることを知らせると共に歩行してきても充分に間に合う時刻を勘案して設定したのである(次回からはこの時刻制を廃し、自己の体力に応じたペースで歩行し得るようにした)

(4) 新コース実施にともない以上のようないろいろの試みがなされたが結果は矢張り永い伝統の線に添った本来の強行遠足の姿に立戻らざるを得なかったことに対し、こゝに真の強行遠足の意義を再確認したのである。

2 第38回 (昭和38年)

(1) 前回の反省として清泉寮本部でのレクリエーションを廃し、本部も野辺山に移し、専ら歩くことに重点を置くことにすると共に、生徒の要望に答えて終点を中込に延長した。

(2) 男子は学校を出発点とし中込(87km)を終点地、制限時間は17時間とした。女子は箕輪新町を出発点とし海の口(32km)を終点地、制限時間は5時間とした。

(3) 前回の先頭停止時刻を廃し、生徒の最大ペースが発揮できるようにした。

3 第39回 (昭和39年)

(1) 男子のコースは前回通り、女子は若神子を出発地とし野辺山(26km)を終点地、制限時間は5時間とした。

この理由は出発地を若神子にした関係上、海の口を終点とした場合は距離も延び、途中の市場は交通の便も悪く残留者の輸送も困難である点から一つ手前の野辺山を終点地とした。

(2) 第38回、39回共、男子終点地中込に於いては市全体が協力してこの強行遠足に対し大歓迎した。一例として駅前には大歓迎の横断幕をしつらえた上、市教委では特に宣伝カーで市中を巡り宣伝紹介に努め、地元婦人会員も出動して白エプロン姿で生徒の接待その他いろいろの面倒を見て戴き、又某商店ではリンゴを多量に寄贈され、生徒一人一人に配ったのであるが、これには関係者一同大いに感激した次第である。

4 第40回 (昭和40年)

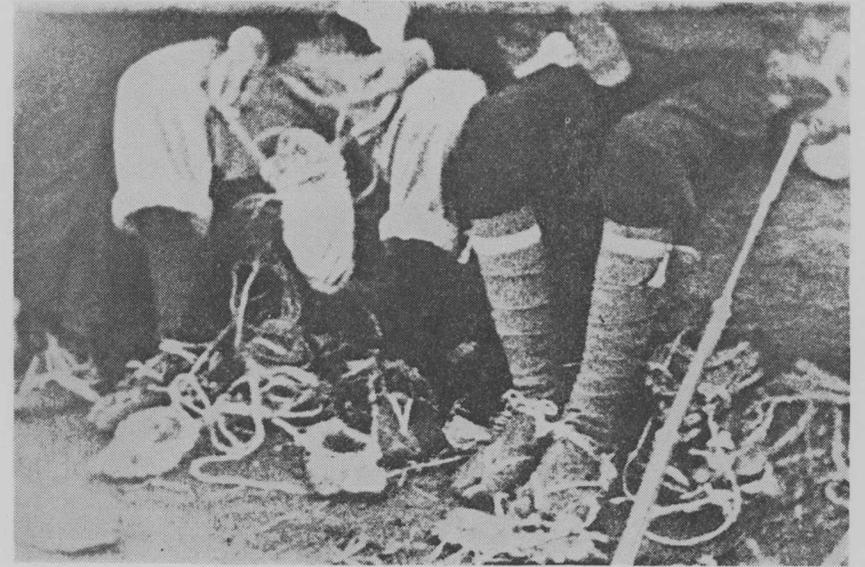
(1) 生徒の要望に答え、コースを更に延長し男子は小諸(100km)を終点地、制限時間は20時間とした。女子は三軒家を出発地とし小海(32km)を終点地、制限時間5時間30分とした。

(2) 男子終点小諸到着者は予想に反して意外に多く235名(全定を含む)に達した。このことによって生徒の歩行意欲がいかに旺盛であるかがうかがわれて頼もしき限りであった。

(3) 本回は特に創立85周年記念行事の一環として実施されたが記念記録映画撮影、スタジオ102の出演、沿革誌編集等多彩な行事が折り込まれて、稀に見る盛大に且つ成功裡に終止したことは今後の強行遠足のためにもまことに幸いであった。

(4) 参加生徒、関係者全員に記念メダルを贈呈した。

各回の歩行距離グラフ表



1. いづれも全日制男子のみの調査によるものである。
2. 黒は総秆数、白は平均秆数を示す。
3. 小諸方面コースの数値の低い理由は、走ることを禁じ歩行することを原則とし、且つ終点地制であるからである。

回数	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	18	19	20	21	22	23	24	25	26	27	28	29	30	31	32	33	34	35	36	37	38	39	40	41	42	43	44	45	46	47	48	49	50																															
男子	100	105	110	115	120	125	130	135	140	145	150	155	160	165	170	175	180	185	190	195	200	205	210	215	220	225	230	235	240	245	250	255	260	265	270	275	280	285	290	295	300	305	310	315	320	325	330	335	340	345	350	355	360	365	370	375	380	385	390	395	400	405	410	415	420	425	430	435	440	445	450	455	460	465	470	475	480	485	490	495	500

各回最高記録者表



1. 各回共に全日制男子のみを記した。
2. 第37回以降は表彰制度を廃した関係から終点到着者数を記した。

各回最高記録者又は到着人数 (全日制男子のみ)

- 第1回 (大正13年) 記録不明 但し最高到着地上野原
第2回 (大正14年) 記録不明 但し最高到着地松本
第3回 (大正15年) 松本 (120k) 川口多治郎、加藤和平、三井正夫、浅川栄
沢田栖巖、藤田甚太郎、土屋甲子策(5年)
藤田義治、矢崎千勝、望月信一郎、網倉志
朗、佐野東徳、松尾敏夫、小林一雄(4年)
第4回 (昭和2年) 木曾福島 (142k) 小林一雄、松尾敏史 (5年)
第5回 (昭和3年) 贅川 (124k) 鈴木秀彦 (5年) 清水文人、白倉芳行 (4
年)
第6回 (昭和4年) 豊科 (115.4k) 日高吉郎、茂手木元蔵 (5年)
第7回 (昭和5年) 松本 (120k) 笹本重雄 (5年) 三枝林、久保寺恒夫、志
村利雄 (4年) 樋泉陸雄 (3年)
第8回 (昭和6年) 有明 (135.9k) 雨宮正二 (5年)
第9回 (昭和7年) 降雨の為上諏訪にて中止 上諏訪23名
第10回 (昭和8年) 有明 (135.9k) 饗場孝明 (5年)
第11回 (昭和9年) 梓橋 (122.7k) 山本勇造 (5年) 田草川実 (3年)
第12回 (昭和10年) 会染 (140.4k) 岩下竜一 (4年)
第13回 (昭和11年) 有明 (135.9k) 田草川実 (5年)
第14回 (昭和12年) 降雨の為辰野にて中止 辰野7名
第15回 (昭和13年) 豊科 (128.9k) 石川隆次 (5年)
第16回 (昭和14年) 豊科 (128.9k) 大芝玄五、大森等 (5年)
第17回 (昭和15年) 降雨の為松本にて中止 松本着59名
第18回 (昭和16年) 有明 (135.9k) 堀内逸雄、石川祐夫 (4年)
第19回 (昭和17年) 有明 (135.9k) 小野貞二 (5年) 野沢竜朗 (4年)
第20回 (昭和18年) 松川 (141.3k) 野沢竜朗、溝部正恒 (5年)
第21回 (昭和19年) 戦時中につき1、2年生のみ小野まで、111名。
第22回 (昭和21年) 穂高 (131.5k) 飯田哲二 (5年) 中村啓信、丸山功、丹沢
和重 (4年)

- 第23回 (昭和22年) 松川 (141.3k) 志村道雄、中村啓信 (5年)
 第24回 (昭和23年) 松川 (141.3k) 堀内清英 (3年)(以下新制高校3年制度)
 第25回 (昭和24年) 大町 (152.6k) 大塚敬三 (3年)
 第26回 (昭和25年) 大町 (152.6k) 今福利重 (2年)
 第27回 (昭和26年) 木崎 (160.2k) 今福利重 (3年)
 第28回 (昭和27年) 松川 (141.3k) 中村信也、今村厚雄 (3年)
 第29回 (昭和28年) 大町 (152.6k) 広瀬一郎 (3年)
 第30回 (昭和29年) 降雨のため川岸にて中止、川岸3名
 第31回 (昭和30年) 降雨のため岡谷にて中止、岡谷6名
 第32回 (昭和31年) 松川 (142.3k) 鈴木国博 (2年)
 第33回 (昭和32年) 築場 (167.1k) 岩間孝吉 (3年) (最高記録保持者)
 第34回 (昭和33年) 木崎 (160.2k) 横森一三 (3年)
 第35回 (昭和35年) 大町 (156.0k) 関口亜彦 (3年)
 第36回 (昭和36年) 大町 (156.0k) 乙黒勝弘 (2年)
 第37回 (昭和37年) 松原湖 (68k) 267名
 第38回 (昭和38年) 中込 (87k) 72名
 第39回 (昭和39年) 中込 (87k) 129名
 第40回 (昭和40年) 小諸 (100k) 230名

◎松本以遠主要地点到着者総数

(但し1、2回及び降雨中止を除き全日制男子とす)

松本 (120k) 2,283名、梓橋 (122.7k) 290名、●贛川 (124k) 3名
 豊科 (128.9k) 116名、穂高 (131.5k) 39名、有明 (136.9k) 23名
 松川 (141.3k) 11名、木曾福島(142.0k) 3名、大町 (152.6k) 5名
 木崎 (160.2k) 2名、築場 (167.1k) 1名。

強行遠足実施の実態



毎年行われるこの強行遠足はまことに大きな行事である。従つてそれだけに全職員、PTA、同窓会をあげて一大協力体制のもとに企画と準備がなされている。わけても直接中心となつて運営の衝にあたる職員の労苦は並大抵のものではない。このような労苦は外部の者には知られていない事実である。ここに第40回の例を掲げて、その事前の準備から終了までの間の概要を記し参考に供したい。

第40回（昭和40年—1965）

特に85周年記念行事の一環として実施された関係から、又最も比近な例として今回のものを記載することにした。

先ず実施に先立つこと約2ヶ月以上の日時を費して、その企画、準備に万全を期したわけである。その準備にあたっては授業と校務との間隙を縫って作業を進めているのである。凡そ何事か実施する場合は必ず事前の企画、準備はつきものであるが特に強行遠足についてはその舞台が大きいだけに、綿密周到なしかも生徒を安全に歩行させるためにも万全を期した計画がなされなければならないので、その責任は重且つ大である。その意味に於いても全校職員の総力を結集してことに当たったのである。ここにその概略を記することにする。

(1) 実施前の諸準備

1、強行遠足実行委員会設立

教頭、各係主任、各学年主任、体育科全員を以って構成し、委員会が必要により随時開催し、全般についての企画運営にあたる。

2、道路調査委員委嘱

学校長より委嘱され、予定コースの道路状況、軒数、全行程地図並に区間地図等作成するとともに関係地区警察署、教育委員会、救護所等に交渉依頼、委員会に於いて報告

3、コース決定

委員会は道路調査班の報告により、これを検討し職員会議に於いて決定。

4、準備諸係は次の通りで学校長の委嘱により全職員がいつれかの係に所属する。

- (1) 総務係（教頭以下各諸係主任をもって構成する）
- (2) 歩行計画係（歩行に関する一切の計画と別に定める作業をなす）
- (3) 救護所係（救護所の決定、人員配置に関する計画等）
- (4) 輸送計画係（団体乗車の交渉、列車、バス等の運賃及び時刻等に関すること）
- (5) P・T・A係（P・T・Aへ協力方依頼と配置計画等）
- (6) 医療救護係（医師の協力方依頼と配置計画等）
- (7) 編集係（職員、生徒用の実施要覧の編集にあたる）
- (8) 映画撮影係（記念記録映画撮影に関する一切の計画）

○ 別にスタジオ102出演について打合せを行なう。

5、準備日程表作成

準備諸係が決定するとともに準備日程表を作成し、各係はこの日程表に示された作業と完成期日を確認して作業を開始。

6、作業内容の一例

- (1) 道路使用許可申請書提出、救護所等への依頼状発送 (総務係)
- (2) 関係駅に対し団体乗車の交渉等 (輸送係)
- (3) 各所係と所要人員決定 (救護所係)
- (4) 各所係配置希望調査一決定 (総務係)
- (5) 検印カード、氏名票印刷依頼 (総務係)
- (6) 記念メダル発注 (総務係)
- (7) P・T・Aの依頼状発送と配置計画 (P・T・A係)
- (8) 医師の依頼と配置計画 (医療救護係)
- (9) 健康診断 (保健係)
- (10) 諸注意事項印刷 (生活指導係)
- (11) 実施要項決定印刷 (総務係)
- (12) 各所配置と任務明細及び勤務概要等作成 (歩行係)
- (13) 救護車の救護計画書作成 (全線巡視班)
- (14) 実施要覧編集 (編集係)
- (15) 準備品及び旅費一覧表作成 (救護所係)
- (16) 準備品の調達と旅費の計算 (庶務)
- (17) 記録映画撮影計画書作成 (映画係)
- (18) スタジオ102の交渉と打合せ
- (19) 道路再調査
- (20) 職員会議及びLHRにて詳細な打合せ

◎以上概要を記したがこの外本番に先立って予行練習を実施、主として体育科にて本番に準じた諸準備をなした。

(2) 当日の諸係

各所係配置希望調査をなしこれを調整の上、学校長の委嘱により全職員(全日、定、通、庶務その他)下記のいずれかの係にあたる。

- 1、男女集合及び出発係(所定の時刻に集合させ、検印カード配布、人員等の点呼をなし出発させる)
- 2、学校勤務(日宿直と全線からの連絡処理、見学者の監督等にあたる)

- 3、甲府駅勤務(各列車からの下車人員確認と事故者の収容救護等)
- 4、小淵沢駅勤務(小海線、中央線の乗換指導と救護等)
- 5、各救護所係(救護とともに検印、集票、乗車指導にあたる)
- 6、区間巡視係(全線を中断することなく設け、区間内の救護、道路指導等にあたる)
- 7、全線巡視班(自動車を利用、救護収容、交通指導、連絡等にあたる)
- 8、医療救護班(適当個所に医師を配置、救護にあたる)
- 9、P・T・A班(適当個所に配置、職員に協力)
- 10、輸送班(交通不便の個所に配し、事故者の輸送にあたる)
- 11、運搬班(設営用具の運搬と撤収にあたる)
- 12、映画撮影班(85周年記念記録映画の撮影にあたる)
- 13、スタジオ102(学校長出演、出発時と若神子を撮影、小海で録音する)16日スタジオ102より全国に放送された。

(3) 安全体勢の確立

生徒歩行に際しては安全に安心して歩行し得るよう次の通りの安全体勢のもとに実施した。

- 1、救護所は比較的密に設置し、事故者に対する救護の外湯茶の接待、たき火の用意をした。
- 2、全線にわたり中断することのないよう区間巡視を設け、該区間内に於ける生徒の救護、道路指導等にあたった。
- 3、自動車利用による全線巡視班(兼救護車)を設け区間巡視と共に二段構えの体勢をとった。
- 4、生徒の前進者、又は到着者を確認するため、各救護所からは後尾連絡係を設け、当所締切時刻には前進者の後尾を追って順行し次所に異状の有無の引継ぎをなす。
- 5、必要個所には道路標識をなし、コースを迷うことなく通過し得るようにした。
- 6、各所の打切閉止のため後尾打切時刻を設け前進者の制限をするため前進停止時刻を設ける等全線に亘っての時刻の規正をなした。
- 7、帰りの列車の団体乗車又は個人乗車の指導をなす、又遅い者に対しては最終列車を指定し、全員の帰着を確認した。
- 8、特にP・T・A、医師の協力を仰ぎ、救護及び勤務の万全を期した。

9、本番に準じた諸規定のもとに予行練習をなし、本番時の諸規定に慣れさせ、又自己の脚力を確認せしめた。

10、歩行計画資料を作成し生徒に配布した。これによって各自のペースによる歩行計画をたてるに便ならしめた。

11、実施期日は特に月夜を選び歩行の安全性を考慮した。

(4) 実施要項

1、期 日：昭和40年10月15日（金）16日（土）の両日

（雨天の際は19、20日とする）

2、参 加：(1)全日、定、通を通じて参加するものとし、参加者は所定の日時に健康診断を受け、参加に支障のないと認められた者。

(2)不参加者は前号の外、身体障害者、その他により参加には適当でないと認められた者にして、10月16日には定刻に登校し係の指示を受ける。

3、実施方法

(1) コース：(イ)（男子）学校より葺崎、若神子、清里、野辺山、中込を経て小諸に至る。

(ロ)（女子）三軒家を出発地とし男子と同じコースを経て小海に至る。

(2) 最終地：(イ)（男子）は長野県小諸市（約100km）

(ロ)（女子）は長野県小海市（約32km）

(3) 制限時間と満了時刻：

(イ)男子の制限時間は20時間とする、従って17：30に出発し翌日13：30をもって満了時刻とする。

(ロ)女子の制限時間は5時間30分とする。従って7：30に出発し、同日13：00をもって満了時刻とする。

(4) 集 合：

(イ)男子は10月15日16：00には体育館の所定の位置に集合、係の人員点呼とともに検印カードの配布、つづいて携行品、服装の点検を受ける。

(ロ)女子は10月16日、5：30には学校正門前道路上に所定のグループ毎に集合、係の人員点呼とともに検印カードの配布、つづいて携行品、服装の点検を受けた後6：00に

は乗車開始、出発地三軒家に向う。

(5) 出発式：10月15日男子の出発に先立って次の行事を行う。

(イ)学校長の訓示 (ロ)激励の辞（同窓会P・T・A各会長）

(ハ)生徒代表宣誓 (ニ)諸注意

(6) 出 発：(イ)男子は15日19：30、学校長の号砲の合図により3年、2年、1年の順に5分の時差をもって出発

(ロ)女子は16日、7：30、三軒家にて所定の順序（第1号車より下車し、順次出発開始）により、係りの指示に従って出発。

(7) 前進停止：遠隔地の各所には前進停止時刻が設けられている、この理由はこの時刻以後に前進しても、満了時刻までには次所に到着することは不可能であることを想定して設けた時刻である、従ってこの時刻以後の到着者の前進は停止させる設定の基準は時速と該地満了時刻とを勘案して、その前所の通過時刻によるものとする。

(8) 後尾打切：比較的近い各所には後尾打切時刻が設けられている。これは後尾の者でも事故のない限り楽に到着し得ることを想定して設けた時刻である。従ってこの時刻以後到着者の前進は停止され、当所は打切られる。設定の基準は時速3kmにて到着する満了時刻地点迄に設けられている。

(9) 救護所：各地には救護所が設けられている、このうち集票のみと検印を要する救護所とがある。検印を要する救護所に於いては、氏名票を提出するとともに検印カードには検印を受け通過の証とする。要救護者は救護を受けることが出来る。

(10) 巡 視：各区分には区間巡視係が設けられていて、常に巡視を為しているので事故の連絡、救護の処置を受けるとともに、交通整理、道路指示に従う。

(11) 乗車帰甲

(イ)遅くも指定された最終列車には乗車する。

(ロ)団体乗車については係の指示に従って乗車をなすとともに予め運賃（釣銭の要らぬよう）の用意をして置く。

(12) 通過地の証明

(イ)検印を要する救護所に於いては検印カードに検印を受け

ることによって通過又は到着の証明とする。

(a) 集票を要する救護所に於いては氏名票を提出することによって通過又は到着の証明とする。

(b) 後尾打切時刻以後の到着者については前所を到着地とする。

4、諸 規 定

- (1) 所定のコースを通過すること、違反者は失格とする。
- (2) 服装は指定されたものを着用する。違反者の参加は認めない。
- (3) 出発後10分を経過して遅刻した者の参加は認めない。
- (4) 検印所においては氏名票とともに検印カードを提出し、カードには検印を受ける。
- (5) 検印カードに検印の欠けている場合は失格と認める。
- (6) 救護所においては氏名票を提出する。
- (7) いづれの地点においても前進を中止又は停止された者の検印カードは該所係に返納する。
- (8) 前進を中止又は停止された地点を到着地とする、但し後尾打切時刻以後の到着については前所通過地とする。
- (9) 締切時刻以後の到着者の前進は許さない、違反者は失格とする。
- (10) 前進中止又は停止者を除き、乗物等で前進した者は失格とする。
- (11) 学生にあるまじき行為、または社会的に不適当と思われる行為をなした者は失格とする。
- (12) 検印カードを紛失した者は失格とする。但し係員証明があればよい。
- (13) 全員歩行することを原則とするが体力に応じた歩行計画をたてる。
- (14) 本年は創立85周年記念行事の一環として実施するので、特に記念として参加全員に記念メダルを与える。

5、登 校

- (1) 17日(日)は全員10:00に登校、生徒はHRにて出欠調査、職員は検印カード、氏名票の整理、準備品の返納、到着地を出席簿に記入作業等。
- (2) 18日(月)は代休とする。

(5) 生徒の指導

- (1) 体育時を利用して駆足等の実施によって体力、脚力の鍛練をなす。
- (2) 成可く乗物を廃して徒歩通学によって体力づくりを計らせる。

- (3) 予行練習の実施によって本番の諸ルールを理解させ、自己の体力を知らしめる。
- (4) 歩行計画資料により自己体力のペースに相当する歩行計画をたてさせる。
- (5) 健康診断を受け自己の健康度を認識させるとともに参、不参をきめる。
- (6) 一年生には強行遠足映画により理解を深めさせる。
- (7) HR又は校内放送により強行遠足の意義を理解させるとともに実施要項、諸注意その他関係印刷物(実施要覧)を配布して内容を確認させる。

(8) 携行品、服装等の指導

(6) 各地到着者一覧表(全日制のみ)

地名	葦崎	若神子	箕輪新町	長沢	三軒家	清里	野辺山	市場	海の口	松原湖	小海	八千穂	羽黒下	白田	中込	岩村田	三岡	小諸	計
男子	13	23	28	33	37	42	49	55	60	66	69	74	78	81	87	93	97	100	
女子	51	14	24	25	16	164	341	5	116	51	226	48	51	59	60	6	6	230	1493
女子						5	12	18	23	29	32								
到着						0	3	4	30	170	152								359

備考 (1) 女子出発地は三軒家、終点は小海

(2) 総稜数 { 男子 93,787km
女子 10,571km

(7) 事後の処理

- 1、検印カード、氏名票等の点検、一検印カードは生徒に返納
- 2、各クラス毎に到着地を出席簿に記入
- 3、各クラス毎に到着地別到着者数及び稜数一覧表作成
- 4、同上全校一覧表作成
- 5、関係印刷物、記録等の綴作成—保管
- 6、各関係者への礼状発送
- 7、反省会其の他

強行遠足に関する「アンケート」



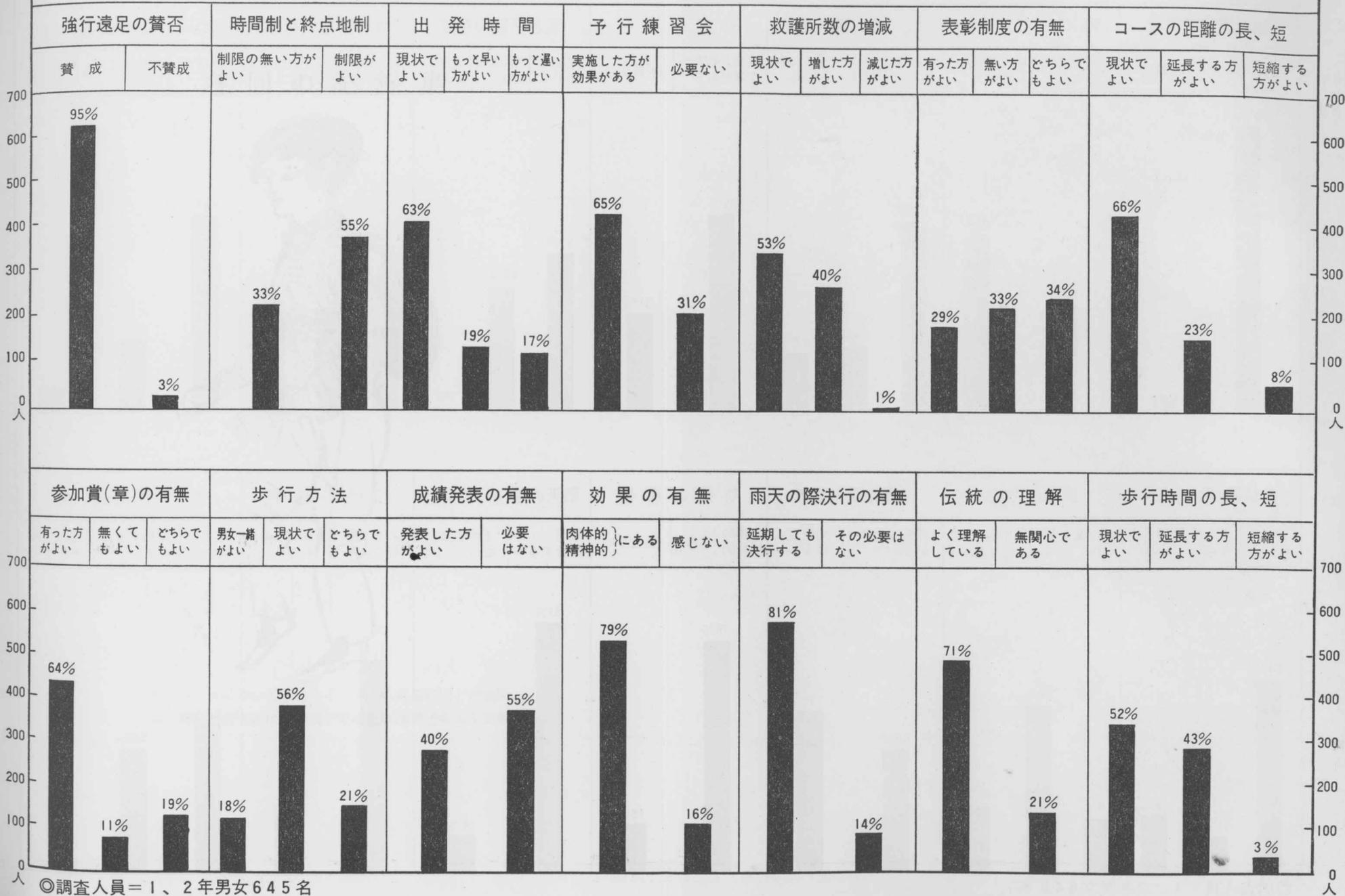
1. この「アンケート」は在校1、2年男女を対象として調査した。
2. 調査人員 645名
3. 小諸方面コース（第40回）調査のものである。

(昭和40年度)

強行遠足に関する「アンケート」

課 題	解 答					
強行遠足の実施について	賛成である 613名 (95%)			不賛成である 17名 (3%)		
時間制と終点地制	時間制で終点地制限のない方がよい 211名 (33%)			終点地制がよい 353名 (55%)		
出発時刻について	現状でよい 404名 (63%)	もつと早い方がよい 122名 (19%)	もつと遅い方がよい 107名 (17%)			
予行練習会について	実施した方が効果がある 419名 (65%)			実施する必要は無い 200名 (31%)		
救護所数について	現状でよい 341名 (53%)	もつと増した方がよい 259名 (40%)	もつと減らした方がよい 8名 (1%)			
表彰制度について	有つた方がよい 187名 (29%)	無い方がよい 216名 (33%)	どちらでもよい 239名 (34%)			
参加章(賞)について	有つた方がよい 415名 (64%)	無くてもよい 71名 (11%)	どちらでもよい 124名 (19%)			
コースの距離について	現状でよい 425名 (66%)	もつと延長する方がよい 149名 (23%)	もつと短縮する方がよい 50名 (8%)			
歩行時間について	現状でよい 338名 (52%)	もつと延長する方がよい 279名 (43%)	もつと短縮する方がよい 18名 (3%)			
実施期日について	5月 45名 (7%)	6月 15名 (2%)	7月 62名 (10%)	9月 185名 (29%)	10月 291名 (45%)	11月 22名 (3%)
歩行方法について	男女一緒がよい 118名 (18%)		現状でよい 361名 (56%)	どちらでもよい 137名 (21%)		
成績について (学年、組別のトータル)	成績は発表した方がよい 256名 (40%)			その必要は無い 356名 (55%)		
効果について	肉体的、精神的の効果がある 509名 (79%)			あまり感じない 104名 (16%)		
雨天の際について	延期してでも決行する 522名 (81%)			その必要はない 90名 (14%)		
伝統について	よく理解している 461名 (71%)			無関心である 138名 (21%)		

(昭和40年度) 強行遠足に関する「アンケート」グラフ表



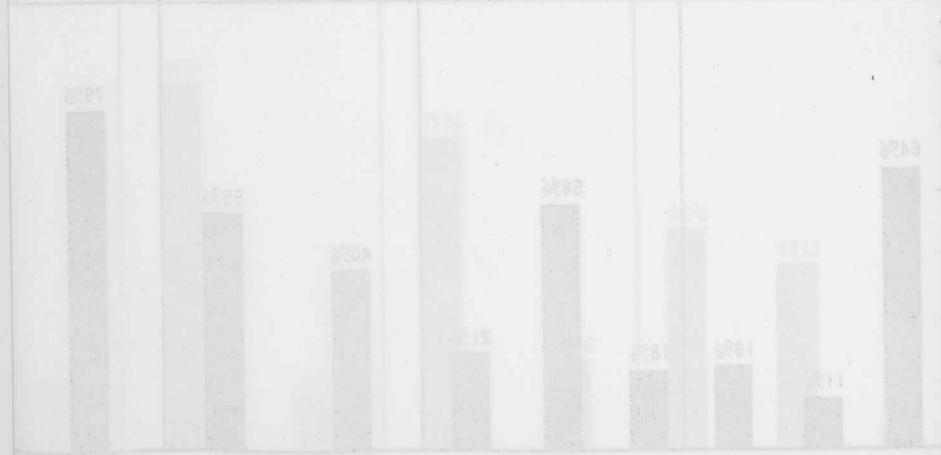
◎調査人員 = 1、2年男女645名

関二 式ア 行 記 (20年04月01日)

日	出	出	出	出	出	出	出	出	出
1	1132	1871	1871	1871	1871	1871	1871	1871	1871



日	出	出	出	出	出	出	出	出	出
1	1871	1871	1871	1871	1871	1871	1871	1871	1871



各 2 4 8 文 民 平 1 5 員 人 差 隔 〇

各 回 の 記 録 集



1. コースについては別に「コースの変遷略図」を参照
2. 毎回到着者数は第30回までは全日制男子のみを記載した。

第1回 大正13年 — 西暦1924

期 日 男子 11月4日

出発時刻 男子 4日午前6時 (校庭)

参加者数 男子全生徒 (生徒数の記録不明)

コース 第1班 東京方面 }
第2班 穴山新府城跡 } 生徒の希望によりどれかひとつを選ぶ
第3班 昇 仙 峡 }

制限時間 第1班のみ12時間制を定めた。

各地到着者記録は不明なれど、最高記録は上野原町 (64キロ) であった由。

第2回 大正14年 — 西暦1925

期 日 11月4日、5日

出発時刻 4日零時

参加者数 全生徒 (生徒数の記録不明)

コース 松本コースに変更
(学校) → (上諏訪) → (岡谷) → (塩尻) → (松本)
尚足弱者のために穴山新府城跡、御嶽昇仙峡コースが残された。

制限時間 本コースは24時間制と定め松本終点制とした。

各地到着者記録不明。

第3回 大正15年 — 西曆1926

期 日 男子 大正15年11月3日～4日
 出発時刻 男子 3日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (588名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (上諏訪) → (岡谷) → (松本)
 制限時間 男子 24時間 終点指定制 (松本)

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	長坂	小淵沢	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	村井	塩尻	松本	総計
男		201	10	162	57	46	65	10	7	3	1	3	9	14	588名
女															
計															588名

第4回 昭和2年 — 西曆1927

期 日 男子 昭和2年11月3日～4日
 出発時刻 男子 3日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (666名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (上諏訪) → (松本) → (福島)
 制限時間 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	長坂	小淵沢	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	塩尻	村井	迂辰野 迂回野 塩尻	松本
男		72	17	231	82	56	118	15	9	14	3	16	1	5	21
女															
計															

地名	迂辰野 迂回野 奈良井	木曾 福島	総計
男	3	3	666名
女			
計			666名

第5回 昭和3年 — 西曆1928

期 日 男子 昭和3年11月5日～6日
 出発時刻 男子 5日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (786名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (上諏訪) → (松本) → (贛川)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	長坂	小淵沢	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	塩尻	洗馬	小野	日出塩
男		42	13	166	98	111	164	57	33	7	17	12	2	8	4
女															
計															

地名	村井	松本	田沢	迂回松本	奈良井	明科	迂回贛川	総計
男	1	33	6	3	5	1	3	名 786
女								
計								名 786

第6回 昭和4年 — 西曆1929

期 日 男子 昭和4年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (858名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (上諏訪) → (松本) → (豊科)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	長坂	小淵沢	信濃境	日野春	富士見	茅野	青柳	上諏訪	下諏訪	塩尻	村井	松本	豊科
男	1	21	39	3	20	134	115	74	93	138	99	48	13	56	2
女															
計															

地名	総計
男	名 858
女	
計	名 858

第7回 昭和5年 — 西曆1930

期 日 男子 昭和5年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (853名)
 コース 男子 (学校) → (台ヶ原) → (上諏訪) → (辰野) → (松本)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	小野	辰野	川岸	岡谷	下諏訪	上諏訪	茅野	青柳	富士見	信濃境	小淵沢	長坂	台ヶ原	穴山	葦崎	地
男	76	75	66	30	112	83	77	71	141	9	58	10	26	12		
女																
計																

地名	塩尻	松本	総計
男	2	5	名 853
女			
計			名 853

第8回 昭和6年 — 西曆1931

期 日 男子 昭和6年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (859名)
 コース 男子 (葦崎) → (台ヶ原) → (辰野) → (松本) → (有明)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	小野	辰野	川岸	岡谷	下諏訪	上諏訪	茅野	青柳	富士見	信濃境	小淵沢	長坂	台ヶ原	日野春	穴山	葦崎	地
男	74	22	128	32	151	58	83	97	2	9	1	33	1	29	1		
女																	
計																	

地名	小野	塩尻	村井	松本	有明	総計
男	56	68	1	13	1	名 859
女						
計						名 859

第9回 昭和7年 — 西曆1932

期 日 男子 昭和7年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (859名)
 コース 男子 (学校) → (韭崎) → (台ヶ原) → (富士見) → (上諏訪)
 制限時間 男子 24時間

降雨のため途中中止

第10回 昭和8年 — 西曆1933

期 日 男子 昭和8年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (892名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (有明)
 制限時間 男子24時間

各地到着者一覧表

地名	韭崎	穴山	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	松本	有明
男		12	51	150	72	70	173	145	30	82	5	34	52	12	1
女															
計															

地	総
名	計
男	名 892
女	
計	名 892

第11回 昭和9年 — 西曆1934

第12回 昭和10年 — 西曆1935

期 日 男子 昭和9年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (875名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (梓橋)
 制限時間 男子24時間

期 日 男子 昭和10年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全制日 (891名)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (会染)
 制限時間 男子 24時間

各地到着数一覽表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	信濃境	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	松本
男		8	69	13	120	80	81	178	116	19	7	65	55	43	15
女															
計															

地名	島高松	梓橋	総計
男	4	2	名 875
女			
計			名 875

各地到着者数一覽表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	信濃境	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	松本
男		6	51	6	91	100	75	271	99	6	27	76	62	10	5
女															
計															

地名	豊科	会染	其の他	総計
男	2	1	4	名 891
女				
計				名 891

第13回 昭和11年 — 西曆1936

期 日 男子 昭和11年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (890名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (有明)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	小淵沢	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	松本
男		5	14	2	80	88	61	240	184	22	39	62	56	18	16
女															
計															

地名	豊科	有明	総計
男	2	1	名 890
女			
計			名 890

特記事項

- メダル線 1年 下諏訪 (151名) 2年 辰野 (49名)
 3年 小野 (37名) 4・5年 塩尻 (78)
- 賞状線 1年 茅野 (11名) 2年 上諏訪 (68名)
 3・4・5年 下諏訪 (95名)
- 弱体者 総員5名は4日午前6時校門出発 午後0時30分穴山着にて、
 附添教官と共に歩行した。

第14回 昭和12年 — 西曆1937

期 日 男子 昭和12年11月5日→6日
 出発時刻 男子 5日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (890名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (川岸) → (辰野)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	(雨天中止)	総計
男	5	8	76	151	274	282	45	21	21	7			名 890
女													
計													名 890

特記事項

- メダル線 1年 青柳以西 183名 2年 茅野以西 146名
 3年 78
 4年 上諏訪以西 88
 5年 85

第15回 昭和13年 — 西曆1938

期 日 男子 昭和13年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (871名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (豊科)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地 名	葦崎	穴山	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	松本	梓橋
男		6	23	73	110	124	237	147	14	21	46	33	26	8	1
女															
計															

地 名	豊科	総計
男	1	名 187
女		
計		名 187

第16回 昭和14年 — 西曆1939

期 日 男子 昭和14年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (914名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (豊科)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地 名	葦崎	台ヶ原	葛木	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	松本
男		12	3	139	156	55	292	63	32	17	61	39	29	1	8
女															
計															

地 名	島内	梓橋	立石	豊科	総計
男	2	1	2	2	名 914
女					
計					名 914

第17回 昭和15年 — 西曆1940

期 日 男子 昭和15年11月13日～14日
 出発時刻 男子 13日 0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (936名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者一覧表

地 名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井	松本
男		2	35	35	85	308	115	54	44	92	53	32	1	1	59
女															
計															

総
計
名 936
名 936

○降雨のため松本にて打ち切り (111.5km)

第18回 昭和16年 — 西曆1941

期 日 男子 昭和16年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日 0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,046名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) 松本 → (有明)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表第

地 名	葦崎	穴山	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井
男		1	3	21	22	43	122	266	36	141	185	49	31	1	3
女															
計															

地 名	松本	梓橋	豊科	穂高	有明	総計
男	111	8	1	1	2	1,046名
女						
計						1,046名

第19回 昭和17年 — 西曆1942

期 日 男子 昭和17年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 全日制 (1,184名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (有明)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	善知鳥峠	塩尻	村井	松本
男		2	8	19	32	129	201	53	145	242	56	10	98	1	160
女															
計															

地名	梓橋	豊科	有明	総計
男	18	3	2	1,184名
女				
計				1,184名

第20回 昭和18年 — 西曆1943

期 日 男子 昭和18年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,255名)
 コース 男子 (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (松本) → (松川)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	村井	松本	梓橋
男		2	2	2	9	22	171	83	160	265	152	121	1	227	14
女															
計															

地名	豊科	穂高	有明	松川	総計
男	19	2	1	2	1,255名
女					
計					1,255名

第21回 昭和19年 — 西曆1944

期 日 男子 昭和19年11月4日～5日

出発時刻 男子 4日0時 (校庭)

参加者数 男子 全日制 (685名)

コース (甲府) → (富士見) → (岡谷) → (小野)

制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	計
男		2	24	31	48	73	157	41	39	158	111	685
女												
計												685

戦時中につき1.2年生を対象として実施し小野を終点地とした

第22回 昭和21年 — 西曆1946

期 日 男子 昭和21年10月29日～30日

出発時刻 男子 29日12時 (校庭)

参加者数 男子 全日制 (1,743名)

コース 男子 (学校) → (岡谷) → (塩尻) → (松本) → (穂高)

制限時間 男子24時間

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	村井	松本	梓橋
男		10	61	57	22	351	202	357	77	228	132	121	6	96	14
女															
計															

地名	豊科	穂高	総計
男	5	4	1,743
女			
計			1,743

期 日 男子 昭和22年11月4日～5日
 出発時刻 男子 4日0時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,429名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (松川)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井	松本
男	1	1	32	55	22	437	57	180	52	157	94	136	7	1	168
女															
計															

地名	梓橋	豊科	穂高	有明	松川	総計
男	12	11	2	2	2	1,429名
女						
計						1,429名

期 日 男子 昭和23年10月29日～30日
 出発時刻 男子 29日12時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,160名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (松川)
 制限時間 男子24時間

各地到着者数一覧表

地名	葑崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井	松本
男		3	21	12	26	337	68	161	56	87	133	148			80
女															
計															

地名	梓橋	豊科	柏矢町	穂高	有明	追分	松川	総計
男	20		1	4		2	1	1,160名
女								
計								1,160名

期 日 男子 昭和24年10月26日~27日
 出発時刻 男子 26日12時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,151名) 定時制 (89名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (大町)
 制限時間 男子 24時間

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井	松本
男		16	36	37	47	479	15	157	16	63	25	165	5	1	133
女															
計															

地名	梓橋	豊科	柏矢町	穂高	有明	細野	松川	香掛	大町	総計
男	21	5		2	2	2	1	1	1	1,240名
女										
計										1,240名

期 日 男子 昭和25年10月31日~11月1日
 出発時刻 男子 31日16時 (校庭)
 女子 11月1日9時30分 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,370名) 定時制 (74名)
 女子 全日制 (104名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (大町)
 女子 (学校) → (葦崎) → (穴山)
 制限時間 男子 24時間
 女子 6時間30分 終点指定制 (穴山)

各地到着者数一覧表 (男子のみ)

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	村井	松本
男	2	16	61	45	21	639	17	183	19	61	19	141	9	5	185
女															
計															

地名	田沢	梓橋	南豊科	豊科	柏矢町	穂高	有明	追分	細野	松川	香掛	大町	総計
男	1	9	2	1		4	1	1		1		1	1,444名
女													
計													1,444名

女子104名参加するも詳細不明

第27回 昭和26年 — 西暦1951

期 日 男子 昭和26年10月25日～26日
 女子 昭和26年10月25日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 25日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,426名)
 女子 全日制 (231名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (大町) → (木崎)
 女子 (学校) → (葦崎) → (穴山) → (台ヶ原)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制 (台ヶ原)

各地到着者数一覧表 (男子のみ)

地 名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	南松本	松本	梓橋
男		4	19	48	43	41	481	384	22	40	20	141	1	143	37
女															
計															

地 名	豊科	柏矢町	穂高	大町	木崎	総計
男	2	1	2		1	1,426名
女						
計						1,426名

○勤務員輸送の関係により来年度女子は日野春に変更

第28回 昭和27年 — 西暦1952

期 日 男子 昭和27年10月25日～26日
 女子 昭和27年10月25日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 25日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,174名) 定時制 (114名)
 女子 全日制 (350名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (松川)
 女子 (学校) → (葦崎) → (穴山) → (台ヶ原) → (日野春)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制 (日野春)

各地到着者数一覧表 (男子のみ)

地 名	葦崎	穴山	牧ノ原	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	岡谷	川岸	辰郎	小野	塩尻	松本	梓橋
男		1	1	16	101	48	46	337	388	12	62	14	93	114	40
女															
計															

地 名	豊科	穂高	有明	松川	総計
男	8	4	4	2	1,288名
女					
計					1,288名

第29回 昭和28年 — 西曆1953

期 日 男子 昭和28年10月25日～26日
 女子 昭和28年10月25日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 25日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,123名) 定時制 (97名)
 女子 全日制 (286名) 定時制 (49名)
 コース 男子 (学校) → (岡谷) → (松本) → (豊科) → (大町)
 女子 (学校) → (葦崎) → (穴山) → (台ヶ原) → (日野春)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制 (日野春)

各地到着者数一覧表 (男子のみ)

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	広丘	南松本	松本	島内
男		8	94	52	54	380	240	20	66	6	70	1	1	90	1
女															
計															

地名	梓橋	豊科	柏矢町	有明	大町	総計
男	22	8	1	1	1	1,123名
女						
計						1,123名

第30回 昭和29年 — 西曆1954

期 日 男子 昭和29年10月25日
 女子 昭和29年10月25日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 25日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,120名) 定時制 (86名)
 女子 全日制 (実施するも人数つかめず)
 コース 男子 (学校) → (富士見) → (上諏訪) → (岡谷) → (川岸)
 女子 (学校) → (葦崎) → (穴山) → (台ヶ原) → (日野春)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制 (日野春)

各地到着者数一覧表 (男子のみ)

地名	葦崎	台ヶ原	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	総計
男		10	205	185	399	259	6	139	3	1,120名
女										
計										1,120名

○雨天の為先頭川岸にて中止、女子日野春到着者314名

第31回 昭和30年 — 西曆1955

期 日 男子 昭和30年10月25日～26日
 女子 昭和30年10月28日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 28日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制(1,111名)
 女子 全日制(211名)
 コース 男子 (学校) → (韭崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本)
 女子 (学校) → (韭崎) → (台ヶ原) → (日野春) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制(富士見)

各地到着者数一覧表

地名	韭崎	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	総計
男		6	19	3	6	233	355	227	220	36	6		1,111
女		3	30	46		132							211
計		9	49	49	6	365	355	227	220	36	6		1,322

○雨天の為先頭岡谷本部にて中止

第32回 昭和31年 — 西曆1956

期 日 男子 昭和31年10月25日～26日
 女子 昭和31年10月25日
 出発時刻 男子 25日12時 (校庭)
 女子 25日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制(1,172名)
 女子 全日制(249名)
 コース 男子 (学校) → (韭崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本以遠)
 女子 (学校) → (韭崎) → (台ヶ原) → (日野春) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制(富士見)

各地到着者数一覧表

地名	韭崎	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻	総計
男	4	4	36	0	1	177	43	102	155	8	324	17	111	22	52	1,164
女	1	18	32	14	3	181										249
計	5	22	68	14	4	368	43	102	155	8	324	17	111	22	52	1,413

地名	松本	梓橋	豊科	穂高	北野	松川	総計
男	83	3	8	2	1	1	1,164
女							249
計	83	3	8	2	1	1	1,413

第33回 昭和32年 — 西曆1957

期 日 男子 昭和32年10月14日~15日
 女子 昭和32年10月14日
 出発時刻 男子 14日16時 (校庭)
 女子 14日8時 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,145名) 定時制 (38名) 通信 (5名)
 女子 全日制 (231名) 定時制 (17名) 通信 (1名)
 コース 男子 (学校) → (葦崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本以遠)
 女子 (学校) → (葦崎) → (台ヶ原) → (上諏訪) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間 終点指定制 (富士見)

各地到着者数一覧表

地名	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	川島	小野	塩尻
男		44	14	2	230	42	61	200	3	254	18	105	1	22	64
女	39	22	100	0	86										
計	39	66	114	2	316	42	61	200	3	254	18	105	1	22	64

地名	広丘	村井	松本	梓橋	豊科	穂高	有明	松川	築場	総計
男	1	1	76	6	7	4	0	1	1	1,157名
女										247名
計	1	1	76	6	7	4	0	1	1	1,404名

○ 男子最終到着地築場 (167.1km (最高記録) 岩間孝吉)

第34回 昭和33年 — 西曆1958

期 日 男子 昭和33年10月29日~30日
 女子 昭和33年10月29日
 出発時刻 男子 29日12時 (校庭)
 女子 29日7時30分 (校庭)
 参加者数 男子 全日制 (1,235名)
 女子 全日制 (259名)
 コース 男子 (学校) → (葦崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本以遠)
 女子 (学校) → (葦崎) → (台ヶ原) → (日野春) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間30分 終点指定制 (富士見)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻
男		8	24	7	6	129	29	80	284	3	289	7	127	29	41
女		2	31	65	2	156									
計		10	55	72	8	285	29	80	284	3	289	7	127	27	41

地名	村井	松本	梓橋	豊科	穂高	有明	追分	木崎	総計
男		104	9	5	4	1	3	1	1,190名
女									256名
計		104	9	5	4	1	3	1	1,446名

第35回 昭和35年 — 西曆1960

期 日 男子 昭和35年10月28日～29日
 女子 昭和35年10月28日
 出発時刻 男子 28日12時 (校庭)
 女子 28日7時30分 (校庭)
 参加者数 男子 全日制(1,191名) 定時制(28名)
 女子 全日制(228名)
 コース 男子 (学校) → (葦崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本以遠)
 女子 (学校) → (葦崎) → (台ヶ原) → (上諏訪) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間30分 終点指定制(富士見)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻
男	1	5	12	13	7	185	11	75	198	17	321	39	103	1	29
女	9名	7	33	77	1	96									
計	10名	12	45	90	8	281	11	75	198	17	321	39	103	1	29

地名	村井	松本	梓橋	豊科	穂高	有明	大町	総計
男	26	131	33	7	2	2	1	1291名
女								223名
計	26	131	33	7	2	2	1	1442名

第36回 昭和36年 — 西曆1961

期 日 男子 昭和36年10月19日～20日
 女子 昭和36年10月19日
 出発時刻 男子 19日11時 (校庭)
 女子 19日7時30分 (校庭)
 参加者数 男子 全日制(1,091名) 定時制(17名)
 女子 全日制(254名) 定時制(16名)
 コース 男子 (学校) → (葦崎) → (岡谷) → (塩尻) → (松本以遠)
 女子 (学校) → (葦崎) → (台ヶ原) → (国界橋) → (富士見)
 制限時間 男子 24時間
 女子 8時間30分 終点指定制(富士見)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	穴山	台ヶ原	国界橋	瀬沢大橋	富士見	青柳	茅野	上諏訪	下諏訪	岡谷	川岸	辰野	小野	塩尻
男	4	7	16	12	3	137	31	66	147	8	298	35	91	41	48
女	1	5	4	128	0	126									
計	5	12	20	140	3	263	31	16	147	8	298	35	91	41	48

地名	村井	松本	梓橋	豊科	穂高	有明	細野	大町	総計
男	6	118	20	15	2	2	3	1	1112名
女									264名
計	6	118	20	15	2	2	3	1	1375名

第37回 昭和37年 — 西曆1962

期 日 男子 昭和37年10月16日
 女子 昭和37年10月16日
 出発時刻 男子 16日17時 (体育館)
 女子 16日 8時 (箕輪新町)
 参加者数 男子 全日制 (1,108名) 定時制 (18名)
 女子 全日制 (264名) 定時制 (11名) 通信 (2)
 コース 男子 (学校)→(葦崎)→(清里清泉寮)→(野辺山)→(松原湖)
 女子 (箕輪新町)→(長沢)→(清里清泉寮)→(野辺山)→(松原湖)
 制限時間 男子 15時間 終点指定制 (松原湖)
 女子 7時間 終点指定制 (松原湖)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	若神子	箕輪新町	長沢	三軒家	清泉寮本部	野辺山	市場	海の口	松原湖	計
男	7	25	11	3	8	607	146	8	44	267	1126名
女				0	1	70	125	6	61	14	277名
計	7	25	11	3	9	677	271	14	105	281	1403名

第38回 昭和38年 — 西曆1963

期 日 男子 昭和38年10月16日~17日
 女子 〃 10月17日
 出発時刻 男子 16日 21時 (体育館)
 女子 17日 7時30分 (箕輪新町)
 参加者数 男子 全日制 (1,236名) 定時制 (21名)
 女子 全日制 (288名) 定時制 (31名)
 コース 男子 (学校)→(長沢)→(野辺山)→(小海)→(中込)
 女子 (箕輪新町)→(清里)→(野辺山)→(海の口)
 制限時間 男子 17時間 終点指定制 (中込)
 女子 5時間 終点指定制 (海の口)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	若神子	箕輪新町	長沢	三軒屋	清里	野辺山	市場	海の口	松原湖	小海	八千穂	羽黒下	三反田	中込
男	15	19	13	27	4	471	442	21	93	141	19	13	4	3	72
女					1	36	263	1	18						
計	15	19	13	27	5	507	705	22	111	141	19	13	4	3	72

総計
1257名
540名
1,797名

第39回 昭和39年 — 西曆1964

期 日 男子 昭和39年9月30日～10月1日
 女子 昭和39年10月1日
 出発時刻 男子 30日21時 (体育館)
 女子 1日7時30分 (若神子小学校々庭)
 参加者数 男子 全日制(1,424名) 定時制(19名)
 女子 全日制(318名) 定時制(26名)
 コース 男子 (学校) → (葦崎) → (野辺山) → (海の口) → (中込)
 女子 (若神子) → (箕輪) → (長沢) → (清里) → (野辺山)
 制限時間 男子 17時間 終点指定制(中込)
 女子 5時間 終点指定制(野辺山)

各地到着者数一覧表

地名	葦崎	若神子	箕輪新町	長沢	三軒屋	清里	野辺山	市場	海の口	松原湖	小海	八千穂	羽黒下	白田	中込
男	43	30	25	40	8	292	355	36	179	154	84	31	10	10	127
女			3		169	146									
計	43	30	25	43	8	461	501	36	179	154	84	31	10	10	127

総計
1424名
318名
1742名

第40回 昭和40年 — 西曆1965

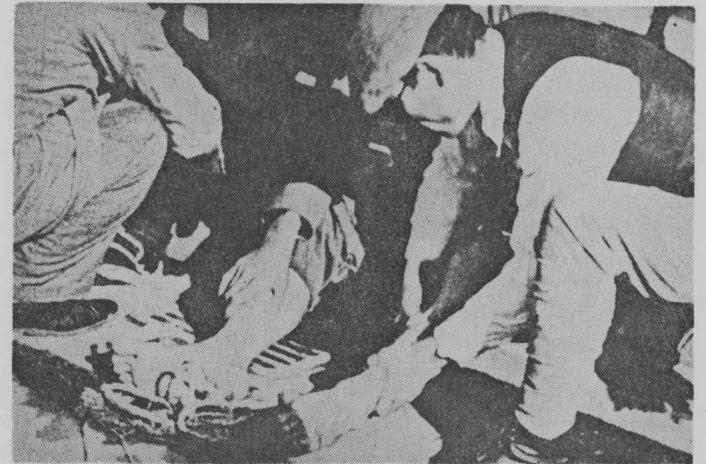
期 日 男子 昭和40年10月15日～16日
 女子 昭和40年10月16日
 出発時刻 男子 15日17時30分 (体育館)
 女子 16日7時30分 (三軒屋)
 参加者数 男子 全日制(1,495名) 定時制(40名)
 女子 全日制(399名) 定時制(24名) 通信(1名)
 コース 男子 (学校) → (長沢) → (野辺山) → (中込) → (小諸)
 女子 (三軒屋) → (清里) → (野辺山) → (海の口) → (小諸)
 制限時間 男子 20時間 終点指定制(小海)
 女子 5時間30分 終点指定制(小海)

各地到着者数一覧表(全日制のみ)

地名	葦崎	若神子	箕輪新町	長沢	三軒屋	清里	野辺山	市場	海の口	松原湖	小海	八千穂	羽黒下	白田	中込
男	48	14	24	27	16	165	343	5	115	50	227	49	50	58	62
女							3	4	30	171	153				
計	48	14	24	27	16	165	346	9	145	221	380	49	50	58	62

地名	岩村	三岡	小諸	総計
男	5	6	228	1492名
女				361名
計	5	6	228	1853名

「強行遠足の意義とその実際」の記録より



昭和16年（第18回）と言へば支那事変より引続き大東亜戦争に突入した年である。総てが軍中心主義時代であり、学校教育の方針もこの線に沿って行われたのである。従って当時の強行遠足も多分に「強歩即強兵」のローガンのもとに強調されたのは当然のことであろう。

終戦後120度の転換をなし、民主時代に変貌した。当然教育のあり方についてもこの線に従って為されるようになったのである。

従ってこの強行遠足も今度はこの時流に適した目的を設定し、その方法、形体も時誼に適したように実施されたのも当然と言へよう。しかし今も昔もその根本精神には何等変わるところ無く、第1回以来の趣旨に添って今も尚脈々として伝えられてきているのである。

昭和17年発行による「強行遠足の意義とその実際」は主として昭和16年第18回の記録を中心として編集されたものであるが、その中に記述してあることや又当時の考へ方、実施方法等其の他を知ることも決して無駄ではなく寧ろ当時の歴史の一端を物語る貴重な資料である。

ここにその一部を抜粋して記述し、参考に供する次第である。

「強行遠足の意義とその実際」の記録より

◎「強行遠足の意義とその実際」のはしがきに当時の大野芳麿校長はこう記述しておられる。

「歩行と言う事が人間の健康と精神鍛練とに有効なことは申す迄も無いが特に高度国防国家建設に邁進しつつある我国にとりては、国民全般の体位向上に止まらず、強靱なる肉体と剛健なる精神が要請せられつつある事は、今日程熾烈なる時代はないと思われる、然るに従来学校教育に於いて各種の運動競技が実施せられて居るに拘らず一般生徒の体力は降下した感が深い、之れには種々原因があると思うが要するに今日の状況は実行するよりは観覧する方が盛んな為めでは無いであろうか、学校に於ても運動の普遍性が叫ばれて居るけれども真に本気になって運動する生徒は果して全体の何割であろうかと思えば心細くならざるを得ない。然しその責任の一部は我等實際教育家も負わねばならぬ事は言う迄もない事である。

本校では既に大正13年以来強歩に就いては毎年之を実施し来たのであるが、年を経るに従って全校生徒の関心も深まり来り、同時に一般社会も此の企画に対して期待を持つ様になって今日では本県下は勿論、全国の学校が其の効果を認めて種々の方法の下に強歩に依る鍛練を実行するようになった事は、国家のため慶賀の至りである」(以下略)

◎歩くことの伝統を継ぐ。

古来武田流の軍学に於いては健脚と言うものを重視し、甲州勢の超人間的の行軍は当時の戦国時代の武将の一大脅威であった。四面高峻な山岳を以って囲繞された甲州は四隣に出兵するには僅かに開かれた高い峠を越えねばならぬ、而して我が武田氏は屢々兵を駿、信、参、尾に出したことは何人も知るところである。就中史上有名な川中島の合戦は、八ヶ岳東麓平沢峠を越え一部は本校強行遠足道路を諏訪に出て、和田峠、塩尻峠方面から進撃したのである、

又武田氏の哀史たる長篠、三方ヶ原両合戦もまた同道路によって諏訪を経て、天竜川を南下し、西上したものである。思うに数万の軍と、その兵馬の糧、武器を運搬しての出陣である故、現代の機械化兵団の機動戦には及ぶべ

くもないが、その奇襲は屢々敵をして狼狽せしめたことは今猶多くの史話が之を伝えている。要はこれ脚力によるのである。かの永禄四年の川中島合戦には信玄公は八月謙信公出陣の報に接して兵二万を率いて十八日甲府を出立し、廿四日には既に川中島に着陣、西条山雨宮渡しを切り取つて越後勢の後方遮断に出ている、その間前後七日、北信の越後近き地への出陣である、その快速思ふべきである。

又近来にあつては、我甲相健児よりなる郷土部隊は優れた行軍力を有するを以て天下無比と聞いている。かの第二次上海戦に於いて、吾等の津田部隊が上海附近の頑敵を一挙にして潰滅するや、江南の野を長駆して蘇州より南京に怒濤の急追をなし、再転して杭州に南下して錢塘江畔に敵を圧迫した。更にその間江南の沃野に、南戦北伐を重ね、一度北上するや中支の大平原を疾風の如く、阜寧を衝いて徐州作戦に参加し、泥濘路を西に向つて数百里、漢口作戦に転じて廬山の峻嶮をよち、徳安を陥れ修水河畔に進撃した。その足跡中支にあまねしと言うたとて過言ではない。

武田氏の旗幟に「疾如風、静如林」とある真に疾き事風の如し、用兵作戦の最後の決は脚力にあるの信念を深うする。かくの如く歩くこと、健脚を誇る事は本県民の特徴であり、特質である。この特質を承け継ぐ吾等はこの尊い伝統を生かさねばならぬ。

◎精神的陶冶の発見。

この強行遠足を実施してきて昨年で18回になる。各回に於ける成績は逐年向上の跡を示している。最初は漫然として歩くと言う唯一の目的を考えてその他は副次的収穫として軽く見ていたが、この歩く事を続けているうちに歩く事自体以外に重大なる精神的陶冶の存することが明瞭になってきて、この吾人の催は教育的作業として偉大なる使命を持つことを自覚することができた。

◎強行遠足は寧ろ精神的訓練の場である。

血気に逸って暴虎馮河的の行為をしてはならぬ。最初の元気に任せて猪突的の疾走をしてはならぬ。病後や病身では絶対に参加しないこと。途中で故障が起つたら中止すること等、呉々も戒めてある。特に実施の前日には各学年各組について、学級監督が生徒一人一人にわたり其の身体状況につき細心の視察を行ない、如何かと思われる者については適當の指示をなし、或は校医の觀察をうける等の細かい注意を払っている。校長からも講堂、訓話其の他の機会を利用し、この点充分に注意して無理を厳禁している。だから生徒

は先輩の經驗を聞き、自分の体力に応じた計画をたて、その計画に従つて行動して無理のない事を期すると共に、頑張りの指針となしている。而して吾々はこの運動の效果に於いては体育的方面よりも寧ろ精神的訓練を重視するものである。

◎運動には適している強行遠足。

第18回の成績から見ると参加人員1,045名、一人平均81.4キロ、この総和は85,1485キロで実に一日にして地球を二周回して猶餘りあるのである。この外之がための準備練習やこの他有意的に行なわれる運動量を加算したなら真に驚ろくべき数値を示すことだろう。全校一斉的運動日の催として最も適當のものである事は、この事実が雄弁に物語っている。

◎「強歩即強兵」論

歩くと言うことが生理的に好いことは今更言うまでも無い事だが、歩くことに自信を持つ有難さは今回の戦争で実戦に携つた本校の卒業生が口を揃へて「強行遠足」を礼讃しているのを見ても諒解できると思う。

軍隊では行軍が作戦のあらゆる基礎を為している、行軍力の如何が軍の作戦行動に至大の役割を演じていることは、大陸に於ける数々の実戦が証明している。従つて「強歩即強兵」と言い得る。某将官の話では「軍隊が将来いかに機械化するとも、歩兵の歩行が不必要になることは無いのみでなく、戦争の究極は歩兵の突入によって決定される」と言っている。北支に或は南支に奮戦しつつある本校の卒業生の多数が強行軍によく堪へ得たのは、中学時代の「強行遠足」に堪へた脚の自信の賜だと異句同音に「強行遠足」を礼讃している。

◎「行の悟り」をもたらした強行遠足。

夕陽將に没せんとして晩秋の夕風身にしみ、一種哀愁身に迫る時、坦々砥の如き信濃路を辿る。彼等の脚は痛み、彼等の疲労はその極度に達する。然し彼等の意気は少しも衰へぬ。必死の努力を続けて、飽く迄もゴール目掛けて突き進む、この悲壯の決意、不屈不撓の精神、それは将来彼等に何をもちたらずであろうか。由来本校生徒は盆地の中央の恵まれた環境に育まれた為か、粘りと頑張りに欠けていたかの感が深かったが近来面目一新、刀折れ矢尽るまで奮闘を続ける粘り気が出てきた。これこそ強行遠足の行の哲学から得た尊い悟りではあるまいか。

◎感情の融和を計る。

疲労困憊した学友をいたわる濃かな友情の発露は随所に発見し得る。弱者

に同情する武士道的精神、自己犠牲の尊い行為であるとともに長幼相接触の好機会である。塩尻や松本までに伸る健脚強剛の者も亦たがい助け合い、励ましあって各自其の優勝を冀うからこそあの輝やかなしい記録が作れるのである。こうして艱難を共にして交わされた友情は彼等を強く堅く結びつけるのである。教師、生徒、卒業生、凡てを同一感情に融和せしめて、渾然として学校愛の一色の中に包含せしめるこの強行遠足の収穫も亦大なりと言わねばならぬ。

◎団結心の強化育成。

第十八回強行遠足には各学年中最優秀の成績をあげた組に優勝額を授与し之を各教室に掲げさせてその榮譽を表彰することにした。

従来もこの考へがあったが、組対抗と言う意識が強くなると、若い者だけにどうしても無理が出てくる。足弱者でも強制的に歩かせるとか、その日の成績が悪ければ罰則を加へるとか、種々の弊害がつきまとうであろうと憂慮した結果、今まで実行を躊躇してきたのである。然し時局は重大だ、戮力協力、火の玉の団結心が強要されている、僅か4、50名からなる一組が団結一致出来なくてどうして学校の団結が出来よう。一学校の団結を見ずして一国の団結が望めようか、こうした見解から多年の逡巡をふり捨てて組の優勝を争わせることにしたのである。さてこの快挙を発表するや学校内は湧きあがった。各組は種々の計画決議を行ない、今まで個人々々の勝手な準備足ならしが、団体的、統制的の予備運動となり、教室内へは激励決意のポスターが貼出され、11月4日のその日に備へる気構は熱烈火と燃えあがったのである、かくて当日には随時随所に献身的学級愛、鉄の如き団結心が展開されたのである。

こんな例もある。

それは本年優勝した4年1組の話だが、彼等はひそかに去年一位を獲得した5年4組の平均軒数を調べ、そこで彼等は策を練り議を凝らして各人最小限度を小野までと定め、可成的それ以上に進出することを誓った。その結果平均軒数は昨年的一位を凌駕すること約10軒と言う快記録であった。学校当局に秘めて、こうした申し合せや誓や決議は各組とも行われた事は勿論である、苦難に耐え、困苦を克服し、唯一筋に共同の理想へ向って総突進する事は大東亜新秩序確立の大使命を負う、青少年学徒にとって欠くべからざる信念でなくてはならぬ。幸いにも本校のこの強行遠足がこの信念、この団結心この不撓の精神を培うことに役立つことに自信が持てることを喜ぶものであ

る。

◎人格の陶冶

学校の総ての教育的作業は人格の陶冶、即ち「強き良き日本人の完成」と言う究極目的達成のための手段であり方法であり道程である。吾人のこの企ても亦この目標達成の一部面であることは言うまでもない。

従って吾人の務むべき重点は形式的体制の完備もだが、よりこの企てにより得られる精神的訓練を生かす内容的、実質的方面であらねばならぬ。形式体制の完備はよりよき精神的収穫を得んがための方便に過ぎぬ。

一応形式完備を見た今日、今までもそうであったが今後更に彼等のこの体得した精神を彼等の学業に、彼等の日常行為に不断に反映せしめ、小にしては「甲中魂」、大にしては「よき日本人」として君国のために自分の全身全霊を傾倒し得る大人格を作りあぐべく系統的、組織的の指導を図ること、これこそ吾人にとって不息不退転の精進であらねばならぬと思う。

「理屈抜きで歩む」ことがいかに必要であるかは「脚を鍛へよ、健脚者たれ」と決戦体制下にある国家が統後の吾々に向かって要求している現実を噛みしめて見れば十二分に認めて頂けることと思う。

◎強歩練習会

(1) この強歩練習会は最初の思いつきは単なる足馴らしの意味の運動であったが、本昭和17年度に団体的訓練を加味した事によってその面目を一新し、強い団結心と相互扶助の精神を培う役割を果す事が出来たのは頗る欣快とする所である。最優秀班は30キロの道程を3時間30分で走破したのである。最劣等の班と雖も5時間16分を要したに過ぎない。7人乃至8人が一班となつて中には定めて脚力の優れた者もあつたであろうし、又脚力の劣っていた者もあつたに違いない。この強弱混淆の一団が互に助け合い励まし合い慰め合い渾然一個の人格となつて目的に向つて奮進した姿は真に尊い体験でなくてはなれどあろう。この精神、この教訓が真珠湾の花と咲き、マレー沖の体当りを胚胎するものでないとな誰が否定できよう。こうして吾人は教育的大収穫を収め得た事を確信するものである。

(2) さて新涼の動く9月末になると、そろそろこの強行遠足が生徒の話題のほり、猛者連はぼつぼつ足ごしらへの準備に取りかかるのであるが、大部分の生徒は、その日突然に大強行すると言つた案配であつた、そこで学校としては総ての生徒に対して足ごしらへの準備運動を行うことが必要であると考へ、昭和16年から「強歩練習会」と名付けて第1回を実施したのである。

コースは学校を出発し千塚→葦崎→竜岡→六科→信玄橋→竜王→荒川橋→相川堤→学校の循環コースで約30軒の行程であった。

第2回(昭和17年)には前述の通りこの強歩練習会を一層強化することになり次の根本方針を確立させたのである。

- (イ) 春季…5月上旬に行ない団体訓練を加味すること。コースは30キロコースによる。
- (ロ) 秋季…10月上旬に行ない、主として個人強歩とする。コースは50キロに延長。

◎社会の関心と同情。

諺に「わたる世間に鬼は無い」と言うが、本校はこの強行遠足をここに18回行ってきた。その間、心から感激に堪へないことは、社会の人々がこの遠足に対して絶大なる関心と同情とを寄せられる事である。吾等はこれ等の好意に対して深甚の感謝と感激とを覚えると共に、今更に自らの責任の重大なるを感ずる。

今これに就いて述べてみようと思う。

- 先ず本遠足の前後から本県は勿論中央並に沿道各地の新聞等により頻りにこの記事を掲載して激励してくれる。これが為めに地方の人々も異常な関心を持って激励してくれる。
- 出発当夜は生徒の父兄は勿論、その他一般市民もこの壮挙を見んものと正門前に集り激励する者の数は非常に多く、又沿道の関心と同情とに至っては何んとも表現の語を知らない。
- 葦崎町某父兄方は、只今手に入れ難い砂糖を当局の許可で近隣のものを集めてきて、本校千餘名の生徒に甘い砂糖麦湯を出して接待してくれた。
- 台ヶ原に於いては菅原村当局者と同国民学校(現在の小学校)との御好意を思うと頭が下がる。此の地は殆んど全員が通過し、而も前日より係員が出向いて麦湯よ、砂糖よ、薪木よと仕度を要する処。然るに同村では人夫を雇うてまで終夜お世話下さったのである。
- 特に信濃路に入ってから各救護所を依頼したお宅の到れり尽せりの御親切。
- 各警察署、同派出所、同駐在所の御配慮、又各駅の証明書、疲労した生徒の介抱、切符購入に対する指導、就中甲府運輸事務所、甲府駅、上諏訪駅塩尻駅、松本駅の当局の方に対し満腔の感謝を捧げる。
- 松本に於ける年々の本校出身の松本高等学校生徒の終夜の労力奉仕、又同

地卒業生の有力者が何かと配慮下さることも有難い極みだ。

- 病気の生徒の介抱、菓子、果実を恵与する。疲れた生徒を駅まで連れて行く。こうした例は数へ切れぬ、「信濃の人は親切だ」と生徒は述懐する。
- 雨中松本市に入った時「甲中生か、しっかり頑張れ」と中年の紳士が街頭から大声で叫んでくれた時、くたくたに疲れていた生徒はきつと顔をあげてその方を見た。そうして黙々と歩んでいた一生徒は「あれを聞いて涙が出て仕方がない、僕は泣いたぞ」とつぶやいた。同行の7、8名の者も皆同感であったようだ。青年は感激性が強い。これを利用せねば教育は空虚になる。又こうしたことが生徒に社会的温情を如実に訓へるものとし、吾等も亦これを生徒の生活に織込む責務あるものとして感激している次第である。

◎甲中魂はかくして実を結んだと言う話。

冲天の意気は燃えても痛む脚、疲れた身体は見る目も痛ましい。これを目撃した荷車挽きや、自動車の運転手などが痛く同情して乗車を勧めるのである。一度二度は断るが然し三度、四度と度重なると意志の弱い者は、遂にはうかうかこの誘惑に負けて了う。又は街道を疾駆するバスを見ては矢も楯もたまらず、こっそりとこれを利用して自己欺瞞を企てる、こうした卑劣手段を弄する者が僅少ではあるが有ったことは事実だった。学校では神聖なるこの行事に、かかる卑劣な行為が行われることは最大なる遺憾であるとし、極力これが指導を加へ、深い反省と自覚とを促した結果、最近に至ってはかかる不正行為は全く跡を絶ち、彼等はあらゆる誘惑の陥穽を排除して強い信念に立ち、正々堂々の歩みが続けるようになった。このように確乎たる信念に燃え、正道に立脚して、祖国愛に燃ゆる魂をつくりあげることが私達に課せられた任務ではないだろうか。而して困苦に堪え窮乏を忍び、不撓不屈、進みて止まざる甲中魂、顧みてやましきところ無くんば千万人と雖も我往かんの気魄、こうして漸次実を結んで行ったのである。

表彰の歴史

表彰に就いては大体の規定があったが、これも当日の天候とかその時代の情勢によって屢々変更されたのである。

例えば第10回に於いては、2年生のメダル線を川岸に引き下げた。この理由は、前年降雨のため2年生は強行遠足に対しては未経験である点。又第12回13回とも午後降雨のため全学年のメダル線を一駅引き下げた等である。

■ 賞については四つの階級を置いたが次の通りである。

○ 佳良賞 1年は茅野以上、2年は上諏訪以上、3、4、5年は下諏訪以上。但し第16回以後は廃止された。

○ 優秀賞 1年は下諏訪以上、2年は辰野以上、3年は小野以上、4、5年は塩尻以上。

かつては賞状の外に銅メダルを附したので、この限界をメダル線と呼んでいた。現在ではメダルは附せられない。かつてのメダルは銅に校章の桜花を銀色にて浮かし、中央に草鞋を組み、下に優の字を配し、裏側に「強行遠足」「甲府中学校」の文字を浮かせてあった。

○ 特別優秀賞 松本以北に到達した者に与えられ、これにもメダルが添へられたが今はない。

第18回（昭和16年）より各学年中に於ける最優秀組に（平均距離最高位）授与した。

○ 最優秀賞 その年に於ける最高記録者及び各学年中、従来の記録を破った新記録者に与へた。

この外特典としては5ケ年の中に銅メダル5ケを獲得した者には、卒業時に特に金メダル又はこれに準ずる記念品を授与した。

又この外に新記録をつかった者には卒業に当って記録賞を授与した事もある。

○ 特別賞 職員、順行者は年令によって1年又は2年の優秀線を以って優秀者として賞状を授与した。

—（以上「強行遠足の意義とその実際」より抜記）

■ 終戦後世相も一変し、11月4日の体育日も自然消滅の形となり、適当な日時を選び、出発時刻も第36回迄は正午に変更された。そしてメダル線もいつしか姿を消したが、時代によっては参加賞、又は優秀賞として与へた。しかし学年別、組別の成績は引続き作成され発表されたのである。

■ 昭和37年（37回）小諸コースに変更された際、表彰制度は廃された。この理由は「表彰制度があると生徒は遂に無理をする。現今の生徒は昔の生徒と違って医学的に見ても諸機能が弱っている者が多い、従って無理から起る弊害があつてはならない。」と云うことから走ることを禁じ歩行することを原則としたのである。成績も単に記録に止めた程度である。

■ 昭和40年（40回）には、創立85周年記念行事の一環として実施したので参加者及関係者全員に記念メダルを授与した。

寄稿集

- 強行遠足一年生……………後藤 昇
笹子饅頭……………保科太郎
遠い灯……………伊藤忠一
強行遠足余談……………島田武
行としての強行遠足……………石丸午郎
強行遠足の思い出……………岩下竜一
最初の強行遠足……………堀内好訓
神と共に走りぬ……………岩間孝吉
強行遠足……………小林寛



強行遠足一年生

教 頭 後 藤 昇

昭和40年10月15日、第40回強行遠足は快晴に恵まれて係職員総勢97名は、早朝から分担の持場へ各々散っていった。

去る4月赴任したばかりの強歩一年生とも謂うべき私は、部厚い実施要覧を唯一のたよりに、午前10時学校を出発、勤務地の野辺山本部へ向った綿密周到につくられている実施要覧にそれを準備した係職員の長い労苦を偲び、更に多分に伝統の重荷を感じながら大きな不安がずっしりと心の底に沈澱していった。準備、実施両段階の労力と効果との比例関係昨今の交通事情が急増期のピークにある2千有餘の生徒の健康安全を確保することができるか等、不安はつきない。然し10月初旬修学旅行で行動を共にした2年生諸君の「学校行事で最も印象の深いのは強歩である」と言う言葉に勇気を取り戻して、八ッ岳高原の秋冷の気を胸にいっばい吸い込んだ。

野辺山本部係職員8名と外部からの応援3名とで薄暮までに準備を終るのは容易ではなかった。夕食を終わって8時に雑魚寝にまどろんだかと思う間もなく清里からの電話で叩き起された。先着が1時間余り予定より早く到着するとの情報である。先着の内藤君は11時15分に到着、予想より実に1時間15分早い、零下3度の冷気の中で、伝統のしじみ汁の匂いと若者の熱気で異常な雰囲気盛りあがる。男子1,212名、女子384名を処理し終る。時間は16日10時30分である。くたくたになりながら各地からの無事故と好成绩の電話に顔がほころびる。

第40回強歩の全行程は学校小諸間で約100軒、野辺山本部はその中間50軒の地点に位する。最終地点小諸への到達者も235名と予想の二倍強、全地点事故者もなく大成功であった。

強行遠足のはじめの精神であると云われる自然の中に自己を解放して活力の源泉を自覚すると云う目的は十分に達成されたことと思われる。

零下数度の高原の夜の道を自己の活力の限界を独りまさぐりながら、それを超えて多くの人達が頑張っていた。この貴重な体験は生徒諸君がやがて遭遇する人生の危機に際して、人間的力量を発揮するのに大いに役立つであろう。

甲府一高は周囲の一木一草から掲げられている書画の類に至るまで、総て伝

統校に相応しく品位と風格がある「Boys be Ambitious」等これらの理想を実践を通して生徒諸君の血肉と化さしむるものが強歩であると思う。

ただ一度の強歩の経験であるが、既に40回に亘って永い歴史の流れの中で不死鳥のように生き残ってきた理由の解るような気もするし、又奇跡と言われる無事故の業績も職員生徒の意気ごみの然らしむるものであり、外郭団体や長野の人々の親切も忘れてはならない。

生徒全員が参加する意義深い体育行事、それは教師の夢である。然し私は他校に行って強歩を真似ようとも思わないし又簡単に真似することはできない。

然しその精神には深く学びたい。一高の強歩に敬意を表すると共に、そのいよいよ盛んなることを念願している。

笹子饅頭

昭和4年卒業生 保科太郎

東京オリンピック以後、根性という言葉がいわれるようになったが、私は根性とは早急に築きあげられるものでなく、苦しみの壁を何度か経験しているうちに生れてくるものであると思う。私は母校に在職中、齡三十路を過ぎて応召され満州の軍隊に一兵卒として入隊し、終戦後はシベリヤに抑留された身であるが軍隊での度重なる長距離行軍や身の毛もよだつシベリヤの氷雪原野の行軍と抑留生活で生るためのたたかいに、よくも耐えることが出来たと思っている。それは私にとっては中学時代や母校在任時代の強行遠足の体験が私の強い精神力となってこれを克服しえた信じ、今もなおそれを自負しているが、これが私の根性だと思っている。

私の強行遠足の体験は江口校長が創始した大正13年、当時私が中学1年の時にはじまったものであるが、初回は甲州街道を東へのコースが行なわれた。午前六時から所要時間12時間であったと思う。然しこのコースは笹子や小仏の峠越えの難関があったので、その翌年からは信州路のコースに変更されたときいている。私の思い出はこの時にはじまるのであるが、当時小柄で気の弱かった私は笹子峠の登口から江口校長におそるおそる随行して山道を歩く要領や登山の心得などを教えられたもので、今でも記憶が残されているが、何時しか先生に親しみを感じ笹子駅前の茶屋に招かれて小休止の折に、笹子饅頭をご馳走になったものである。

当時は師の陰をふむことすら出来ない程に思っていた先生、しかも校長手ずから饅頭を戴いた感激は子供心には強く響き印象づけられている。この時に江口校長の踵に、その頃の二銭銅貨大の豆が出て驚きかつ痛々しく感じた思い出などをとおして、今にしていえば、江口校長に饅頭を戴いたからではないが先生の慈愛心と校長自ら実践躬行の範を示した尊い姿に敬慕の念が無垢な私に感受しはじめたものである。

毎年11月3日の明治節、午前零時を期して校舎前庭にうず高く積んだ古傘の山に、晴天を祈って点火した大かがり火、こんなことにも配慮があったのであ

ろう、太鼓の音も勇ましく一路信州路へ出発したものであるが、何時も台ヶ原附近が一つのヤマ場であった、歯をくいしばっての上諏訪駅前到着のしじみ汁や善知鳥峠の砂糖湯等今なお胸をときめかすような中学時代のあの思い出は確かに剛健な精神、今でいう根性が培かわれたと思っている。

私が母校に就任してからはこの中学時代の体験がものをいい、時恰も戦時体制でもあったので後輩たる生徒にも、強行遠足未経験の新任の教師にもよく発破をかけたもので、昭和17年(19回)、昭和18年(20回)は強行遠足の最高潮に達した年であり、その頃国家的にも高く評価されて当時の陸軍省やスポーツ医学界等の関心がたかまり、これが徴兵適齢引上げ案の資料ともなったときいている。

この昭和17年の4月、強行遠足の科学的究明や冊子発行のため私ども研究班は学校の玄関から松本駅前までの全コースのみちり実測を計画し、私は島田先生と組んで小野駅前から松本駅前までの道程を測定することになり、早朝から50米のロープを携行して当駅前から善知鳥、塩尻、松本平へと逐次50米毎に測って行ったものである。今おもえば余りに原始的な測量であったが漸くして夕刻松本市街にさしかかった折、一大事変が起った。市街には大衆が所々に群がり何事かささやき、人心の動揺する様を私どもはいぶかしげに近寄ると、何とニュース速報板にアメリカ空母艦載機の東京初空襲の報であった。時に4月18日であったが私どもの肝をつぶしたこと想像以上のものがあつた。

戦争もこれから激烈になり私もやがて応召の身となつたのであるが、終戦後20年の今日、民主主義のかげに人間形成に核心を失ないつつある現地点において、このような行事をとおして、青少年に強固な意志、苦しみに耐えうる根性を培かつて行かねばならないことは、この強行遠足の真価を知る者の共感ではないかと思っている。それだけに江口校長の創意に礼讃を送り、あえて笹子饅頭と題した次第である。

(註) 筆者は元甲府一高教諭現増穂商業高校長、昭和17年発行の「強行遠足の意義とその実際」の編集委員。

遠い灯

元甲府一高教諭 伊藤忠一

私は本校(甲府中学校時代)に昭和3年就任して以来、通算して在職30有餘年になる。この間満州事変、支那事変、大東亞戦争を味い、総てが戦時体制下にあつたわけだが、終戦とともに日本も大きく転換し、時代の移り変りと共に教育面にも大きな改革をもたらし、民主的教育となり且つ中学校は高校制度に切替えられたのである。このような時代にあつても本校の強行遠足は依然として不動の歩みを続けて今日に至つたのである。私は在職中毎回強行遠足の企画、運営に参画してきたのであるが、その中で特に心を打たれた話があるのでそれを述べて見たい。

ある生徒は次のように語る。

号砲一発全校生徒は一路北へ北へと進む、漆黒の空、路一筋に続いている。先陣を競う者、後から後からと自分のペースで進む者、力をセーブして進む者ありで段々と三三五五となつて行く。時々足下を照らす灯が走る……夜は明ける。南アルプスの紅葉は朝日を受けて目にしみる。陽があがると又元気を出し痛い足を引きずつて歩く。こうして80キロも歩くと又暗くなる。疲れは出るし寒くもなる。友人は少くなる。自分の周りには何にも見えないので全く心細くなるのである。只白く見える路を黙々と進む。遠くに電灯の光が見えてくる。一番近い停車場を思い中止しようかなと心は動く、しかし杖にすがり重い足どりで行くと先方の暗がりの中に何にかうごめく影があるよく見ると矢張り甲中生だ。「俺より先に行つて居る仲間もあるのだな」と心を引き締め痛さを我慢して進む。寒さは益々身にしみてくる頃遠くの方に小さな灯が見え始めた、そして汽笛の音を聞いてあれが〇〇駅かと気づいたが、まだまだ非常に遠い距離にあるように感じられる。

「然しあの駅まで行かなくては自分のレコードは作れない」と思い、痛む足疲れた体にむち打つたのだが仲々に進まない「もうレコードなどはどうでもよい」と思い度くなる。「だが待てよ。これが甲中の強行遠足なのだ。否人生の強行遠足なのだ。学問の道歩く人の修業だ、いつれも同じ心の頑張りに通ずるのだ。この強行遠足に於いて遠くに見えるあの灯こそ我等人生の目標であ

る」とこのようにその生徒はつくづくと実感をこめて語ったのであった。

事実その通りで現在の彼は立派に人生の街道を強行遠足の時のような頑張りで活躍している。この強行遠足が人生の思い出であると共に頑張りの精神の指導となれば幸いである。

(註) 筆者は元甲府一高定時制主事、現甲府一高講師。

強行遠足余談

大正14年度卒業

元甲府一高教諭 嶋田武

○発端

明治天皇の誕生日の天長節は大正時代になって明治節として、明治天皇を敬慕する祭日として祝われたものであったが、大正13年の明治節には何か体育行事を催せとの通達が文部省から全国の学校に発せられた。

甲府中学では時の江口俊博校長が、これを機会に全校生徒の脚を鍛えることに着想されて午前6時から午後6時まで正味12時間にどれだけ歩けるか、中央線に沿って甲州街道を東に向って歩くことを実施された。

その結果は上野原駅まで到達した者が最高で、蹴球部や陸上競技部の選手が多く駆け通して余裕たっぷりだったのに、時間ぎれで前進出来なくて不服だった。

私はその時の5年生だったので卒業した翌年から一昼夜を歩くことになり東の方面は笹子、小仏の二つの嶮がある上に東京都心に近づくにつれて乗物が混雑して危険だと言うので、西方面のコースを撰ることになったのだが、24時間を不眠不休で歩くことについては各方面からかなりの反対の声もあったが、江口校長は断呼として初心を貫いて実行に移された。

○一躍有名に

昭和6年から私は甲府中学に奉職することになったが、その時には「強行遠足」は全校挙げての一大行事となっていて組織的な計画と綿密な統計のもとに取り行われているのに驚ろくと同時に頭の下る思いがしたことであった。

昭和10年に「世界教育大会」と言うのが東京で開かれるので「強行遠足」の来歴と統計とを英文で印刷して配布しようと隈部以忠校長の発案で先ず日本語の原稿は出来上がったが、英訳するに至らないで了った。

その原稿は職員室の戸棚に埋れていたものであったが、大野芳麿校長が匡底に眠らせて置くに忍びず、日本語のまま出版し「我が校に於ける強行遠足の意義とその実際」が初めて陽の目を見ることになり、世間に公開される機

会を得たのであった。

昭和14年朝日新聞の山梨版に強行遠足の記事が載ったが、誤りが多かったので訂正の申込を甲府支局へしたところが、施行の内容を書いてくれと請われて原稿を渡したところ、全国版に二日間に渡り連載されて一躍日本一の折紙をつけられるに至った。

○「オイ！コラ！」

戦時色が次第に濃厚になると共に国を挙げて「健脚鍛錬」とか「戦場に通ずる足」とかが叫ばれると同時に「百軒行軍」が盛んに日本各地で催されたので甲府中学のメダル線がほぼ百軒に相当し健脚鍛錬の総本山として世間の注目の的となり参観者が押しかけてきて強行遠足の内容を聞きたいとてその応接に授業もできない有様であった。強行遠足が有名になるにつれて上諏訪まで何軒、松本まで何軒と称しては居るものの、鉄道の軒数によったもので国道が鉄路に平行しているとは言へ果して吾々の歩む里程が鉄路の軒と一致するか否か、疑問が生じてきたので実測して見ようと言うことになり、全区間を五つに分け、1組3人の職員が50米の縄を持って実測したのであった。私は小野—松本間の測量にあたったのであったが、50米の縄をズルズル引張りながら手帳へ記入するのを見た駐在巡査に「オイ、コラッ」と呼び止められることしばしばであった、古参の巡査は強行遠足を承知して吾々の説明を聞き終らないうち「よし、御苦労」と言うことになるのだが、新参の巡査への説明には手間どれた。

○頑張りズム

東京の「学校衛生医師会」の例会から「貴校の強行遠足に就いて聞きたいから教職員を派遣して欲しい」との書状が学校長宛に届いた。私は大野校長から出向を命ぜられて、会場である岸体育館に行き「強行遠足」を詳細に説明したところが並居るスポーツ医学研究家達が既に19回も実施している事実と実績に驚嘆して、その年行われる20回の強行遠足を見学しようではないかとの決議に基き、昭和18年の秋には文部省の体育技官を始めスポーツ医学の権威者4名が入り込まれて、出発からゴールまでをつぶさに視察して「世界一」の太鼓判を押して行かれたのであった。

つまり20年の伝統の下に24時間を黙々として孤独と睡魔と戦いながら歩み続ける平凡な行事を全校生徒が欣然として真剣に取り組んでいる姿に、視察者達は舌を巻いたのであった。

それにしても毎年実施の都度、沿道の見ず知らずの人々の数々の親切を忘

れることができない。湯茶の接待は言わずもがな、雨に濡れながら歩む生徒に黙って洋傘を貸してくれた信州の人々数え切れない善意に満ちた人々の好意にも支えられて、強行遠足はこゝまで発展してきたのでなくて何んであろう。だが、創設当時に比べると周囲の事情は著しく異ってきた。とりわけ交通事情は強行遠足の行手をはばんでいるかの如き感がある。世間の批判も時代と共に様々であった。或る時は寵児の如くもてはやされ、或る時は野蛮とか非衛生の非難をきいてきた。だが強行遠足は周囲の風当たりがどうであろうと左顧右眄することなく頑張りズムの精神に徹することを念じて止まない。

(註) 筆者は元甲府二高教頭。現准看護学院教頭。第一回強行遠足参加者。昭和17年発行の「強行遠足の意義とその実際」の編集委員。

行としての強行遠足

大正14年度卒業
元甲府一高教諭 石丸 午郎

「朱子」の「先知後行」の説によれば先ず知ってそれから行いがあるとした。この弊害は知に偏して行いを忘れることである。

この弊に対して「王陽明」は「知行合一」を説いた。即ち行いのない知、知のない行は無いと云うのである。王陽明の学が、観念の学ではなく実行の学となった所以である。「Boys be ambitious」は甲府一高魂の一方向を知として教えてくれている。強行遠足は此の知と合一してあるべき行の一つとしての存在であると私は考える。

知を人間の精神面と考えるならば行は身体面と結んで考えることができよう。そして知に偏せず行を考えると精神と身体との調和が生まれる。心身の調和を強調した教えとして「MENS SANA IN CORPORE SANO」がある。体育館の正面壁の上に浮き彫りされた古来の名言は、身体を無視した修練、根性を抜きにした練習は有り得ないことを強調しているのである。

強行遠足を歩くことによって、強い根性が育成され、その根性がまた頑健な身体をつくる。こうして生々発展して止まらないのが一高魂である。私は強行遠足が甲府一高の豊かな教育の中につきぬ流れとして存在していくことを希ってやまない。

(註) 筆者は第1回強行遠足参加者。

強行遠足の思い出

昭和11年度卒業
岩下 龍一

強行遠足後の長い時日の経過は、当時の印象を大部剥ぎ何回か参加した此の行事は相当記憶を混乱させてしまった。今こゝに数回強行遠足を通じて比較的印象されたところの二、三を断片的に述べて見よう。

× ×

辰野からの道は左右の山をうねうねと北上している。私は先刻からこの道を急ぎに急いでいた。日没後の狭い谷間を登っていた夕焼雲は最早、黒ずんで同時に道の両側の稲田に、行手に暗闇が立ち込めていた。此処何処に点在する民家にも灯が入った。唯一人夜に追われているような寂しさと、ちらちらする灯によって惹き起こされるホームシックで私は全く抛りどころと平静さを失い、小野の餘りにも遠いのにいらいらして歩いていた。もう大分歩いた、直ぐ其処が小野に違いない。すぐ其処迄行って見たが小野ではなかった。がっかりする。その先でも亦がっかりする。こうして何回かの失望を繰り返した。小野は私から逃げて行く。私は小野を憎み、腹を立てた、そして正に破裂せんとする痼癩に歯を喰い縛ってこらえた。実に辛かった。 — 2年生の時 —

× ×

松本を過ぎると極度の疲労で自分の身体の疲れも忘れ、歩く事に何等の苦痛も感じ無くなる。一方頭の働きは鈍って5、6才の子供程度を出なくなってしまふ。とにかく私は此処でも依然たる元気で歩き続けた事を記憶している。然しはたから見たら死に損なった野良犬の如くであったかも知れない。もう時間も遅い、行き会う人も無い道に沿った信濃電鉄線(今の大糸線)の電車が時々スパークし、眼を射、轟音が徒らに響き窓の灯が明るい、煌々と電燈の灯った駅を幾つか過ぎた。既に意識は朦朧としている。ある駅の前で警察官に捉ってしまった。うるさく訊問して仲々許してくれない、もう定刻24時に近い、やっと許された時私は傍の駅—会梁駅—に入り込んで行った。 — 3年生の時 —

(本稿は当時東京帝大法学部在学中の追憶記である。昭和10年(第12回)の最高記録(会梁140.4キロ)保持者である「強行遠足の意義とその実際」より転記)

最初の強行遠足

堀内好訓

待ちに待った強行遠足の日は来た。

「東に甲中あり、西に鹿児島女子師範あり」と天下に喧伝されている程我が甲府中学校の強行遠足は有名である。恐らくこれを知らない人は少いだろう。抑々甲中の強行遠足がこれ程有名になったのは長い18年の歴史を持つ其のお蔭だと思ふ。

僕等は今年が初めてのこの強行遠足なので其の前夜は胸がわくわくしたり心が勇んで落付く事ができなかった。やっと寝ついて起された時はもう時間が餘り無かった。準備は充分だった。支度を完全にして兄と共に家を出た。ひっそりした街路を歩む僕の姿を電燈の光りが映し出して影が前から後へと過ぎ去って行く。途中の道は3、4人の人が出ていて「頑張ってお出でなさい」と声を掛けて励まして呉れる。嬉しい元気づく。

学校へ着いた時にはもう半ば過ぎ来ていたらしく附添人が門前にずらりと並んでいる。我が子如何にと……。

出発の合図によって一千餘名の甲中健児はどっと校門外に吐き出された。此の前、講堂で見た強行遠足の映画と同じような有様だ。人波も次第に解けて、約束の連と一諸になって急ぐ。始めて穿いた草鞋が足にきちんと着いてとても軽く足が運べる、友達も非常に張り切っている。あまり長く歩いた経験のない僕等にはちょっと不審に思われたが、かねて先生からの御注意、上級生から聞いた事に従って歩けばよいと思った。足はよし大丈夫だ。きっと遠くまで行けるぞと言う信念を持って一生懸命だ。精神の持ち方が大切だ。空には雲が懸って其の間から月が明るい顔を出す。辺り一面が淡明るい感じた。今年こそと皆物凄い張り切り振りだ。僕も負けないぞと頑張る。歩け歩けの今日に相応しい行事だ。

荊崎を通ったのは午前2時頃、町内で茶の接待を受ける「有難う」と心の中で感謝する。渋谷教頭先生は非常なお元気でぐんぐんと生徒を追い抜いて行かれた。道は長い、どこまでも端がない。此の道をどこまで行けるだろう。何時もならぐっすり寝ている頃なんだが……と思うと歩きながら遂にうとうとして

しまう。

台ヶ原の休憩所へ着いて弁当の風呂敷包を開いたらしっとりしていた。戦地の兵隊さん達は今頃何をしているだろう。進軍か、それとも休憩か。御苦労を思うと全く感謝の他は無い。甲中出身の或る人で今支那で戦って居られる兵隊さんが学校に送ってきた手紙に「中学校の時にした強行遠足の体験があって今非常に為になっている」と書いてあったそうだ。

僕は疲れた足をひきずりながら午後4時頃川岸駅へ着いて其処で止めた。今年始めて経験したので来年からはもっともっと頑張る覚悟だ。又我が校の強行遠足を誇ると同時に此の強行遠足で練り鍛えられた強い精神身体を持って何事にも強く当ろうと固く決心した

—1年生の時—

(「強行遠足の意義とその実際」より抜記)

最高記録保持者 岩間孝吉君

岩間孝吉君は現在埼玉県富士見台中学校に在職中である。

彼は、信濃大町コースでの最高記録保持者である。この意味に於いて今回沿革誌編集に際して寄稿を依頼したのであるが今だに音信が無い、思うに彼は自分の偉業を敢て誇り度くはないと言うことを言外に示しているのではあるまいか。彼の人となりを知ればうなずけるのである、そこで彼に代り彼の強行遠足でのあらましの一端をここに記述することにしたい。(文責・山田)

神と共に走り続けた岩間君

彼は昭和32年度の卒業生である。甲府市平和通りの「岩間農機」が彼の生家である。彼は双生の兄弟で兄の方である。弟を正治と言う。両君とも実に仲が良く共にスポーツマンで、兄はサッカー部、弟は体操部にそれぞれ所属し人一倍熱心に練習に参加していた。練習終了後は、ややもすれば帰心矢の如して他の部員は逸早く帰宅してしうるのであったが、この兄弟は部こそ違え、一番最後まで居残って後仕末をして帰るのであった。この誠実さと真面目な態度とは専ら学校中の評判であった。又自宅にあっては毎日兄弟揃って町の道路の清掃を続けていたのである。これが忽ち町内の美談となり、その善行が新聞にも掲載されて話題をまいたのであった。学校でもこのことを知り、卒業式の際特に兄弟の善行に対して表彰状を授与したのである。彼とは実にこのような人柄であった。

さて強行遠足の彼のことを語らねばならぬ。

彼と同級生で同じサッカー部員であった現本校教諭 ○○先生に彼の話聞いて見た。

「私の3年生の時である。私は学校を出発してから概ね先頭グループと行動を共にしていたがその途中後から追ってきた岩間君と一諸になり台ヶ原辺まで走り続けた。私は体には自信があったが、岩間君はボールを蹴る時でさえよろよろする位細いよわよわしい体つきをしていた。そこでそのまま走り続けたら彼の体は参ってしうのではないかと心配したので「歩いて行こうか」と彼に問うたのである。ところが「走ることなんか平気だ、僕には神様ががついているので絶対大丈夫だ」と答えたのである。この言葉は一見非常に奇異に聞えるが、

実は彼はクリスチャンだったのである。

彼は「自分は神の下僕である。自分はいつも神と共に在りどんな苦しい時でも神は自分を励ましてくれる」と信じていたのである。

このような信念で彼は神と共にひた走りに走り続けて遂には築場（167.1キロ）へ到着し、ここに強行遠足史上空前の大記録を打ち樹てたのであった。私は彼とは途中で別れ、松川までは行ったが、又引きかえして穂高から電車に乗り帰宅した。弟の正治君の方は確か豊科まで行ったように記憶している。」とこのように語ってくれたのである。以上の一編の短い物語りの中から彼の片鱗がうかがわれるではないか。

強行遠足

昭和40年度生徒会長 小林 寛

◇宣誓！我々は甲府一高生としての誇りを持ち己れの体力と精神力の続く限り歩き続けることを誓います。昭和40年10月15日に生徒代表小林寛、校長先生にお誓いしたこの誓いは自分自身への決意と励ましでもあった。

一高の名物であり、伝統である誇り高き強行遠足は、今年は第40回にあたり、本校創立85周年の記念に距離も小諸まで延長され制限時間も20時間で行なわれた。

ある生徒が「本校に強行遠足がなければ甲府一高は単なる地方の一高校に過ぎなくなってしまう」と言ったが、それほどでもないにしても確かにこの強行遠足の意義は深い。生徒の強行遠足支持率が90数パーセントである所以はこんな事にあるかもしれない。

私は昨年も終点中込まで行き、今年も小諸まで行くことができた。苦しい思い出、楽しい思い出が沢山あるが中でも忘れられない事は長野県へ入ってから長野の人の暖かい心使いである。我々に「がんばってネ」と激励の声をかけ、りんご、ぶどう、くるみなど、果物や牛乳、お茶まで出して下さった。沿道の人々の見知らぬ我々への気持には感激せずにはいられない。ある生徒はその感謝の手紙を長野県知事へ出したそうである。手紙を出したのは一人であるがその感謝の気持を持ったのは参加者全員であろう。

また強行遠足に参加した収穫は大きい。

歩くことの自信がつき、自己の限界を知ることができた、又歩きながら先輩が後輩に教える話も良く、色々話し合うことはすばらしいことである。（苦しくなればそれどころではないが）、それに自然への親しみが湧く、我々の徹夜の歩行に宵の明星が激励してくれ、明けの明星が拍手をしてくれた。また沿道の木々が紅葉し、その美しさは筆舌に尽くし難い。枝もたわわなるリンゴは美しく農場を色どっていた。

「公害とは何ぞや」と言いたくなる風景であった。

今年は天候に恵まれ、総てのコンディションも良く、終点小諸に多数の者が到達した。これは生徒の努力によるばかりでなく、先生方やPTAの方々のお

蔭であると思われ我々は心から感謝している。

私は甲一時代の最大の思い出は強行遠足であろうと思う。この強行遠足が甲府一高の続く限り続けられることを何よりも願っている。また他の高校生にもこの強行遠足の味を味わってもらいたいものと思うのである。

強行遠足こぼれ話しのあれこれ



一席有志の方々にお集り戴き座談会を催した上で、いろいろのお話を伺いたいと思っておりましたが、締切日の関係やら、御都合やらで、その機会をつくるには少々困難かと思いましたので、最寄りの方々からお聞きしたものを一部掲載いたしました次第です。

内容に誤りがあった際は是非御容赦下されて、強行遠足にもこんなことがあったのかと軽い気持ちで御覧下されば幸いと存じます。

尚本校在職中の職員の話された氏名は都合により「ある先生」「某先生」と記しましたことを御諒承下さい。

強行遠足こぼれ話のあれこれ

(時代不同)

○笹子峠も天下の峻だつたと言う話

第1回(大正13年)の東京方面コースに生徒として参加した元本校教諭石丸午郎氏の話である。

「昔のことなのではっきりとは覚えていないが」と語り出した。「11月3日(旧明治節)を祝して朝の8時頃出発することになっていた。私は自宅から自転車で登校したのだが最早出発した後なのか、あたりは閑散としていた。私は泡を喰って自転車で後を追ってやっと勝沼まで来て皆と合流した。ここで自転車を下りて一詣に歩き出したのであった。白い乾いたほこりっぽい道を喘ぎ喘ぎ歩いた。まだこの先には天下の峻笹子峠が待ち構えていることを思へば、今ここでへこたれてはならないと心に鞭打ちつつ一歩一歩踏みしめながら歩いたのである。いよいよ峠に差ししかかった。今と違ってその頃の峠は羊腸の急坂で狭くその上に石ころ道だった。しかも樹木は鬱蒼と茂り、それこそ昼なお暗くいまにも山賊でも出そうな寂しい峠であった。そこで皆は校歌や、その頃流行したでかんしょ節など思い思いに歌い、元気づけながら登ったのである。と急に目の先が開け明るくなったのである。あたりを見れば紅葉に色づいた木々、その間に隠見する苔蒸した岩肌、その下を見れば樹木に覆われた深い溪谷、今にもサラサラと聞えてくるかと思われる溪流。上を見ればあくまで澄んだ青い空。そしてサヤサヤと谷を渡ってくる風に汗ばんだ肌がひんやりとした。実に美しくしかも素晴らしい景色でありまことに印象的であった。

私は峠の八合目あたりで中止して帰途についたのであるが、その道すがら道ばたのぶどう畑の中に、真赤にうれた取り残しのぶどうの実を見つけた。丁度咽喉も乾いていたのでこれ幸いと一寸失敬して口の中へほうり込んだがそのうまかったことは今も忘れない」と。又話しを続けてこう語った。

「一番遠くへ行った者は上野原だったが、どうもおかしい、そんな遠くへ行ける筈はないと言うので、いろいろ調べて見たら、それは山岳部の連中でしかも先がけをして行ったものだった。それがばれて皆から油を絞られたものだ」とその当時は思い出しながら感慨深げに語ってくれたのである。

○世相が変わったと言う話

「信濃大町コースで夜中の12時に出発した時代のことである。私も生徒の一人として参加したのであるが」と本校のある先生は語り出した。「昔は毎年11月3日の夜12時、4日の零時に出発したのである。従って葦崎は真夜中に通過するのであるから、町の人達は既に深い眠りについていて静かであった。悪戯するにはもって来いのチャンスであった。例えば町の入口にある商店の看板を遙か離れた町はずれに移動させたり、葬儀屋の看板を医者や玄関先へ置いたりした。そして翌朝になって町の人達の驚ろく顔を想像して悦に入ったものだ。当時は世相もまことにのんびりしていた時代だったし、このいざずらも単なる愛嬌(?)として行われ、年中行事の一つにもなっていたので町の人達もまたかと思ひ(?)ていたのかも知れないが、特別文句は出なかったように記憶している」と。

その後時代を経て、正午に出発するようになってからは、いつしかこの行事も忘れかけた形となったのである。ところが小諸コースに変更された最初の年(昭和37年)には出発が夜だった関係から再びチャンスがおとずれたのであった。生徒と言う者はいつの時代でも同じようなことを考えるものだ。それとも先輩から聞いたのかは不明だが、突然この行事が再現されたのである。しかし今回のものは少々質の悪いいざずらが含まれていたもので忽ち土地の悪評を受け、又新聞にも書き立てられ、強行遠足に一つの黒星をつけて了つたのであった。あわてたのは関係者一同である。私は関係者の一人として、来年は少し早目に葦崎を通過させるよう出発時刻を改正した方がよいと考えたのである。

又私は一計を案じて生徒にはこう話したのである。

「塩崎や葦崎の人達は今年の悪戯にこりて、来年は警防団を組織し薪雑棒を持って警戒しているそうだ。今度いざずらすると殴り殺されて了うぞ」と、いささか冗談を交へた話をして聞かせた次第である、このことがあったからか知らぬが翌年からは再びこのような不仕末はなく、立派な強行遠足が出来るようになった。—先んずれば人を制すと言う言葉がある—

○歩き方にはいろいろあると言う話

大町方面コース、24時間制の時代のこと。ある生徒の曰く「葦崎まで24時間かかって歩いてよいか」と。そこである教師反問して曰く。「君はどんな方法で歩こうと言うのか、一步前進して二歩後退か、又は蛇行して歩くのか、それとも兎と亀の話のように、途中でちょっと一休みか」と。昔は

このような傑作な人物もいた。—

○僕は暖かい飯が好きと言う話

矢張り松本コース時代のこと、出発の際ある生徒が飯盒を持っていたので中味を調べて見ると、何んと、生米が入っているではないか。そこでその理由を聞くとその時その生徒少しもあわてずこう答えた。「僕は冷たい飯が嫌いだから、途中で飯盒炊飯をして暖かい食事をするのだ」と。さも当然であると言う顔つきで平然として答えたのである。まるでキャンプにでも出掛けようような調子であった。到底常人では考えられぬような神経の持ち主ではある。—こう云う人物こそ将来は大物になると専らの噂だった。—

○危機に立つた強行遠足の話

終戦後、思想の自由の影響からか、季節には関係なく赤色台風が頻繁に発生したが、いつしかその台風が本校にも来襲し、先ず教室がもまれ、その余波を受けてか職員室もがたがたゆれ出したのである。中でもねらわれたのが強行遠足であった。このような時代に今更強行遠足などと言うものは無益だ。そのような怪物は退治して了解と云うのであった。正に強行遠足大反対の旋風が巻きあがったのである。そこで甲論乙駁、是か否か事態はまことに急を告げたのであったが、時の同窓会はあらゆる障害を打破し断乎として実施を主張したのである。又心ある大部分の生徒、職員もこれに同調して実施することに傾いたので、さしもの荒れ狂った台風も甲一の鉄筋コンクリートの壁の前には頭を垂れ、遙か彼方に進路を変へ、消え去って行ったのである。とはある同窓生の話である。—備えあれば憂いなしと言う言葉がある—

○昭和にも怪談があつたと言う話

「疲れ切った足を引きずりながらやっとなる救護所に着いた、やれやれと言う思いで「〇〇まであと何キロメートルありますか」と聞くと「6キロある」と係の先生が答えてくれた。それに勇気づけられて又歩き出したが途中で又救護所に着いたので、同じことを聞くと今度は「7キロある」と答えた。これには泣かされたもんだ。歩けば歩く程道が遠くなるのである。まさに昭和の怪談である。

「この道はいつかきた道、ああそうだよ遠い遠い道だよ」とからたちの花の文句をもじって、こう歌いながら、最後の元気をふりしぼって、それでも無事に〇〇へ到着することができた」とはある先輩の懐しくも怪しげなお話の一席。

○上諏訪は生徒の湯治場であつたと言う話

松本方面コース時代のこと、上諏訪で中止した者は勿論のこと、近くは青柳、茅野、遠くは岡谷、松本で中止した者達が帰りには上諏訪温泉につき、強歩の疲れを癒したものだ。中にはとんでもない心得違いな者もいて先生達を挺摺らしたものだ。と言うのは富士見、青柳あたりで中止した生徒がわざわざ汽車に乗って上諏訪まで来て温泉につかろうと言うのである。又この際あわよくば上諏訪の検印をものにしようとするのである。後にはこれらの不正前進を防止するため、乗物を利用しての前進は禁止、又中止した地点では必ず検印カードを返納するよう規定を設けたのである。

—後のカラスが先に立つと言う言葉がある—

○女生徒が大いにハッスルしたと言う話

信濃大町コース時代のことで、女子のコースが富士見まで延長された頃の話である。前回までは日野春が終点であったが、これでは歩き足りないで、コースをもっと延長して欲しいと言う女生徒の要望があった。そこで出発時刻と帰りの列車時刻等を検討した結果、富士見迄延長することに決定したのであった。即ち朝8:00に学校出発、約6時間の制限時間を設け、富士見駅午後3時30分頃の列車で帰宅できるようにしたのである。さて当日のこと、女生徒は男生徒より一足お先に出発し（男子はその日の正午出発であった）、殆んどどの生徒は終点富士見へ到着したのである、そのうちでも元気な者は救護所のお手伝をしたり又続々と通過する男生徒の応援をしたりして、まことに美しい情景を見せたのである。

先生達は「お蔭で大助かりだったよ」と言い、男子は「応援のお蔭で遠くへ行くことが出来た」と大いに感激しながら語ったと言うことである。

—内助の功と言う言葉がある—

○道路標識が丁寧だつたと言う話

「信濃大町コース時代のこと。ある生徒が岡谷入口付近で、コースを間違えてしまい大部遠廻りして岡谷救護所へ辿り着いた、その生徒は不満な顔をして係にそのことを訴えたのである。私は全線巡視係としてここに小休止してその場に居合わせていたのでその訴えを聞いて早速現場へ急行したのである。

成程これでは間違ひも無理はないと思った。何故ならそれは石灰で閉止線（直線）の上に×が識されていたのである。物は考えようだ、その生徒は閉止線が×で取り消されているものと考えたのであろう。かつては閉止を×

で標識した時代もあったが、この時は既に×は用いないことになっていた筈であった。あまり物事も丁寧過ぎると頭に何とやらつくと言う、今ではそのようなことはない。」とはある先生のお話しであった。

—千慮の一失と言う言葉がある—

○女生徒の応援に力を得たと云う話

「信濃大町コースで女子の終点が日野春であった頃の話である」とある卒業生は語った。

「女生徒は日野春で検印を済ませてから、わざわざ牧の原へ降りて来て男子の応援をすることを慣例としていた、私は女生徒が応援に見える時刻を考えて歩行計画をたてたものである。いよいよ当日のこと、私は勇躍して牧の原目指して出発したのである。可愛いあの子が待っていると思えば自然に足が早くなるから不思議だ。さていよいよ牧の原だ、心はずんだ、あの子のためにもあまりへばった姿は見られたくないものだ。私は応援の拍手に送られながら胸を張って通ったのである、可愛いあの子に感謝の目くばせをしながら……。

然しそれから後は急に虚脱感に襲われた、俄に疲労も出て来て、途中で中止しようかとさえ思ったが、待てしばし、彼女のためにも頑張って歩こうと思ひ直して再び心を振り立たせ遂に松本まで歩いたのであった」と。

—女の髪の毛は象をもつなぐと言う言葉がある—

○あんよは下手だつたと云う話

「人間歩けば多少疲れるのは当然だが、然し夜中を通して歩く強行遠足の疲労は格別なものだ。私が松本まで行った同級生と行を共にした時の話である」とある先輩は語り出した。

「始めは相当のスピードで歩いたので国界橋あたりで夜が明け、東の空があかね色に染り寒気はひとしお身に沁みたことを覚えている。さて前の者をもぐんぐん追抜いて行ったのだが、元来私は歩くことは下手な方であるから遂に富士見で参ってしまい、ここで友と袂を分ち一番の上り列車に乗り込んだのである。途中汽車の窓から沿道を見るとまだぞくぞくと歩いて行く仲間が見えた。そこでそのまま帰ったのでは申し訳ないと思い、窓から首を出して応援をしてやったのである、まことにいい気なものである。

いよいよ甲府駅へ着いた、下車するのだが歩き出す時の足の痛いこと痛いこと。陸橋をやっとの思いで上り又下りる時のつらさ、手すりにしがみついで下りたものだ。私の家は上府中だったので、駅からびっこを引きながらま

ことにみじめな恰好で朝日町通りをのぼったのであるが、丁度運悪く通勤の連中と向い合う形となった。彼等は私の恰好を見てげらげら笑うのである。杖にぶら下るようにして腰をかがめ、びっこを引きながらよたよた歩く姿は確かに立派には見えないのであろう。普通なら10分位かかる距離を凡そ1時間位かかってやっと家の玄関にたどり着いたが、その瞬間気がゆるんでぶっ倒れて了った」と彼はまだ足でも痛むかのような顔をして話してくれたのである。

—限り身のある力ためさんと言う歌がある—

○車は出て行く埃は蹴ると云う話

「松本コース時代のこと、私は巡視係として真夜中に唯一人で茅野踏切付近を巡視していた時のことであった、そこへ最高首脳者の乗っていた自動車が通りかかったが、徐行するでもなく、そのまま白い埃を立てて走り去って行ってしまった」とある先生はその時の情景を思い出しながら語り出したのである。

「唯一人真夜中にこんな道を歩いている者は外にはない筈で、嫌でも目につく筈だ、それが職員であろうと生徒であろうとちょっと位徐行して御苦労さんの一言でも言ってくれたらどうだ、とにかくその時は非常に不愉快になって家へ帰って来たよ、生徒などは尚更強く感ずるのではないだろうか、だから今までにも自動車へ石を投げられたと言うこともあったのだ」とぼやくことひとしきり。御尤もなことである。近年では生徒をより安全に歩行させるためPTA、同窓生より救護、巡視用として何台かの自動車の協力を得て出勤し生徒のよき伴侶として役立てているのである。

—我が身をつねって人の痛さを知れと言う言葉がある—

○捕えて見たら我が子なりと言う話

信濃大町コースで茅野手前の中央線ガード附近での出来事である。全日制のある生徒が突然強盗に襲われ、有り金を奪われたのである。然しその際帰りの自動車賃だけは返してくれたと言うが、賊にも一片の情があったと言うものだろう。一人間の性善なりと言う言葉がある—被害生徒は早速茅野教護所の係員に報告した上警察署へも届け出たので時を移さず調査が開始されたのであった。調査にあたった警官の一人がこう言ったそうである。

「その時の状況(人相、服装、年齢)等を尋ねたところ、よく記憶していて適確に答えてくれたので捜査に非常に役立った。しかしよくそこまで冷静に観察できたものだ。流石は甲府一高の生徒だけはある」と大変に褒められ、

とんだところで甲府一高の名を挙げたのであるが然しあとが、悪かったのである。更に警官が言うには「(そう言う悪い奴は当地にはいない筈だ。犯人はどうも山梨の人間のようだ)」と。これには関係者一同驚いたが、その後の捜査によってその犯人が判明し、事実はその通りだったので今度は甲府一高の黒星となったのである。一罪を憎んで人を憎まずと言う言葉がある—

○急がば廻れと言う話

「信濃大町コース時代のことである」とある先輩はこう話してくれた。

「いつの時代にもさぼる生徒はいるものだ、私と友人3人とで穴山まで来たが寒さと疲労とで歩くのが嫌いになって了った。そこで自発的(?)に落伍し道なき山を横断しようとした、ところが方向を見失ない山中をさまよい歩き、それこそほんとうにへとへとになって、やっと駅へたどりついたのだ」と言う。

「こんな苦勞するならもっと先へ行けたものに、悪いことはできんものだ。急がば廻れと言うことがよくわかったよ」としみじみとした口調で話したのである。—後悔は先に立たずと言う言葉がある—

○上には上の歩行計画があったと言う話

信濃大町コースのこと大町へ到着しその回の最高記録を印したある生徒の話である。彼の歩行計画はこうだ。先ず本番に先立って現地を確認し、それぞれの地点に予め携行品等を預けて置いたそうだ。さていよいよ歩行の時には、食事、防寒具、草鞋等必要な際には、その地点で用が足りたのである。

それこそ徒手空拳の身軽で歩いたと言うのである。私はその話を聞いて全く恐れ入って了ったものだった。」と本校のある先生が話したのである。—備えあれば憂いなしと言う言葉がある—

○だてには年はとらなかつたと言う話

矢張り信濃大町コース時代のことである。長沢の住人である輿水老人が、いつも特別参加して若者を凌ぐ元気さで歩いたものだった。両手に竹の杖を持ち草鞋履きで一步一步確実に踏みしめて歩く姿は今でも目に映るようだ。

生徒に対しては教訓としたものだ、そしてある強行遠足の出発式の際、表彰状と記念品を贈呈してその労をねぎらったのであるが、数年前自宅に於いてこの名物老人は天寿を全うして大往生を遂げたのであるが、まことに奇篤な老人であった。学校からは時の窪田丙午郎教頭と山田茂、広瀬直瀬両先生とが葬儀に参列し弔意を表してきたのであった。—老いてもますます盛んと言う言葉がある—

○狐はばかさなかったと言う話

「昭和27年頃であったと思うが」と本校の某先生は語り出した。「私は全線巡視係として自転車で巡視することにした。途中事故者の救護や各救護所間の連絡、又は生徒を激励しつつ行きつ戻りつ巡視にあたったのである。

ご存じの通り途中には富士見峠、善知鳥峠（うとう峠）と言う難所がある。そういうところは自転車の尻を押して登ったものだ。何にしる夜中を通して乗り続けたものだから、すっかり尻の皮をむいて了ったのである。さてそれからと言うものはお尻をあげたり、片尻をずらしたりしてペダルを踏んだ仕末、それでも最後まで頑張って、先頭を松川（141.3km）まで誘導したのである。あの時は全く参った参った」とお尻をなぜながら話したものである。又善知鳥峠でのことを、こうも話してくれたのである。

「夜中自転車でうとう峠へさしかかった時のことであるが、その時ライトの光芒の中にさんさんとして降りそそぐ細かな銀の雨粒を見た。おや雨が降ってきたのかと思って木の間越しに大空を見上げたところ、雲一つない澄み切った黒い空にはキラキラと星の輝やいているのを見た。はてあやしげな、これは狐にばかされているのではないかと昔風に思いながら上衣をなぞて見ると矢張りしつとりと濡れていた。ところが峠を下り、平地へさしかかった頃、雨粒もいつしか消え去り、寒気がひとしほ身に沁みてきた。あとでこれは夜露のおりる現象だと知ったが、これはまことに印象的な光景であった」と一艱難汝を殊にすと言う言葉がある—

○失敗は成功の基であると言う話

信濃大町コースでの出来事であった。全線巡視者が夜中に辰野から小野へ向ったのであるが、途中にあるべき小野救護所が見つからなかった。おかしいと思いながらも、そのまま善知鳥峠（うとう峠）へと向ったのである。しばらく走り続けたが、どうも様子が変だ、どうも見覚えがないところだ、ふとバスの停留所の看板を見ると伊那と言う頭文字があるではないか。これはいよいよ道を間違えたに相違ないと前進を躊躇している所へ、折から前方からライトをつけた自動車がやってきたので手をあげて停止してもらった。そこで道を尋ねると、この道は伊那街道だと知らされたのである、矢張り間違えていたのである、親切にもその車に先導してもらって元の地点に戻ったのであった。この間約1時間を要したのであった。そもそも辰野から伊那方面へ行く道と、うとう峠を経て塩尻へ行く分岐点のことだが、北上する場合は、左側を通ると広い道で自然にカーブしていて、知らぬ間に伊那方面へ行くよ

出来ているのである、従っていつ間違えるともなく間違えて了ったのであった。あとでこの失敗を話したところ我々の車ばかりでなく、他の2、3台も同じような失敗をしたのを知って大笑いしたものである。」とその時の係の先生は笑いながらこう語ったのである。一前轍を踏むと言う言葉がある—

○労しても効がなかったと言う話

「大町コース時代のことである」と本校のある若い先生は、在学当時のことを感慨深げにこう語ってくれた。

「私は岩間君（最高記録保持者）とは途中で別れ、やっとの思いで豊科へ到着した、然し私はまだ歩ける自信があったので先へ進もうと思い、この先に救護所があるかどうか係の先生に尋ねたところ有明まではあると言う。そこで私は意を強うして、とうとう松川まで歩いたのであるが途中誰にも逢はず心細くなって了ったのである。そこでここから穂高まで引返して来て電車に乗って帰ったのである。今考えれば馬鹿なことをしたものだ。」といかにも残念そうな顔をして話してくれたのである。

尚、当時は豊科までしか救護所は置いてなかった。それより先は誘導係が先頭の到着する地点まで誘導したのである。一骨折り損のくたびれもうけと言う言葉がある—

○人間が機械になったと言う話

「信濃大町コース時代のこと、私は松本、豊科間の巡視係をしていた時のことである」とある先生は話し出したのである。「本拠を松本に置き私はここで先頭の到着を待っていたところが、予想より早く先頭が現われたのである。誰かと思えば岩間孝吉君である、当救護所では早速味噌汁の接待をして労をねぎらったのであるが、彼は寸憩した後すぐに出発すると言う。私は自転車を宿から借り受けて引きながら彼を誘導して行ったのであるが、流石の彼もあまり走ることはしなかったのだが相当のスピードで歩いた。私は始め自転車を引いて歩きながら誘導していたが、ともすると私の方が遅れがちになるので到頭乗って誘導することにした位である。途中の彼は小用を足す時も、水を飲む時も決して停止することはなく絶えず足踏みをしながらであった」と言う。これは一旦停止すると調子が狂って了うからである。人間が一つの機械になったのである、正に正確な時計の歯車のように。一倒れて後止むと言う言葉がある—

○強行遠足を再認識したと言う話

数年前のことである。一部の教師によって学校行事簡素化運動が展開され

た時のことである。初めの主旨は変転し、いつしか勉学一本の方向に誘導されていったのである。曰く、「一切の学校行事（修学旅行、文化祭、諸大会強行遠足等々）は廃し、その時間を勉学にあてれば大学入試合格は疑いない、又勉強さへしていたら、立派な人間が形成できる」と言うのである。これではいささか教育の本義にもとるような主旨であったので、心ある教師の批判を受けたわけであるが、この事はいつか生徒の知るところとなり、或る日の生徒総会に於いて猛烈な反対にあい、いつしかこの運動は自滅して了ったのである。この裏には強行遠足反対の運動も秘められていたのであったが、生徒の総意による強行遠足支持はここに改めて再認識されたのであった。

— 雨降って地固めと言う言葉がある —

○強行遠足は好ましくないと言う話

昭和35年（？）頃、時の教育長から「強行遠足は諸般の事情に鑑みて実施することは好ましくない。」と言う通達が各学校にきた。当時県下で実施していた高校は相当数あったがこの通達により2、3校を残して大部分は姿を消して了ったのである。本校に於いてもこの通達を巡って、いろいろ検討審議が為された結果引続いて実施することに腹を決めたのであった。思えば幾度かの存亡の危機に立ったが、よくこれに耐えて、今日迄連続として伝えられてきたことに対して今更ながら強行遠足の持つ意義の偉大さに心打たれたのである。— 長いものには巻かれると言う言葉がある —

○二度あることは三度はなかったと言う話

「昭和18年と言えば、大東亜戦争もまだたけなわの頃であった。私の担任クラス（3年に）深沢丈二と言う生徒がいたが」と大関伝吉氏（元甲府一高教諭）は語るのであった。

此の年彼は強行遠足に参加した、昨年は7、8着で松本へ到着したので今年は2、3着位いで松本へ到着したいものだと言いつつ出発したのである。

その彼が川岸附近で貧血を起して了ったのでその時川岸勤務の医師北島先生に注射をして戴き元気を取り戻して又歩き出したのである。ところが運の悪いと言うものは仕方のないものだ。彼が小野へ差しかかった時、徴用トラックに接触し道ばたへ投げ飛ばされて了ったのである。この時丁度下り列車が小野駅へ入りかかっている偶にもこの事故を窓から目撃したのが小野の在郷軍人分会長であったが、下車するとともに急拠事故現場にかけつけ附近の小野病院へ収容してくれたのであった。

私は小野救護所（駅前油屋旅館）に勤務していたが、この連絡を受けたので

それこそ取るものも取りあえず病院へかけつけたのである、事故と言うのは頭を打って脳震盪を起した程度だったので、まずは不幸中の幸いであった。

そこで私は彼にいろいろ尋ねたが、自分が誰であるか、ここが何処であるか、今何をしているのか、それすら判らないのである、然し始めは心配したが治療の甲斐もあってか時間がたつにつれて回復し再び元気を取り戻したので、頭に繻帯をしたままここを出発して又歩き出したのであった。この年には記録映画を撮影したが、中に繻帯頭をして歩いている生徒の一駒があるが、それが彼である。

私はそれから数年後再び小野勤務についた時、小野病院を尋ねて数年前のお礼を申し述べたのであった。」と。— 不幸中の幸いと言う言葉がある —

○偉駄天も顔負けしたと言う話

「何回の時だったか忘れたがまだ戦時中の時だった」と大関先生は又話し出した、「矢張り信濃大町コースであったが、その時は下諏訪と岡谷の間は道路修理のため、他の道を選び、リンゴ畑の中にある道を歩いたのである。丁度リンゴはいい加減に熟れていて、しかもその香りがまことに食欲をそそったものだ、生徒達はてんでに甘そうなリンゴを腕みながら通ったのであるが、ところが、ところがである。ある一人の生徒が遂に誘惑に負けて、一つ失敬して早速大口あけて、ばくりと喰いついた途端、運悪くも畑の主人に発見されて了ったのである」

「この盗人野郎奴、どこのどいつだ、警察へ知らせるぞ」と忽ち雷の如き声で大喝されたのである。

「さあその生徒は吃驚仰天、それこそ文字通り慌てふためき、杖はその場に投げ捨て、今までびっこを引いてきたのも何のそのそれこそ偉駄天の如く雲を霞と逃げ出したと言うことである」と。

最後に大関先生はおかしくてたまらないと言った表情で言う「盗むことは悪いがそれもほんの出来心だ、それよりも今までびっこを引いて歩いてきたのが、怒鳴られた途端物凄ごい勢で逃げ出したと言うところが、何んとも云えぬ滑稽さと面白さがあるではないか」と。

— 渴しても盗泉の水は飲まずと言う言葉がある —

○土方と間違えられたと言う話

「小諸コースの道路調査に出掛けた時のことであるが」と前置きして本校のある先生は次のように語り出した。

「調査員は私と外に二人の先生で自動車を出掛けた。途中を調査しながら

弘法坂を登り切った平坦なところへ来ると、後から来た自動車が私達の車の左側をすれずれに猛烈な勢で追越して行った、そこで至って気の強い某先生が「気をつけろ」と大声で怒鳴りつけたのであった。

私達が三軒家へ着くと、そこに先刻の車が停車して私達を待ち構えていたのである、見ると土方風の屈強の男達であって、腕をまくりあげ入墨をちらつかせながら凄ごんで言うのである。

「お前さんも同業のようだが、ちとばかり仁義に欠けちゃいねえか、俺達は斉藤組のもんだが、文句があるなら言って見な」と。正に風雲急を告げんとしていたが、私は斉藤組と言う言葉を聞いて、咄嗟に彼等にこう言ったのである。「ああ君達は保文君の組の者か、あの男ならよく知っている、よろしく言ってくれ」と。

これを聞いた彼等の狼狽振りはまだことに滑稽千万であった、今までの勢はどこえやら、這這の体で私達の目の前から姿を消して行ってしまったのである。

「しかしあの時は全く恐かったが、あとで可笑しいやらで何んとなく胸がスーッとしたり」と笑いながら語ったのである。

因に斉藤保文君はその先生の親しい教え子で、ボクシングの選手であり、その兄が斉藤組の社長である。

——虎の偉を借る狐と言う言葉がある——

○強行遠足がレクリエーション化されようとした、と言う話

昭和37年(37回)は前回までの信濃大町コースを廃して、現小諸コースに変更した年であり、またこれに伴って、いろいろな新しいころみ企画されたのである。

その一つの計画としては「清泉寮を本部として、ここを一大レクリエーションの会場にしよう」と言うのである。即ち「模擬店を設けたり、ブラスバンド等を準備して演奏会を開き又フォークダンス、ソフトボール等をなして一日を楽しく過そう」と言うのであった。

これより先のこと、新コース調査班(校長以下教師数名)はその途次清泉寮に立寄り実状を調査したのであるが、前庭には広大な芝生があり又野外ステージ等も備えてあり且つ他のロッジ等を合わせると500名位の収容力があることがわかった。このようなことから「強行遠足とは別に、生徒の野外(校外)研修場としてはすばらしい環境である、来年は是非実現させたいものだ」と話し合ったものである。(翌年は3年生を対象として、ここで研修会を

開いたのである)

さて実行委員会の席上でこのような話題が発展し、この清泉寮が強行遠足の本部ときまり、レクリエーション会場に転化された形になってしまったのである。その二つとしては「固苦しいルールは廃して自由に歩かせたらどうか」と言う意見が出たのである。

委員会ではこの二つの論点を中心として甲論乙駁、正に保守と革新両陣営の争いのような観を呈したのである、結果としては第一の「清泉寮を本部としてレクリエーションをすること」は、初めのころみとしてその反響を見ることにして決定された。第二は「自由に歩かせる」と言う点であるが、これまでしたら強行遠足は全くのレクリエーション化することであり賛成出来なかったのである。とにかく参加生徒1,500名以上の集団歩行を野放しにするわけには行かないのである、従って生徒を安全に歩行させるためにも、従来以上の厳格な諸要項、諸規定を設定したのであった。

さて当日のことである、生徒は清泉寮本部のレクリエーションには意外に関心を持たず、大部分の生徒は歩くことに意義を感じてか、終点地松原湖を目指して出発して行ったのであるが、却って清里駅、清泉寮間の石ころ道を往復しなければならなかったことに不満を持ったのであった。

かくして最初のこのころみは不評に終わったのであるが、今回の反省に立って翌年は本部は野辺山に移し、コースも中込まで延長するなど本来の強行遠足の姿に立戻ったことは何よりであった。

——笛吹けど踊らずと言う言葉がある——

○女生徒は勉強がお好きと言う話

小諸コースでのこと、その時の女子の出発点は若神子小学校グラウンドからであった。ある先生が後尾順行係として生徒の後尾を纏めて順行した時の話である。

「出発後大部分の生徒は先を争って歩いて行ったのであるが、中にぼんちと唯一人一番最後を歩いて行く生徒がいた、見ると教科書(?)を読みながら超然として歩いているではないか。これには永年強行遠足の勤務を経験している私だが驚いた。一体どう言う神経の持主かと、その精神状態を疑った次第だが、いづれにしても勉強好き(がり勉とも言う)な点では間違いなさそうだと思った。お蔭でその生徒を護衛で箕輪新町までおつき合ひをされてしまった」と言う話であった。

——牛にひかれて善光寺詣りと言う言葉がある——

○長野県人は非常に親切であったと言う話

小諸コースの終点中込でのことである、駅名は中込であるが佐久市のことである。ここでは強行遠足を全面的に歓迎してくれたのである。即ち駅前には「歓迎、甲府一高強行遠足」と書いた大横断幕を掲げてあり、市教育委員会では宣伝カーを繰り出して市中の宣伝に巡り又婦人会員も出動し、白エプロン姿も甲斐甲斐しく、生徒の接待やら疲れた生徒のマッサージ、果ては汗で濡れた下着などを乾かしてくれたりしたのである、その他、ある商店では生徒の為に多量リンゴを寄贈してくれたのである。

この状況を見ていた関係者一同は大感激したものであった。このような一例を挙げても長野県人は山梨県人と違って非常に親切なところがあるのである。

松本コース時代に於いても、長野県側へ入ると非常にその親切さが目立つのである。今仮りに長野県から山梨県入りした場合、果たしてこれだけの親切をしてくれるだろうか、同じ山梨県人である我々は、なさけないがこのような疑問を持ったのであった。

——県民性の相違——

○長野県知事が感動したと言う話

第40回の時である、ある3年生の男子生徒が長野県側へ入ってからと言うものは沿道の人達からいろいろと親切にされたことに感動し、帰ってから長野県知事に感謝の礼状を出したと言うのである。ところで長野県知事から折り返し学校長宛にその返事がきたことから、このことが判明し、明るい話題を提供してくれたのである。

ここに知事からの文面を御紹介する（現文のままである）

「謹啓

晩秋の候、貴台益々御清栄の由およろこび申しあげます。さて突然ですが、このたび貴校では恒例の強行遠足が成功裡に実施されましたが、三年生の一生徒から長野県側の沿道の町村民の応援につき感謝のお便りをいただきました。

貴校は古き良き伝統と質実剛健の校風をもって教育方針とされ、これに基づき例年強行遠足を実施されておられるやに承っておりますが、この行事が生徒の心身の鍛錬に寄与することまことに大きいものと存じ、これが成功裡に終止されたことを心からおよろこび申しあげ次第であります、また来年も是非長野県へおでかけくださるようお待ちいたしております。

終りに貴校の御発展を祈念し一生徒に対する御返事といたします。

昭和40年10月26日

広瀬勝雄殿

長野県知事 西沢権一郎

以上の文面に現われているように一生徒の心きいた行為から両県を通じて心の暖まるような交流が始められるとしたら、たゞ強行遠足を通しての甲府一高ばかりでなく、広く山梨県民のためにも幸ひなことであろう。

尚学校としては御危介になった関係者一同には礼状を出し感謝の意を表してはいるのだが知事にまでは及ばなかったのである。

——背負った子に教えられると言う言葉がある——

○スタジオ102の効力があつたと言う話

小諸コースでの出来事であった。学校長と私を乗せた巡察車が松原湖駅附近に差ししかかったところ、歩いていた一女生徒から連絡を受けた。それによると「ある女生徒が海尻の陸橋付近で倒れている」と言うのである。これは大変だとばかり直ちに海尻に引き返して探して見たが見えないのである。そこで附近の人家を一軒一軒尋ねて廻ったが、遂にその所在をつきとめることができなかったのである。

「これはとんだ見当違いのところを探しているのではないだろうか、もう一度連絡してくれた生徒に確めて見た方がよからう」と言うことになり、その生徒の後を追いつつ、とうとう小海救護所（女子終点地）へ到着していった。

幸いその生徒はこの救護所に到着し、休憩していたところだったので、更に詳しく話を聞こうとしたが彼女はすっかり疲れ切っており「細かいところは覚えていない」と言う。これは困ったと思ったが念のために、そこに休憩していた他の女生徒に尋ねたところ、「途中まで一諸に歩いてきたので顔も場所もよく覚えている」と言う生徒が現われたのである。早速当所にあった自動車を借用し、その生徒を乗せ、居合わせていた某先生に添乗して貰い捜査に向わせたのである。

私共の巡察車はまだ先のこともあるので、当所係に後事を託して小諸終点地へ向ったのであつた。それから後の報告によれば、時を同じくして第5号巡視車も現地通過の際この事を知り、附近の人達の協力を求めたところ、その朝のスタジオ102で甲一の強行遠足を知り、極めて親切に協力してくれ、はては有線放送によってその所在を確かめてもらった結果、その生徒はその後

間もなく元気を回復して既に出発したと言うことであった。

小海からの捜査員は途中でこの生徒に会ったので、同行して小海へ無事にゴールインしたと言う話であった。

——またい伝第12章、迷える一匹の羊を救う——

○全国に紹介された強行遠足と言う話

「私は創立58周年記念行事の一環として行われる強行遠足は本年度40回を数え、全国にも比類のない歴史を持っているだけに、これを機会にスタジオ102によって全国に紹介してもらったらどうだろうかと言う話を持ち出したのである。」とある先生は話し出した。「そこで早速後藤教頭がある有力者を通じてNHKへ交渉を開始したところ、結果としてはNHK甲府局で取材して放送することになった。そして甲府局担当者と細部の打合せがなされたのである。そのある日のことである、甲府局取材班が是非現地を見たいと言う申し入れがあったので私が同乗して案内役を務めたのであった。」

「先ず通過人員の多い場所と時刻との関係から取材目標地として若神子、海の口を選んだのである。

最初に若神子に至り現地の状況を視察した上、無線のテストをしたが上々であった。続いて清里駅と国境橋間の見晴しのよいところでテスト。これまた異状はなかった。次は野辺山駅前でテストしたのであるが、ここでは雑音が入り過ぎお互いの会話を聞き取るのが困難な状態であった。恐らくこれより先は駄目だろうと言うことであったが、ともかく海の口へ直行しようと言うことになった。海の口は千曲川に添った谷あいの町である、羊腸の如く曲りくねった坂道を降り海の口へ到着した。もう昼である。食堂で食事をとった後テストを開始したが全然甲府局からの応答がないので、無線では不可能であることが確められた。従って画像の現地中継は出来ないのでは、有線による声の実況放送をすることにしたのである。

さて当日(15日)のことである、午後7時には先ずスタート及び校門を出発する光景を、次いで午後9時頃から11時頃までは若神子救護所の生徒通過のシーンを録画したのであるが、時を同じうして記念記録映画撮影とが重なり、夜中にライトに照し出された救護所一帯は時ならぬ賑を見せたのであった。

翌日の午前7時頃には取材班は海の口へ飛び、生徒の通過状況等の実況放送を流したのであった。

「さてこのスタジオ102は日曜日を除き毎朝7時25分から開始されているのであるが、当日(16日)の甲府スタジオではテストが何回も繰返されてい

たのである、山田アナウンサーの顔も心もち上気しており、出演者の広瀬校長、OBの島田武氏の顔もいささか緊張していた。私は校長と同道した関係から甲府局に来て、スタジオの二階のガラス越しに、このテスト風景を見守っていた、そして本番になるのを今か今かと待ち構えていたのである。

時が来た、いよいよ本番である、最初に小諸コースの地図を指しながら語るアナウンサーの声が流れてきたのである。この地図によって本コースの概略が説明された後、出発と若神子救護所風景が映し出された、その後校長と島田氏との談話があってから続いて海の口からの現地放送があって、ここに無事終了したのであった。

これより先、取材係との打合せのあった際、私は小諸コースばかりでなく大正13年以来今日に至るまでの歴史の概略をも放送してもらいたいと要望したのであるが、放送時間に制約があるので出来ないと言うことであった。

今ここに40回からの各種の統計、コースの変遷等を収録し放送されたとすれば、この効果は倍増されたのではないかと惜まれてならなかった。

しかしかくしてこの強行遠足は全国に紹介されたわけであるが、その反響として各地から照会の手紙がぞくぞく舞い返ってきて、その応待にうれしい悲鳴をあげたものである。

その一例として、遠くは福岡の某小学校の校長が本校に見えられたので、私はその内容につき、いろいろと説明し又質問にも応じたのだが、その校長は非常に感激して「来年はうちの先生を見学のため派遣するのでよろしく御指導願いたい」と申し添えて帰られたのであった。

——噂は千里と言う言葉がある——

○可愛い虎の子が戻ったと言う話

「第40回の時であった」と某先生は語り出したのである。

「私は全線巡視係として、小諸附近へ差しかかった時、先頭に行く内藤君(1年生)に逢ったのである。見れば汗にびしょり濡れながら歩いているのではないか、これはいかんと吃嗟に私は彼にシャツを買って与えるべく洋品店を探したのであるが、何にしる朝の6時頃である、戸の開いている店が無いのであった。しかし尚も探し続けているうち、やっと戸を開けている店があったのであわてて飛び込みシャツを一枚買ったのである。その際1,000円札を出したが釣がないと言う、そこで私はあちこちのポケットを探してやっと小銭を見つけて払い、そのまま店を飛び出し内藤君の後を追ったのである」と

「さてその後のことであるが」と先生は笑いながら再び話し出したのである。「私は買物をしようと思って財布をあけると、どうしても1,000円不足しているのである。おかしいなと思っているうち、ふっと先刻の商店のことを思い出したのである、ああそうだ、1,000円札を出したまま受取らずに飛び出して来てしまったことに気がついたのである。そこで早速戻って見るとその時はどこの商店も皆戸を開けていたので見当がつかなくなつて了つたが、それでもやつのこと、その商店を探し当ててその話をしたところ、店の人もそのことをあとで気づき一応警察署へ届けて置いたと言う話であった。とにかくその1,000円札はかくして無事に私の手に戻つたのであった」と言う次第。

——情は人のためならずと言う言葉がある——

○文明の利器は大いに活用すべしと言う話

いつの時代からか全線巡視係と言う勤務があった。これは名の通り全コースを巡視すると共に事故者の救護収容、交通指導、連絡等にあたるのである。まだ最近のように自動車を利用しなかつた時代には、自転車であったり又は汽車、バス、徒歩を折り込んで巡視したものである。しかも一休一睡もせず動き廻つたのである、もっとも生徒も徹夜で歩くことを考えれば我々としても安閑としていられないのである。然してこの巡視の最大の任務は何んと言っても事故者の救護収容にある故自転車などでは収容することは不可能であり、ましてや徒歩の場合は運搬すら困難である、急を要する事故者の場合はまことに不便であった。

かつては自動車利用は生徒に悪感情を持たせるものであると、無用の長物視し且つは生徒に遠慮して利用されなかつたのである。然しこの悪感情の云々は自動車の利用如何によるものであって近代の文明の時代にこの利器を利用しない法はないのである。殊にこの機動力を利用することは救急を要する場合に於いては然りである。最近に至りこの意義を理解する者が多くなつてきたのは何よりである。特に安全歩行を建前とするこの強行遠足には、学校側からは勿論のこと、PTA、同窓生の方々からの協力により何台かの救護車が動員され、万全の配備がなされているのである。

さて一方運転者にとっては大変な労力である。一見車に乗っているので楽に見えるが決してそうではない。長いコースを徹夜で走り廻る上に安全運転で緊張又緊張の連続でその神経疲労と言うものは並大低なことではなく経験のない者には想像がつかないだろう。巡視にあつても決してスムーズに行われたわけではない。ある時はパンクしたり、エンジンの調子が悪く油だら

けになって応急修理をしたり、又は相手の車に接触されその修理の交渉に手間どったり或は事故者の連絡を受けて出動したり、救護所の苦情を調整したりするなど、いろいろな間の手が入ったりするのである。

ところで、どの勤務も楽なものはないのであるが私も幾度か経験した一人であるが、その苦勞は人一倍味はっているのである。最近では体の不調から運転はせず、もっぱら若い元気のある先生方をお願いしている次第であるが、その元気のある若い先生方でさへこう言っているのである。

「勤務が終つて自宅に帰り着くや否や、いままでの緊張が馳み俄にがっくりときて、それこそ無我夢中で眠りこけたものだ」と。

——論より証拠と言う言葉がある——

○牛君に説かれたと言う話

信濃大町コース時代のことである。何年頃からか予行練習をすることになっていた。この予行は体育科が中心となり企画準備がなされ、その目的とするものは本番に準じた実施要項、諸規定を設けてあるので、その要領を会得させるとともに予め自己の体力を認識させ、それに基く歩行計画をたてさせるのであった。

コースは年次とともに変遷したが後代に至つて、交通安全のためまえから釜無川→笛吹川→荒川等の堤を利用して歩行させたのである。「実施に先立ってコースの調査をした時の話である」とある先生は話した。

「私は高野恵美子先生（現石和高校勤務）のスクーターの後部へ乗せてもらい途中の調査をなしつつ、笛吹堤へ差ししかつたのである。すると牛が何頭も点々として道の真中で草を食べているではないか。恰かも通せんぼをしている様である。私達が近づく、こちらを向き角を立てて睨むのである。そして耳を動かして示威運動(?)をするのである。これには弱りました。そこでためしに警笛を鳴らして見るとその牛君は、よけるどころか（これは人間にしか通用しないことを知つた）さも煩きそうにじつとこちらを見るばかりで換でも動こうとしない。馬の耳に念仏と言うが牛の耳には何んと言うのであろうか。丁度その時、主人と覚しき人物が、堤下の畑で仕事をしているのを発見したので大声で呼びかけた。

『もしもし、この牛をどかしてくれないか』と。すると主人の曰く

『その牛はおとなしいから大丈夫だよ』とこれ又大声で答えたのである。しかしそうは言われたもののうっかり近づけないのである。人を噛む犬でも飼主にはおとなしいものだ。まして相手は角を持っている大物である。赤の

他人に、はたしておとなしいかどうかわかったものではない。まだ時々胡散臭そうにこちらを睨む牛君のあの目つきが気に喰はぬのである。そこでしばし牛の様子をと見てあれば、野放しではなく何んと綱が堤下に伸びているではないか、そこで一策を案じ堤下へ降りて遠くからその綱を手繰り寄せて牛君を堤下へ誘導した。そしてその際に爆音も勇ましく脱兎の勢で通過したものであった。行く先々このようなことを2、3回繰り返して、やっとの思いで無事笛吹堤をバスして帰校したのであった」と。

人にはそれぞれ知らぬ苦勞があるものではあるが、その時の2人の困った様子が目に見えるようではないか。

——窮すれば通ずと言う言葉がある——

○しじみ汁と草鞋とで占つたと言う話

しじみ汁と草鞋と言うと強行遠足には欠くことのできないもので、強行遠足の象徴とも言えるものである。

さて信濃大町方面コース時代のことであるが、いつの年次からか岡谷が本部となりこゝでしじみ汁を接待したものであった。初めのうちはこのしじみ汁は特に諏訪湖産のものを買入れたものだったが、その後には諏訪湖産は少くなり、大部分は千葉方面のものを買入れたと言うことである。味は何んと言っても諏訪湖産に限るのである。

当時は味噌汁ばかりではなく、途中に於いてはお茶は勿論のこと砂糖入りの甘い麦湯などの接待もしたのではあるが、何んと言っても岡谷本部のしじみ汁の味は又格別である。生徒はこのしじみ汁の味力(?)に引かれて遂には歩を岡谷まで伸ばしたものである。ところが早いうちは中身の入ったものであったが遅くなると貝殻ばかりの代物となって了うが、それでも汁は本物である。この外ただの味噌汁は台ヶ原、塩尻、松本にもあったのである。

さて生徒は昼には学校を出発し夕方には台ヶ原につき、こゝで中休をしつゝ味噌汁を吸う。次にはとう峠の難所を越えて麓の塩尻救護所につき、やれやれ一服と言うわけでこゝでは豆腐の味噌汁を飲み元気を回復、あと16キロある松本を目指して一気に歩くのである。松本でも又味噌汁である。

こゝまで来れば一応は目的を達したと言うので中止する者もあり、まだ頑張るべく遠く行くのだと言う者もあり、正に根性の分岐点とも言へる要衝の地であった。1杯15円也の味噌汁を2、3杯平げ、身ごしらへを直し、再び元氣よく大町方面を目指して出発して行く生徒に対しては最後の激励なる拍手を送りその門出を祝ったものであった。

最近に於いては小諸方面コースでは清里に味噌汁、野辺山本部ではしじみ汁の接待をしているが、長野県側に入ると沿道の人々が牛乳、パン、リンゴ等の接待をしてくれたりしてその親切には心打たれたものであった。

さて次には草鞋のことを語らねばならぬ。現在では草鞋の入手が困難であるとともに、不慣れなものを履くよりも、履き慣れた運動靴を使用するよう指導しているが、従前では強行遠足と言えば草鞋はつきものであった。従ってこの草鞋を買うべく方々を駆けずり廻ったのである。遠くは市外地まで買いあさりに行ったものである。その後この不便を補うため購売部で販売したり又救護所等にも若干の用意をして置いたものである。尚驚ろいたことには甲一の強行遠足をあて込んで沿道で販売する小店も出る仕末であった。

さて当日の生徒の出立ちとは見てあれば軍帽ならぬ制帽にあご紐をかけた軍服ならぬ制服にはゲートル巻の草鞋かけ、肩からは水筒、雑嚢を十字にあやなし、腰はと見れば予備の草鞋を3、4足ぶら下げ、手には銃剣ならぬ竹の杖を持ちまことに颯爽たる姿と見受けたのである。(後代に至り、そのいでも次第に変わり、現在では学帽、制服上衣、白ズボン、運動靴と言う、いたって身軽な服装となったのである)ところでその草鞋のことである。各救護所では履き捨てられた草鞋が山のように残るのである。それを処理する先生方の苦勞も大変であったが、その反面数の多い程又張り合いがあったと言うものである。岡谷本部に於いても亦然りであった。

こゝへ到着した生徒は先ずしじみ汁を飲んだ後少憩し、新しい草鞋に履き換え足まわりを嚴重にして出発して行くのであるから、汁の方は少くなり古草鞋の方はふえる一方である。従ってしじみ汁と草鞋は正に逆比例するのである。この様子で、その年の盛衰を占なったものであると言うことである。まことに今昔の感があるではないか。

○強行遠足の副産物と言う話

第37回と言えば信濃大町コースを小諸コースに変更した最初の年である。そして男子は松原湖を終点としたのである。

これより先、実行委員会に於いて、終点を海の口にするか、松原湖にするかについて論議が分れたが、私は何にもない平凡な海の口より景勝地である松原湖を選んだらどうかと提案した結果同意を得て松原湖に決定したのであった。

「さてその松原湖での出来事であった」と関係者であった某先生は語り出したのである。

「私は男子出発係を勤務の後、箕輪新町で女子の出発を指示してから、こゝに待機していた巡視車に乗って松原湖に向った。私は以前にこの湖でスケートの宿舎練習をしたことをなつかしみながら湖畔にある救護所に着いたのである。見ればなかなか眺望の良い場所である。周辺の山々は松の緑と紅葉があやなしそれが紺碧の鏡のような静かな湖面に映えていた。

この救護所の主任は小宮山先生（現石和高校長）であった。生徒はと見ればこゝが終地点と言うことからか、又はこの美しい景色に魅惑されてか、それともバス待ちか知らぬが、どっかと腰を据へ動かなくなって了っているのである。この時2人の卒業生が参加していたのであるが、そのうちの一人が主任にこう言うのである。「我々はすっかり疲れ切っている。駅までの乗物を何んとか心配してくれ」と又「そのような手配のしていないのは無責任も甚だしいではないか」とも言うのである。その卒業生の抗議と言ひ、その出過ぎた態度と言ひ、流石の温厚な主任もいさゝか立腹の様子であったが、それでも折り良く停車していた救護車に駅まで輸送するよう依頼し尚後の残留者に対してはバスを待つように指示したのである。

私は丁度その場に居合せていてこの様子を見ていたのだが、一応注意して置いた方がよからうと考えその卒業生を呼んで言ひ聞かせたのである。

「君等卒業生が参加してくれることは大歓迎だが、学校の計画の内容も知らずに勝手な解釈をしてはいけない。生徒の方ではどうしたらよいかは知っている筈だ、知らないのは君だけだ。君が二度とこのような出過ぎた真似をしたら次は遠慮してもらわねばならない」とたしなめたのである。

だがこうは言ったものの、私は個人的には乗物を探しに麓へ下って行ったが適当な乗物が見つからず、再びこゝへとって返したのであった。ところがこの時には既に残留生徒は全員バスで駅へ向った後であった。

私はこれでやれやれほっとした気持にはなったが、何んとなく後味が悪く不愉快ではあった。だが私は松原湖を主張しただけに、今こゝでトラブルが起ってはまずいと思っていたが幸い無事に済んでよかった」と話し更に続けてこう語るのであった。

「その後暫らくたったある日のこと、その卒業生が来校した折、当時の出過ぎた行為を私に陳謝してきたが、これは当然であるとは言ひながらも今の青年にはなかなかできないことである。その点流石は甲府一高の卒業生であり又この強行遠足を通しての精神の現われであろうかと私は私なりの感じ方で感心したものである」と当時を回想しながらこう話を結んだのであった。

—あやまちを改むるに憚ること勿れと言う言葉がある—

○眠る大人は育たなかつたと言う話

「終戦後昭和22年（第23回）の時、この時はまだ併設中学校時代で私の5年生の時のことであつた」とある卒業生が語るのであつた。「私は5年生として最後の強行遠足でもあるし又最後の思い出として立派な記録を残して卒業したいと思ひ、当日は張切って出発したのである。当時は昼の12時に学校を出発したのであるから、脚の早い者は国界橋あたりで暗くなりかけてきたものである。既に晩秋と云うか初冬と云うか寒さはひしひしと身に沁みてきた。仰げば一点の雲もなく晴れ渡った空には無数の星が俄かに輝きを増してきたのである。吐く息もライトの光芒の中に消えて行く。あたりは全くの闇となり、唯自分の足音と杖の音が自分の存在を明らかにしているに過ぎなかつた。さて某救護所へ到着した。ところが係先生の姿が見えないのである。そこで大声を張りあげて到着したことを告げると奥の方から睡た気な顔をして先生が出てきたので早速検印をして戴き又そのまゝ歩き出したのであつた。

その際先生がこう言ったのである「君の到着があまりに早過ぎたのだ」と。然し私としてはこう思つたのである。「私達がこうして夜を徹して疲れも我慢して歩いているのに、先生達は炬燵にうもれて眠り、しかも検印所の準備も間に合わぬと言うのはあまりに無責任ではないか、もう少しは私達の苦勞をも察してもらい度いものだ」と。「私は行く先々で何回かこのような目に逢いながら私は私の最善を尽して松川へ到着したのであつた。こゝへ到着した者は、私の外に同じ5年生であつた某君と2人だけであつた。こゝがこの回での最高記録であつた」と、そして更に話を続けてこう結んだのである。「何回か不愉快な思いをしたが、こうして検印所の先生方を起しながら歩いたことは、今にして思えば懐しい思い出の種となつたのである」と。

—油断大敵と言う言葉がある—

○女が三人以上集まれば何んと言うか（？）と言う話

「信濃大町コースで女子は台ヶ原終点の時のことです」とある先生は私に茶をつぎながら話すのである。

「女子の出発は朝の8時で、距離もあまり遠くなかつたから殆どの生徒が到着し、この救護所（現白州町農協）は時ならぬ賑わいを見せたものです。殊に女の字を三つ重ねると何んやら読むそうですが、それが200名位の生徒だから凡そご想像がつくことでしよう。それに尚男子の応援をしたく

て（男子の出発はその日の昼の12時でした）こゝに居残る者の整理と日野春駅へ輸送する者の整理とで又一仕事と言うわけで、それこそ天手鼓舞と言うのはこのことを言ったのでしょう」と。

因にこの地点は交通が不便であったことから、生徒をトラックで日野春駅まで輸送したもので、この不便を解消するために次回は日野春を終点地に改めたのである。

—三人寄れば文珠の智恵と言う言葉もある—

○男と言うものは(?)と言う話

「昭和8、9年の頃だったと思うが」とストーブを囲みながらある先生が話し出したのはこうだ。「当時私は巨摩高女（現巨摩高校）に勤務していた。ある日突然に母校（甲中）から弟のことで召喚状を受けたので、何事かと思いながら学校へ行くのと応接室へ通された。見ると弟と母親とが某先生の前でかしくまわって居るではないか。私が挨拶をして席に着くや否、某先生は「弟が強行遠足の際酒を飲んだので処分する」と言うのである。私は幸か不幸かその時は教護連盟の一員であった関係もあり、弟の監督不行届の点をお詫びすると同時に、物も言わずに弟の横面を2、3回張り飛ばしたのである。その音が大きかったので張り飛ばした私も驚ろいたが、尚驚ろいたのは某先生の方であった。眼を円くしてまあまあと私をなだめたものだが傍にいた母親は泣き出す仕末であった。私は撫然としてしばし沈黙をしてしまった。さて帰宅してからの話である。

私は弟に「ああするより外は無かったのだ」と弁明すると彼は「少々痛かったが兄貴としては矢張りああするより外はなかっただろう」と言って頬をなぜ廻したのである。そこで私は詳しく経緯を聞いて見るところであった。

「確かに僕は酒を飲んでいて仲間と一緒にいた。今更兄貴の前で嘘を言っても仕方あるまいが正直僕は飲まなかったのだ」と言う。そこで私は「正直に有りの儘を説明すればよかったのではないか」と反問すると彼は答えて言った「今更誰が飲んだとは言っていないし、と言って自分は飲まなかったと言うといかにも弁解しているようで男らしくないと思ひ言わなかったまでだ」と。そして自ら罪を負ったのである。私は弟（末弟）の肩を持つわけではないが、私も当時は若かったもので、その一言を聞いて「良くやった」と言って褒めてやったものである。彼は私と違って到って剛毅な質と親分肌を持った男で、山長のあだ名を持っていて上級生からも恐れられていたと言う話を聞いていたが、その彼が甘んじて無期停学を受けて終日家の中に籠り専ら恭順の

意を表していたことを思うと、今でも可笑しいやら、不憫やらでその様子が目に浮ぶのである。今でもこの愛すべき弟を信用しているが昔の生徒の中にはこんな一面をもっている生徒もいたのである」と

—義を見てせざるは勇なきなりと言う言葉がある—

○長野県人は義理堅かつたと言う話

「小諸コース第40回の時には私は野辺山本部に勤務していたが、その翌朝のことなのだが」と某先生は話し出した。

「俄かに近所の人達が集ってきて、盛んに生徒のために拍手を送り声援してくれるのではないか、これにはいささか面喰って一体これはどうしたわけかと怪しんで、その理を聞いて見ると「今朝のスタジオ102で甲府一高の強行遠足を知った。その中で特に長野県人は親切であると言う談話があったが、それを聞けば私達は家の中にじっとしてはいられなくなったので、かくは応援に駆けつけたのである。」とは近所の人達の弁であった。「恐らく全線にわたってこのようなことがあったのではなからうか」と先生は「スタジオ102」の反響について話されたのである。

○強行遠足は二の次だつたと言う話

「私の時代には本コースは信州街道で、その他のコースは金桜神社行であった。さぼりの連中はこの金桜行を選んだものだが、私は本コースを選んで参加した。私の家は長坂にあったので、いつも途中で中止して家に帰り一休みし、翌日は〇〇高女の運動会を見に行ったものだった」とはある先輩の話しであったが、これには更に裏話があるのである。彼が目標としたのはその学校の在学の彼女である、彼は大学を卒業するや否彼女とゴールインしたのであるが、その彼は今では孫が2、3名あるいゝお爺ちゃんである。

—敵は本能寺にありと言う言葉がある—

○強行遠足は精神鍛練の場であると言う話

「君、この強行遠足と言うものは歩く鍛練と言うより寧ろ精神の鍛練に役立つものだよ」とある先輩は次の例を挙げて語られたのである。

「昔のことで、今の梨大の前身だった山梨高等工業学校に在学していたある本校卒業生が嘗て本校5年生当時の強行遠足で頑張りに頑張り通して、遂には松本（120キロ）へ到着したがその述懐に曰く（人生は唯頑張りあるのみ）の哲学を悟ったと言う。

又当時の第一高等学校に在学中だった矢張りある本校卒業生が帰省した時、本校のある先生に語った話にこう言う話がある。

「野外教練のある日同一学年の者は皆疲労困憊して落伍したが、自分は嘗ての強行遠足のことを思い出して猛然たる勇気を振り起し、とうとう最後まで頑張り通した」と言うのである。

「どうだね君、百の金言も何れの名訓も机上の空論では価値がないよ、真の体験から得た教訓はまことに尊く強いもんだね」と言って話を結んだのであった……。

— 不言実行と言う言葉がある —

○強行遠足は感情の融和を計るによいと言う話

信濃大町コース時代のことである。毎年4、5年生の若干名は1、2年生の足弱生徒をいたわり介抱しながら優秀線まで連れて行くのを見受ける。

1、2年生に優秀者の多いのは、このようになくれた蔭の力が預かっていたのである。これと言うのも弱者に同情する武士道的精神、自己犠牲の尊い行為であるとともに長幼相接触の好機会でもあったのである。又師弟の間にも美しい話が在したのである。ある一生徒の後日談に「僕が桔梗ヶ原（塩尻と松本間）の淋しい道で、かつては時々追剥などが出沒して夜などは通行人を脅かしたなどと言う話が伝わっていた）で巡視の先生に戴いたキャラメル程おいしかったものはなかった」と又真夜中、2、3の級友ととぼとぼ辿る淋しい田舎道、互いにもは語る言葉もなく淡いライトをたよりに只管前進を続けている時、学校名入の提灯を掲げた巡視の先生に会う、その事だけでも彼等は飛びつく程うれし、ましてや情のこもったいたわりの言葉をかけられた時の彼等の感激は一層のものだった。こうした何んでもないような事でも、こうした機会には強い感激は又感謝となり、不知不識のうちに師弟の情誼が結びついて行くのである。

—（強行遠足の意義とその実際—昭和17年発行）より—

○まことに遺憾に存じますと言う話

暗黒の中から数流の白い幟が忽然として電灯の光芒の中に現われた。

まさかこの時刻にデモ行進でもあるまいにとじと目を凝らしてよくよく視ると何んと生徒の集団であった。出発の際には影も形も見えなかった幟である。この幟には「風林火山」「甲一生頑張れ」の文字が見え、なかなか勇ましい光景であった。だが私は直ちに彼等からその幟を押収したのである。まことに無情のようではあったが私はこれでいいのだと考へたからである。何故ならば、真剣に歩こうとする生徒は出来る限りの軽装で、歩き易い体勢を整えているのである。従ってこのように幟を持って果たして自己の最

善を尽し得るかどうか。又このようなことが強行遠足の真意に叶うことかどうか、或はこのようなことを許したならば、来年からは恐らく奇を衒う生徒が我も我もと持ち歩くようになり恰かもお祭り騒ぎに情ずるであろうことを恐れたからである。私は強行遠足の長い歴史のなかで未だ嘗てこのようなことを見たことも聞いたこともないのである。

私は中学時代決して優秀(?)ではなかったが劣悪でも無かったと自認している。その時代の私の気持も彼等とは恐らく五十歩百歩の類であったろう。だから彼等のそう言う気持がわからぬでもないが、逆言すればわかるが故に尚このようなことは許せないのである。又巡察係としての立場から見ても尚更のことである……。

私はこゝを巡察車で出発し次へ前進して行ったがその途中で又々幟を持った生徒が道端に休んでいるのを発見しこゝでも幟を押収したのである、この時この生徒は言ったのである「僕等は仲間の意気を盛んにさせるため、又応援をするため持ってきたのである」と

然しながらこの生徒は氣息奄奄として道端にエンコしているのである。而も殿の方である。これではどっちが応援してもらっているのかわからぬ状態ではある。他の生徒は彼等の前を通過するのだが唯一人として彼等を一顧だにしない寧ろ侮蔑の目で見て過ぎ去って行くのであった……。

又この生徒は言うのであった「酒を飲むことより、この方がまだよいことではないか」と、然しこれは「目糞鼻糞を笑う」の類である。又「他校でもやっているではないか」とも言うのである。私は「他校の真意が何処にあるかは知らぬが甲一には甲一としての長い伝統があり又精神が存する。敢えて他校の真似をする理由は更々に無いのである」と。

このようなことがあったが、この強行遠足が無事に終了を告げたある日のこと私は彼等を職員室に呼び、その真意を糾し、その非を問うたのである。ところで恐らくこの問いに対して反発するだろうと予想していたところ、そのような気配もなく素直にその非を悟り、あやまちを詫びて帰ったのであった。流石は甲一生である。物わかりは良かったのである。これならば来年の強行遠足は立派に出来るだろうと一安心したのである。

「甲一の強行遠足はこのようにきびしいのである。だからこそ40回の歴史が維持されてきたのだ。又このようなきびしさが今後の強歩を継続させて行く所以のものだ」と〇〇先生は語ったのであった。

— 親の心子知らずと言う言葉がある —

○危機に立った甲府中学校と言う話

この伝統ある強行遠足と雖も学校あつての存在である学校無しでは存在し得ないのである。従つて学校のある限りこの強行遠足は続けて行くものと思ふのである。

その学校が存亡の危機に立ったと言う大事件があつたのである。当時の人々は未だ忘れ得ないことであるが現在の人々は知らないのでは無いかと思ふので敢えてこの際こゝに御紹介するのである。

時は正に昭和4年の秋(?)であつた。或る朝突然に某新聞の全国版にしかもでかでかと「甲中生、反軍国主義を決議す」(題名は忘れたがこのよふな意味であつた。)と掲載されているではないか。そして7、80名の生徒が御崎神社の境内に集まつて決議したと言うのである。この朝登校したらもはや学校中ではこの話でもちきりであつた。特に4、5年生は皆目の色を変へて議論が沸騰していたのである。

もう勉強どころの騒ぎではないのである。それこそ学校の存亡にかかる事態が巻き起つたのである。当時は軍国主義の華やかな時代であり、軍人に非ざれば人に非ずとまで言われた。遠くは日清、日露の戦争に大捷を博し、不敗を知らぬ神国の帝国軍人であり軍隊であつたのだ。各中学校以上の学校には軍より派遣された配属将校により軍事教練が課されていて益々軍の拡充強化が企図された時代であつた。従つて軍に睨まれたらそれこそ立ちどころに学校の1つや2つはつぶされることは朝飯前の仕事であつた(?)と思ふのである。さてこの日からと言うものは4、5年生による集会が開かれ事件の究明にとりかかった。特に4年生の中にその犯人がいると目され、5年生の委員から一人一人指名され立たされて尋問されたのである。当時の最上級生はある意味では教師よりこわかつたものである。又5年生はそれだけの貫録もあつたのである。

こうして2、3日間集会が持たれ真相を究明したのであるが、その結果は「無」であつた。「泰山鳴動して鼠一匹」と言う言葉があるがその一匹の鼠さへいなかつたのである。その集会のある日、時の江口俊博校長が一同の前に姿を現わし「この事件は本校にとってはまことに存亡にかかる大事件である。本校の名誉にかけてもきつと解決して見せるのでこの僕に総てを委してくれ」と言つて拳で大きく胸を叩いたのである。一同はこれを了承したので直ちに学校長は5年生の幹部を引き連れてその新聞社に乗り込んだのである。

一時は血気に逸る大勢の生徒がその新聞社になぐり込みをかけると言う噂も飛んだのである。そこで学校長がこれを制し自ら陣頭指揮に立つたのである。

こうして新聞社に乗り込みその事実を究明したところ、まことにその記事とは相違して御崎神社へ集まつた者は7、80名が2、30名となり、最後には3名だと言う話になつた。そこで「その3名の氏名を知らせて欲しい」と言つと「知らせると学校では必ず処罰するだろう、それでは可愛うさだ」と答えて到々その3名の氏名はわからずじまいになつて了つたのである。要すれば誰もそのようなことをした者はいなかつたのだと言う結論に達しその記事の訂正を約して引きあげて来たのであつた。

このような大波乱を巻き起こした大事件もこうして終りを告げてまずはめでたしめでたしと言うわけではあつたが、私達としてはどうもすっきりせず尚その後もこの話について色々話題が出たのである。

その当時どう言うわけか知らぬが、何かと言うと甲中生のちょっとしたことがすぐ書かれたのである。何にか含むところでもあつてこのように書かれるのでは無いかと私達は言い知れぬ不満を持っていた。その矢先にこの事件であつた。当然甲中生は黙つてはいられない、猛然と立ち上つたのも無理はないのである。

これは後日譚であるが当時柔道部の猛者であつたある先輩と逢つた時、当時の昔語りに花が咲いたがたまたま話がここに来た時私にこう話してくれた「俺はどうもあの記事は初めから臭いと睨んでいた、これは甲中に反感を持っている奴の仕業だ、俺は誰がこの記事を書いたかその記者を洗つて見ると矢張り俺が思つていた通りの奴だつた。そこで俺は個人的な義憤と言うか正義感と言うか、俺は今ではこの通り頭は禿げているが(彼はそう言いながらちょっと寂しげに頭をなぞて笑つた)その頃は若かつたからね、どうにも我慢が出来ず奴を引張り出して気のすむまで散々ぶんなぐつてやったよ」と腕をさすりながら高笑いをしたのであつた。

——人を呪わば穴二つと言う言葉がある——

○強行遠足資料の発見

昭和33年頃から交通事情の悪化にともない伝統の強行遠足に対する批判がポツポツ学校内外で聞かれはじめ昭和36年には甲府商業高校の女生徒が強歩中に病気のため死亡するなどの事故で強行遠足に対する是非の論議が大き

クローズアップされ世論はもとより職員会議、PTA、同窓会など賛否両論が沸騰した。私はかねてから伝統の強行遠足は24時間自由に歩けるだけ歩くと言うことで始まり30余回行なわれて来たが、はたして一人平均どれくらい歩いたのだろうか、延料程にしてどれくらいになったのか、戦争の影響が歩行距離の上でみられるか、昭和初期と現在との生徒の体力、精神力の差をみることが出来るかなどの興味と関心を強くもっていたので強行遠足についてのあらゆる資料を整理してみたいと思い、記録をさがしてみたが、昭和16年の第18回の記録を主としたもの、昭和18年の記録を主としたものの強行遠足出版物の他は見当らない。そこで校長先生にお話しして資料さがしをはじめた。昭和24年以後の成績記録綴りは職員室の教務係の戸棚に大切に保存されていたのですぐに探し出すことが出来たが、それ以前のものはない。そこで古くから本校においてになる先生方にお尋ねしたところ本館東の倉庫（階段下）か図書館の倉庫ではないかとお話しなので東倉庫を探してみると昭和21年から23年までのものが出て来た。しかしそれ以前即ち戦前のものは見当らない、図書館も探してみたが。あるいは戦災の折にでも消失してしまったのではないかと思ひ意気消沈してしまったが、東倉庫には永久保存の学籍簿など多数の書類が山積している、あるいはそれらの中に一諸に保存されてはいないかと気を取り直おして冬休みに入ってから今一度東倉庫の中を探してみると戸棚の一番奥の古い学籍簿の下に大正15年（第3回）から昭和19年までの成績記録綴りが整然と積み重ねられていた。昭和16年の印刷物から予想してどこかに保存されているのではないかと思ひはいたが、途中一回の紛失もなく全成績記録綴りを発見した時には喜びと共にこれほどまで完全に保存しておいて下さった先生方のご努力に感激するとともに強行遠足を貫ぬく言い現わしようのない精神にただただ頭の下る思いがした。

尚記録映画については従来昭和17年撮影のものと昭和33年撮影の「若き脚の記録」のみと思っていたが昨秋強行遠足の記録綴りの中から昭和25年「70周年記念強行遠足」というシナリオが出て来たので校内の先生方にお尋ねしたのだがはっきりしないため、昨春退職された石丸午郎先生、南高校の小木曾先生にお尋ねして撮影したことがはっきりしたので図書館を探したところ「70周年記念強行遠足」の外に昭和11年撮影のフィルム（強行遠足の映画ではもっとも古いもの）まで発見して早速映写したところ非常に立派な記録映画なので喜びかつ驚嘆した次第。

○回数が途中でズレた理由

強行遠足は大正13年に始まり昭和40年までの42年間に途中2回中止しただけで40回実施されたわけで昨年までの成績記録綴りも37冊（第1回第2回なし）あるのに本年が39回とはどうしたことだろうと思って調べてみると、第21回（昭和19年）が記録綴りの表紙に「戦時中につき盆地一周とす」と記されて回数からはずされている。したがって終戦の翌年21年が21回になり（20年は終戦と食糧事情などのため実施せず）以後33年が33回（34年は台風被害のため実施せず）35年が34回39年が38回となって居た。ところが昭和19年は表紙の記載と中味は異なり、戦時中であつたので（3、4、5年生は学徒動員のため学校に不在）1、2年生だけで小野まで実施しているので本年回数に加えた。そのために回数が一回ずつズレてしまった。戦後の混乱のための手違いと思われる。従つて本年は強行遠足の予行は第39回で、本強行遠足は40回で実施した次第である。

○道路調査の思い出

昭和9年第11回以後本年まで強行遠足には実施の約1ヶ月半位前に最低一回必ず道路調査が行なわれて来た。これは全行程の道路状況（交通状況、危険箇所、工事箇所、迂回路、迷いやすい所）の調査、距離の確認、沿道の伝染病の状態、救護所、検印所、駅、市町村役場、警察、教育委員会、病院などへの協力方依頼、挨拶など実施に必要な沿道の調査、交渉を行うためのもので昭和9年の第1回の道路調査は二人の先生が、富士見から辰野までの間を徒歩で実施されたのだがそれ以後は3、4人の先生方がそれぞれ分担を決めて徒歩又はバスで行ない、戦後は自動車によって実施している。私もすでに十数回この道路調査に参加しているが特に感じていることは毎度のことながら沿道の関係者の方に親切でしかも積極的に協力して下さることである。

昭和33年の事である。この年は「若き脚の記録」撮影の下見もかねて9月早々に第1号車に斉藤校長、須藤先生、小木曾先生、私、第2号車に窪田教頭、石丸先生、花輪先生、土橋先生が乗り早朝学校をスタートした、天気は晴れてはいなかったがそれほど心配することもなかったのに富士見峠にかかる頃から雨が降りはじめ、次第に風雨とも激しくなり、一杯にアクセルをふかしても30K位の速度しか出ない始末、茅野の手前まで行くとトラックが川に落ちそれを引上げるために、クレーン車が狭い道をふさいでしまい交通止、どしゃぶりの風雨の中で外に出ることも出来ず2時間近く両車ともストップ、はじめの内はこれからの予定、撮影の下見箇所などを話していたがついに皆だまりこくって車窓にふきつける雨をながめて無言の行。やっと出発

したが風雨と2時間のロスのために第一日は予定の約~~8~~で打切ったが松本到着午後7時。翌朝は5時に宿を出て交渉は帰路にすることにし一路北進、青木湖畔まで行って引返し大町で朝食、沿道の交渉をしながら松本に帰り、第1日に残ってしまった交渉をしながら帰途についた。国界橋の手前まで来ると昨日通った仮道路は濁流の真只中、昨日は工事中で通行止めだった悪路を誘導しつつやっとなり切り抜けて、台ヶ原に来た所が小武川の橋が流失してしまって通行不能、やむなく平常は車などほとんど通らない様な坂道を七里岩の台地に上りしばらく行くと今度は前に行った大型トラックが路肩にはまり込んでしまってまたまたストップ、しばらく待っていたが通行の見通しもたたないので近くに居たお百姓さんに聞いたところ少し引返せば乗用車ならなんとか通れる道がある、と言うので行ってみると車がようやくと通れる田圃道で、ついにみぞに車輪をおとしてしまって進退きわまる。自力ではとてもどうにもならないので大勢の人に手をかりてやっとなりこのことで車を持ちあげて脱出、どこをどう通ったかわからないが、長坂、日野春、若神子を通して学校にたどりついたのが午後9時を過ぎていた。後日又途中まで道路調査に行っただがまったくツイテない道路調査だった。

○強行遠足ソビエトに行く

昭和38年末にソビエト大使館で通訳をされている河島さんと言う女性から学校長あてに次の様な手紙が届いた。

「前略……実は私はモスクワ大学ですこし勉強したものでございますが、その時大変お世話になったロシア人——くわしく言えば教育大の体育の先生にぜひ日本の資料をいただきたいと、帰ります時くれぐれも依頼されました。10月に帰って参りましたがプレオリンピックで忙しく、その時おめにかかった体協の方々にいろいろお世話をねがいこのほどやっとなり貴校で私のほしい資料があるとの御連絡をいただき筆をとっている次第です……略。

エヌ・カー・クラブスカヤ教育専門学校理論科の研究資料として次の質問にお答えいただきたいのです。

- 1、年齢に応じてどの位の行程をくむか。
- 2、1日の場合、2日3日の旅程の場合どの位のキロ数がいいと思うか。
- 3、その場合もっともよいと思われる時速
- 4、男子と女子との負荷重量。
- 5、行軍時間と休息时间。
- 6、何才以上から数日間の旅行をすればよいと思うか。又その日程は何日

位か。

後略」

質問の主旨と本校の強行遠足とは大部相違がある訳けたが、強行遠足の目的、実施要領、現在までの状況、意見などを書いてご返事したところ、39年の4月になり礼状を頂いたので（原文はわからないので訳文のみ）紹介しておく。

「拝啓 昨年末に突然お手紙をさしあげ貴校の強歩の資料をお願いしたものでございます。入手しだいすぐに訳して送りましたら丁度著作に間に合い大変よろこばれました。モスクワからの御礼状がおそかったのは3月まで多忙だったからだと思えます。今仕事が終わらためて貴校あて御礼がまいりました。それと切手を送ってまいりました。目下切手と本以外、ソビエトから自由に送れないのです。彼の手紙を訳すと共に重ねて私からも御礼申し上げます。なお訳文中専門用語でおかしい点もあると思えますが御判読下さい。」

○ ○ 様

河島みどり

「拝啓 尊敬する皆様、我々の実験的な仕事は我々の前に一つの問題を提示しました。即ち、学生の徒歩による旅行のための負荷量をどの位に決定したらよいかと言う問題です。この仕事は生活自体によって導きだされました。つまり我が国では現在大多数の学童が積極的にこの徒歩旅行（ヒッチハイク）に参加したからです。彼等のオルガニズムに負荷量、距離、行程の時間、時速などがどんな影響をあたえているかと言う点に関して我々はまだはっきりつかんでおりません。実生活でもわかるように児童の成長しつつあるオルガニズムの過労は健康上有害です。この事と関連してヒッチハイクを行う場合に彼等の健康を管理し、肉体的負荷量の厳格な標準を定めることが必要です。この問題について部分的解決はなされました。種々の研究結果と医学管理下に行われた実際的試みとによって我々は若いハイカーたち、中学生、12才～15才のための必要な標準をだすことが出来ました。皆様が御親切にお送り下さいました資料は我が国だけではなくもっと広範囲でのこの問題の状況について知らせてくれました。この事に対して深く感謝すると共に私どもとしましてはもし皆様が御希望なら実験の結果を御参考までにお送りしますし、何かに御発表下さっても結構です。最後にあたりましてもう一度御厚意を謝しあわせて資料を翻訳して下さった河島にも御礼申し上げます。

尊敬をこめて

セルゲイ・ペトラシアン

1964年4月4日 モスクワにて

」

編集後記

本校創立85周年記念行事の一環として実施された強行遠足、スタジオ102、記念式典、記念記録映画撮影、音楽会と多彩な行事を繰り広げられ、総ては成功裡に終止されたわけですが、唯一つ残ったのはこの沿革誌の編集でした。

この沿革誌についてはPTAからの理解ある予算措置を講じて戴き、この線に沿って編集を開始したわけであります。

これは毎回編集される実施要覧とは違い、その資料も遠く大正13年のものより求め、而もその不足を補ない、その不明を解明しこれを整理し其の他寄稿、談話等により更にこれを充足して、この長い歴史の概略の全貌を理解して戴けるよう編集に心掛けたのであります。然しながら何分にもこのように長い歴史を纏めること故、その資料の不足による不明な点、又は一貫性を欠き粗略に流れ或は重複するなど不備な点のあることは御容赦を願いますがその内容につきましても務めて正確を期したつもりであります。

私共は編集の重点としたのは第1回より第40回に至るコースの変遷とその時代のあり方等に就いてであります。即ち甲中時代から甲府一高時代に及ぶ時代の流れがそのコースを変え又その方法等を変えたことですが、その根底を流れる「強行遠足の精神」はいつの時代でも変わって来なかった事実であります。

私共は編集しつつ、数々の新しい事実を知るに及んで今更ながらこの強行遠足の偉大さは「ローマは一日にして成らず」の感を深くしたのであります。そして私共は本校に職を奉じている限りこの強行遠足のこの根本精神を寄り所とし、これを実行することによって生徒への教化を効果あらしむべく努力するとともにこの沿革誌を通じてこの精神とこの実態とを再認識して、万代までも伝承されて行くことを祈念するものであります。

編纂にあたっては学校関係者は勿論、PTA、同窓会の方々並びに寄稿、その他談話を寄せられた各位に対し、又本誌印刷のため多大な御配意を戴いた又新社に対し心から感謝の意を表する次第であります。挿絵については本校教諭三枝茂雄先生の、ご協力を得ました。

尚又本誌が大方の諸賢の御高覧に添うことができばまことに幸いと存ずるのであります。

(註) 英文のものも同時に編集する予定でありましたが諸般の事情により第二次計画として編纂したいと存じております。

編纂委員長 山 田 茂

委 員 和文=橋田 登、猪股正彦、
八巻啓光、根岸 昭、
平林弘光

英文=猪股松太郎、金子老男
藤田勇夫

昭和41年2月25日印刷
昭和41年2月28日発行

強行遠足沿革誌 (非売品)

編 集 者 山 田 茂
責 任 者

印 刷 所 甲府市丸の内2丁目30-17
株 式 会 社 又 新 社

印 刷 者 佐 藤 森 三

発 行 所 強行遠足沿革誌編集委員会